



日本語教育における
対話について考える

第19回 ヨーロッパ
日本語教育シンポジウム

2015年8月27・28・29日
ボルドーモンテーニュ大学

« Dialogues » in Japanese Language Education

The 19th Symposium on Japanese Language Education in Europe
27-29, August. 2015 Université Bordeaux Montaigne



目次

シンポジウム プログラム	9
--------------------	---

基調講演

書き手と読み手の対話 砂川有里子（筑波大学名誉教授）	19
対話は言語教育に何をもたらすか 細川英雄（早稲田大学名誉教授）	20
日本文学は日本語・日本文化習得にどのように役に立つか 牧野成一（プリンストン大学名誉教授）	21

パラレルセッション1:口頭発表

演劇プロジェクト授業における相互自己評価活動 中山由佳（早稲田大学）中川千恵子（早稲田大学）	25
先輩日本語学習者と協働での作文活動における対話の分析と そこから生起する学びの一考察 寺田恵理（早稲田大学）保崎則雄（早稲田大学）	26
学習者との対話-共同プロジェクト、自律学習支援サイト作成を通して- 鈴木裕子（マドリッド・コンプルセンテ大学）	27
日本語母語話者との対話をもたらす学習への影響 ～日本語教育実習生受け入れを通して～ 新谷知佳（ルジエス大学）	28
協働的学習としての日本語実習 岩内佳代子（セルジーポントワーズ大学）	29
日本語非母語話者の日本語教育実習生は授業観察を通してどのように成長するか？ 大和祐子（大阪大学）	30
B1レベルの対話能力養成のためのストラテジー指導 -『まるごと中級(B1)』の開発をめぐる- 藤長かおる（国際交流基金）斎藤誠（国際交流基金パリ日本文化会館）	31
やり取りにおける問題解決に焦点を当てた会話教材開発の試み 初鹿野阿れ（名古屋大学）岩田夏穂（政策研究大学院大学）	32

言語テストに基づくドイツ人学習者の対話型コーパス構築 村田裕美子(ミュンヘン大学) 李在鎬(筑波大学)	33
自律学習の明確化を導くインターネット日本語テスト利用 赤羽優子(ボン大学) 吉岡薫(ボン大学)	34
フランスの大学における日仏遠隔タンドゥム-対話を通じての自律学習をめざして- 竹内理恵(フランス・リール第三大学)	35
日本語教育における Skype を利用した遠隔交流の実践の試み -ミラノ国立大学と早稲田大学との共同研究 - ティツィアーナ・カルピ(ミラノ国立大学)	36
パラレルセッション2:ワークショップ	
日本語ネイティブ教師とノンネイティブ教師の対話 -ヨーロッパの日本語教育現場での協働を考える- 篠崎摂子(国際交流基金パリ日本文化会館) エヴリン・ルシーニュ=オドリ(国際交流基金パリ日本文化会館) 大島弘子(パリ・デイドロ大学) ジャン・バザンテ(フランス国立東洋言語文化大学)	40
日本語教育におけるパフォーマンス・ラーニング-演劇的知を活かす 仙石桂子(四国学院大学) Gehrtz 三隅友子(徳島大学)	41
マルチメディア『詩歌(ことばうた)ワークショップ』-芸術による相互関係の構築- 山崎佳代子(ベオグラード大学)	42
劇作りと対話 齊木ゆかり(東海大学)	43
パラレルセッション3:パネル	
「非伝達的」な日本語対話能力の存在・解明・育成 定延利之(神戸大学) 鎌田修(南山大学) 嶋田和子(アクラス日本語教育研究所)	46
「非伝達的」な日本語対話能力の存在 定延利之(神戸大学)	47
「非伝達的」な日本語対話能力の解明:談話的直観とプロフィシェンシー 鎌田修(南山大学)	48
「非伝達的」な日本語対話能力の育成 嶋田和子(アクラス日本語教育研究所)	49
日本語教育における「対話」の意味と可能性-学習者と教師の「自立」の観点から- 塩谷奈緒子(東京電機大学) 武一美(早稲田大学) 新井久容(早稲田大学)	50
読書行為を支える3つの対話-自立した言語使用者であるために- 武一美(早稲田大学)	51

学習者の主体的な議論のための教育実践 -「対象との対話」から「自己との対話」・「他者との対話」へ- 新井久容(早稲田大学)	52
日本語教育観を語り、語り直し、語り合う「対話」の活動-教師の自立と協働を目指して- 塩谷奈緒子(東京電機大学)	53
人類学・社会学とことばの教育 -ことばの教育と人類学・社会学の専門性を持った研究者の連携- 佐藤慎司(アメリカプリンストン大学)村田晶子(法政大学) 岡野かおり(オーストラリアラトローブ大学) Marcella Mariotti (Ca'Foscari University of Venice).....	54
人類学の方法論に基づいた日本語教育におけるフィールドワークプロジェクト 村田晶子(法政大学)佐藤慎司(プリンストン大学)	55
学習者の社会階層と日本語学習 岡野かおり(オーストラリア ラトローブ大学)	56
社会的行為者(social actor)としての学習者 マルチェッラ・マリオッティ(ヴェネツィア「カ・フォスカリ」大学)	57
日本語学習者コーパスにおける対話-ロールプレイ、メール、エッセイの分析をとおして- 田中真理(名古屋外国語大学)迫田久美子(国立国語研究所) 野田尚史(国立国語研究所)	58
学習者のロールプレイに見られる話し手の依頼表現 迫田久美子(国立国語研究所)	59
学習者のメールに見られる読み手を意識した表現 野田尚史(国立国語研究所)	60
学習者のエッセイに表れた書き手の「読み手意識」 田中真理(名古屋外国語大学)	61
パラレルセッション4: 口頭発表	
日本語母語話者との対話における中級日本語学習者の聴解困難点 野田尚史(国立国語研究所)中島晶子(パリ・デイドロ大学) 村田裕美子(ミュンヘン大学)中北美千子(国立国語研究所)	64
「共話」の教育において学習者の認識に注目する重要性 田所希佳子(ボルドーモンテーニュ大学)	65
自然会話を素材とする共同構築型 WEB 教材を使った「対話」と「会話」の教育 宇佐美まゆみ(東京外国語大学大学院)	66
日本語環境は短期留学生の対話能力にどのような作用を及ぼすか 谷部弘子(東京学芸大学)高橋美奈子(琉球大学) 本田明子(立命館アジア太平洋大学)	67

日本滞在を経て学習者の相互行為参与の形がどう変わったか-マルチモーダルの分析- 東伴子(グルノーブル大学)	68
日系企業・団体との対話を取り入れた中上級日本語学習環境 -状況的学習論からの分析- 吉岡薫(ボン大学)赤羽優子(ボン大学) 加藤由実子(ハイデルベルク大学)田村直子(ボン大学)	69
トルコ人日本語学習者の朗読音声に現れる母語の影響 石山友之(チャナッカレ・オンセギス・マルト大学)	70
インターネットを活用した音声指導 -ヨーロッパ圏日本語学習者を対象として- 戸田貴子(早稲田大学)大久保雅子(東京大学)千仙永(早稲田大学)	71
活動型授業における音声評価ルーブリックの作成の試み 金村久美(名古屋経済大学)中川千恵子(早稲田大学) 林良子(神戸大学)磯村一弘(国際交流基金/政策研究大学院大学)	72
日本語教育とディスレクシア-ヨーロッパの日本語教育機関における対応の現状と展望- 池田伸子(立教大学)大島弘子(パリ・デイドロ大学) 西澤芳織(オックスフォード大学)守時なぎさ(リュブリャーナ大学)	73
Identifying Classroom Interactional Features of Japanese Social Studies Lessons - Cognitive Demand and Scaffolding - Yoshiko Usui (Dokkyo University).....	74
日本人の『ちょっと面白い話』は日本語学習者に伝わるか -フランスにおけるアンケート調査の分析結果から- 山元淑乃(琉球大学)ジスラン・ムートン(琉球大学)	75
パラレルセッション5 : AJE プロジェクト・パネル・口頭発表	
複数言語環境に生きる人々の「日本語使用、日本語学習」の意味とアイデンティティ 三宅和子(東洋大学)川上郁雄(早稲田大学) 岩崎典子(SOAS, University of London)	78
在英国国際結婚家庭における「日本語学習」をめぐる親と子の葛藤と選択 三宅和子(東洋大学)	79
「移動する子ども」という記憶に親子はどう向き合うのか -幼少期より複数言語環境で成長した大学生とその親の語り- 川上郁雄(早稲田大学)	80
日本語のために移動する学習者たちの言語観とアイデンティティ -複数言語環境の欧州で- 岩崎典子(SOAS, University of London)	81
漢字系統樹 2800 の作成とその意義 善如寺俊幸(元東京外国語大学)	82

逆引き辞書の作成を可能にする対訳辞書編集システムの構築 川村よし子(東京国際大学)	83
日本語母語話者と日本語学習者におけるカタカナ語の使用についての研究 池谷知子(神戸松蔭女子学院大学)久津木文(神戸松蔭女子学院大学)	84
現代日本語動詞モウケルの意味用法について 池田諭(Université de Paris-Est / Lycée Jules Ferry)	85
中級以上の日本語学習者に対するアカデミック・ライティングのための日本語文法教育-引用動詞を用いた意見述べの文末表現をめぐって- 小森万里(大阪大学)	86
日本語学習者の体験談における接続表現-より面白く語るちょっとしたコツについて- 金田順平(国立民俗学博物館)	87
パラレルセッション6：口頭発表	
複言語・複文化アイデンティティ構築過程における日本語習得の影響 -フランスの大学の日本語学習者を対象に- 小間井麗(フランス国立東洋言語文化大学)	90
ソーシャルメディアを活用したキャリア学習環境を学習者はどのように捉えているか-ベトナム人学生へのライフストーリーから- 高橋薫(早稲田大学)藤本徹(東京大学)山内祐平(東京大学)	91
CLD 生徒に対する縦断調査の結果から窺える対話と継承語の重要性 野山広(国立国語研究所)	92
日本語教科書における「ましよう」の導入について-使用実態の視点から- 東條和子(桜美林大学)	93
教科書の会話練習の活用と文法学習について 藤野華子(オックスフォード・ブルックス大学)	94
文法項目用例検索データベース「はごろも」の開発と公開 堀恵子(東洋大学)李在鎬(筑波大学)江田すみれ(日本女子大学)	95
ビデオ会議における「異文化理解」を再考する-「他者」の議論を手がかりに- 川本健二(チャナッカレ・オンセギス・マルト大学) 深川美帆(金沢大学国際機構留学生センター)	96
異文化は教室の外にあるのか-フランスの大学日本語専攻の教室で起きた「日本」のイメージをめぐる対立と承認についての考察- 原伸太郎(東京福祉大学)	97
複言語・複文化主義に基づく対話に焦点を当てた日本語教育を考える -民主的シティズンシップ教育と文化間教育の観点から- 三輪聖(ハンブルク大学)野呂香代子(ベルリン自由大学)	98

卒業論文執筆を意識した日本語授業-アカデミックな対話の促進を目指して- 内川かずみ(エトヴェシュ・ローランド大学)	99
学習者の自己内対話から読解能力・読解指導を考える-思考発話データの分析- 櫻井直子(ルーヴァン・カトリック大学)	100
中上級日本語教育と日本研究の連携の可能性 -文語文献講読から探るクリティカルな思考の深化の過程- 金山泰子(国際基督教大学) 申田紀代美(アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター)	101
ポスター発表	
継承日本語を学ぶ子どものための教科書開発 山本絵美(ライデン大学/早稲田大学)米良好恵(てらこや@アムステルダム)	104
スイスの継承日本語教育とネットワーク構築 -ヨーロッパにおけるネットワーク構築をめざして- クレニン・道上まどか(ベルン日本語教室) カイザー青木陸子(ルツェルン日本語学校)	105
発音クラスにおける日本語教育実習生の気づき-学習者との対話をとおして- 千仙永(早稲田大学)	106
イタリア語話者のための会話教材における発音表示 小林ミナ(早稲田大学)藤井清美(金沢工業大学)梶田直美(一橋大学)	107
文法、どう教える? 鬼頭夕佳(フランス国立理工大学)	108
「聞き手参加型聴解」の教材開発 金庭久美子(立教大学)山森理恵(横浜国立大学) 奥野由起子(首都大学東京)鎌田修(南山大学)	109
ことばの表出を促す初級語彙マップ教材の開発 徳弘康代(名古屋大学)	110
支援のコミュニケーションにおける「関係構築力」の再考 -複数言語サポーターのインタビューから- 徳井厚子(信州大学)	111
課題設定を支援する対話の「ことば」: 日本学を学ぶ大学院生のブログ活動を例として 佐野香織(早稲田大学)	112
日本語学習者の雑談における語り-協働的な発話連鎖に注目して- 宮永愛子(広島女学院大学)	113
日本語学習者から日本語ユーザーへ-ある移住者のナラティブから- 八木真奈美(駿河台大学)	114

アカデミック日本語教育における対話タスクの連続性 藤森弘子(東京外国語大学)	115
BJ-CAT ビジネス日本語テスト-タスク遂行型の問題項目の作成- 赤木彌生(山口大学)伊東祐郎(東京外国語大学) 本田明子(立命館アジア太平洋大学)	116
日本語教育語彙表と検索システム 李在鎬(筑波大学)砂川有里子(筑波大学)長谷部陽一郎(同志社大学)	117
会話テスト JOPT 抽出データに与えるインタビュアーの影響 西川寛之(明海大学)鎌田修(南山大学)野口裕之(名古屋大学) 伊東祐郎(東京外国語大学)嶋田和子(アクラス日本語教育研究所) 野山広(国立国語研究所)由井紀久子(京都外国語大学) 六川雅彦(南山大学)李在鎬(筑波大学)	118
異文化理解能力としての「ポライトネス・ストラテジー」の運用 ナインドルフ会田真理矢(ダーラナ大学)	119
接触場面における日本語母語話者の配慮 -ロールプレイにおけるモニタリングの分析を通して- フォード丹羽順子(佐賀大学)三宅和子(東洋大学)	120
ブルックス文庫を使った学習者主体の『読む』教室活動の一例 池城恵子(オックスフォード・ブルックス大学)	121
中級日本語学習者の文章理解における問題点 高橋亜紀子(宮城教育大学)	122
留学生の論述パターンから見るレポート指導の方向性 -日本人学生の期末レポート、院生、研究者の学術論文との比較を通して- 中尾桂子(大妻女子短期大学部)	123
非漢字圏学習者はPCを用いてどのように文章を作成しているか -ハンガリー人学習者を事例として- 相川弓映(早稲田大学大学院)	124
e ポートフォリオを利用した作文指導に対する学習者のナラティブ分析: 振り返り活動が定着しなかった学習者の背景と ICT 教育の課題 毛利貴美(早稲田大学)中井好男(大阪大学)	125
移民2世の社会的統合過程におけるフリースクールの意義 -フリースクール卒業生のインタビューから- 奥菌克彦(横浜国立大学大学院)	126
初級教科書の対話に埋め込まれた社会規範-社会文化行動に注目して- 伊藤誓子(埼玉大学)保坂敏子(日本大学)	127

第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム プログラム

8月27日(木)

受け付け (Bâtiment administratif)			
8:45-9:30	開会式 (Amphi 700) 開会の辞 ボルドーモントレーニユ大学学長 Jean-Paul Jourdan 挨拶		
9:30-10:00	ボルドーモントレーニユ大学言語学研究所 (Equipe de Recherche CLLE-ERSSàB) 代表 Frédéric Lemberbert 在仏日本大使館 広報文化部一等書記官 大川晃平 国際交流基金 パリ日本文化会館 副館長 嶋根智章		
10:00-11:30	基調講演 (Amphi 700) 砂川有里子 (筑波大学名誉教授) 書き手と読み手の対話		
11:30-13:00	昼食		
13:00-14:30	会場1 (Amphi RENOUEARD) 中山由佳 (早稲田大学), 中川千恵子 (早稲田大学) : 演劇プロジェクト授業における相互評価活動 寺田恵理 (早稲田大学), 保崎則雄 (早稲田大学) : 先輩学習者と協働での作文活動における対話の分析とそこから生起する学びの一考察	会場2 (Amphi CIROT) 新谷知佳 (ルジエス大学) : 日本語母語話者との対話にもたらず学習への影響 - 日本語教育実習生受け入れを通して - 岩内佳代子 (セルジエーポントワーズ大学) : 協働学習としての日本語実習	会場3 (M101) 藤長かおる (国際交流基金), 斉藤誠 (国際交流基金パリ日本文化会館) : B1レベル対話能力育成のためのレストランツアー指導 - 『まるごと中級(B1)』の開発をめぐる - 初鹿野阿れ (名古屋大学), 岩田夏穂 (政策研究相学院大学) : やり取りに置ける問題開発に焦点を当てた会話教材開発の試み
13:00-14:30	会場4 (J002) 赤羽優子 (ボン大学), 吉岡薫 (ボン大学) : 自律学習の明確化を導くインターネット日本語テスト利用 竹内理恵 (フランス・リール第三大学) : フランスの大学における日仏遠隔タレント-対話を通じての自律学習をめざして -		

第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム

	鈴木裕子 (マドリッド・コンプルセンテ大学) : 学習者との対話-共同プロジェクト、自律学習支援サイト作成を通して	大和祐子 (大阪大学) : 日本語非母語話者の日本語教育実習生は授業観察を通してどのようなように成長するか	村田裕美子 (ミュンヘンヘン大), 李在鎭 (筑波大学) : 言語テラストに基づくドイツ人学習者の対話型コーパス構築	ドイツイアーナーナ・カルピ (ミラノ国立大学) : 日本語教育における Skype を利用した遠隔交流の実践の試み-ミラノ国立大学と早稲田大との共同研究-
14:30-15:00	コーヒーブレイク			
パラレルセッション2 (ワークショップ) 13:00-16:30	篠崎摂子 (国際交流基金パリ日本文化会館), エヴリン・ルシーニョ=オドリ (国際交流基金パリ日本文化会館), 大島弘子 (パリ・デイドロ大学), ジャン・バザンテ (フランス国立東洋言語文化大学) : 日本語ネイティブ教師とノンネイティブ教師の対話-ヨーロッパの日本語教育現場での協働を考える-	仙石桂子 (四国学院大学), Gehrtz 三隅友子 (徳島大学) : 日本語教育におけるパフォーマティブ・ラーニング-演劇的知を活かす-	山崎佳代子 (ベオグラード大) : マルチ・メディア『詩歌 (ことばうた) ワークショップ』-芸術による相互関係の構築-	斉木ゆかり (東海大学) : 劇作りと対話
16:45-18:00	AJE 総会 (Amphi RENOJARD)			
19:30-20:30	ウエルカムパーティー (Musée d'Aquitaine)			

8月28日 (金)

9:00-10:30

基調講演
(Amphi 700)

細川英雄 (早稲田大学名誉教授)
対話は日本語教育に何をもたらすか

コーヒーブレイク			
10:30-11:00	会場1 (Amphi RENOUEARD)	会場2 (Amphi CIROT)	会場3 (M101)
パラレルセッション3 (パネル)	会場1 (Amphi RENOUEARD) 定延利之 (神戸大学), 鎌田修 (南山大学), 嶋田和子 (アクラス日本語教育研究所) : 「非伝達的」な日本語対話能力の存在・解明・育成	会場2 (Amphi CIROT) 塩谷奈緒子 (東京電機大学), 武一美 (早稲田大学), 新井久容 (早稲田大学) 日本語教育における「対話」の意味と可能性-学習者と教師の「自立」の観点から-	会場3 (M101) 佐藤慎司 (プリンストン大学), 村田晶子 (法政大学), 岡野かおり (オーストラリアトローブ大学), Marcella Mariotti (Ca' Foscari University of Venice) : 人類学・社会学とことばの教育-ことばの教育と人類学・社会学の専門性を持った研究者の連帯-
11:00-12:30			会場4 (J002) 田中真理 (名古屋外国語大学), 迫田久美子 (国立国語研究所), 野田尚史 (国立国語研究所) : 日本語学習者コーパスにおける対話-ロールプレイ、メール、エッセイの分析をとおして-
12:30-14:00	<p>昼食</p> <p>アトリエ : 『とびら』(くろしお出版) 『みんなの日本語 中級』(スリーエーネットワーク)</p>		
14:00-15:30	<p>ポスター発表 (Bâtiment Administratif) (プログラムの次ページ)</p>		
パラレルセッション4 (口頭発表)	会場1 (Amphi RENOUEARD) 野田尚史 (国立国語研究所), 中島晶子 (パリ・ディドロ大学), 村田裕美子 (ミュンヘン大学), 中北美千子 (国立国語研究所) : 日本語母語話者との対話における中級日本語学習者の聴解困難点	会場2 (Amphi CIROT) 谷部弘子 (東京学芸大学), 高橋美奈子 (琉球大学), 本田明子 (立命館アジア太平洋大学) : 日本語環境は短期留学生の対話能力にどのような作用を及ぼすか	会場3 (M101) 石山友之 (チャナツカレ・オンセギス・マルト大学) : トルコ人日本語学習者の朗読音声に現れる母語の影響
15:30-17:00			会場4 (J002) 池田伸子 (立教大学), 大島弘子 (パリ・ディドロ大学), 西澤芳織 (オックスフォード大学), 守時なぎさ (リユブリヤーナ大学) : 日本語教育とディスタンスにおける対応の現状-

第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム

	<p>田所希佳子 (ボルドーモントエニユ大学) : 「共話」の教育において学習者の認識に注目する重要性</p> <p>宇佐美まゆみ (東京外国語大学大学院) : 自然会話を素材とする協働構築型WEB教材を使った「対話」と「会話」の教育</p>	<p>東伴子 (グルノーブル大学) : 日本滞在中を介して学習者の相互行為参加の形がどう変わったか - マルチモーダルの分析 -</p> <p>吉岡薫 (ボン大学), 赤羽優子 (ボン大学), 加藤由実子 (ハイデルベルク大学), 田村直子 (ボン大学) : 日系企業・団体との対話を取り入れた中上級日本語学習環境-状況的学習論からの分析-</p>	<p>戸田貴子 (早稲田大学), 大久保雅子 (東京大学), 千仙永 (早稲田大学) : インターネットを活用した音声指導-ヨーロッパ圏日本語学習者を対象として-</p> <p>金村久美 (名古屋経済大学), 中川千恵子 (早稲田大学), 林良子 (神戸大学), 磯村一弘 (国際交流基金/政策研究大学院大学) : 活動型授業における音声評価ルーブリックの作成の試み</p>	<p>Yoshiko Usui (Dokkyo University): Identifying Classroom Interactional Features of Japanese Social Studies Lessons - Cognitive Demand and Scaffolding -</p> <p>山元淑乃 (琉球大学), ジスラ・ムートン (琉球大学) : 日本人の『ちよつと面白い話』は日本語学習者に伝わるか-フランスにおけるアンケート調査の分析結果から-</p>
17:15-18:30	<p>AEJF 総会 (Amphi RENOUARD)</p>			
20:00-	<p>懇親会 (Mercure Hotels Château Chartrons Bordeaux)</p>			

8月29日(土)

9:15-10:45	<p>基調講演 (Amphi 700)</p> <p>牧野成一 (プリンストン大学名誉教授)</p> <p>日本文学は日本語・日本文化習得にどのように役立つか</p>
10:45-11:10	<p>コーヒーブレイク</p>

<p>パラレルセッション5 (AJE プロジェクト報告・パネル・口頭発表) 11:10-12:40</p>	<p>会場1 (Amphi RENOUARD) AJE プロジェクト報告 (CEFR, J-GAP)</p>	<p>会場2 (Amphi CIROT) パネル 三宅和子 (東洋大学), 川上郁雄 (早稲田大学), 岩崎典子 (SOAS, University of London): 複合言語環境に生きる人々の「日本語使用、日本語学習」の意味とアイデンティティ</p>	<p>会場3 (M 101) 口頭発表 善如寺俊幸 (元東京外国語大学): 漢字系統樹2800の作成とその意義 川村よし子 (東京国際大学): 逆引き辞書を可能にする対訳辞書編集システムの構築</p>	<p>会場4 (J002) 口頭発表 池田諭 (Université de Paris-Est / Lycée Jules Ferry): 現代日本語に於ける「もうける」の意味用法について 小森万里 (大阪大学): 中級以上の日本語学習者に対するアカデミック・ライティングのための日本語文法教育-引用動詞を用いた意見述べの文末表現をめぐって-</p>
<p>12:40-14:00</p>	<p>昼食</p>			
<p>パラレルセッション6 (口頭発表) 14:00-15:30</p>	<p>会場1 (Amphi RENOUARD) 小間井麗 (フランス国立東洋言語文化大学): 複言語・複文化アイデンティティ構築課程における日本語習得の影響-フランスの大学の日本語学習者を対象に-</p>	<p>会場2 (Amphi CIROT) 東條和子 (桜美林大学): 日本語教科書における「ましよう」の導入について-使用実態の視点から-</p>	<p>会場3 (M 101) 川本健二 (チャナツカレ・オンセギス・マルト大学), 深川美帆 (金沢大学国際機構留学センター): ピデオ会議における「異文化理解」を再考する-「他者」の議論を手がかりに-</p>	<p>会場4 (J002) 内川かずみ (エトヴェシユ・ローランド大学): 卒業論文執筆を意識した日本語授業-アカデミックな対話の促進を目指して-</p>
	<p>高橋薫 (早稲田大学), 藤本徹 (東京大学), 山内祐平 (東京大学):</p>	<p>藤野華子 (オックスフォード・ブルックス大学): 教科書の会話練習と文法学習</p>	<p>原伸太郎 (東京福祉大学): 「異文化」は教室の外にあるのか - フランスの大学日本</p>	<p>櫻井直子 (ルーヴァン・カトリック大学): 学習者の自己内対話から読解</p>

第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム

	<p>ソーシャルメディアを活用したチャリア学習環境を学習者 - はどのように捉えているか - ベトナム人学生へのライイフストリーから -</p> <p>野山広 (国立国語研究所) : CLD 生徒に対する縦断調査の結果から窺える対話と継承語の重要性</p>	<p>堀恵子 (東洋大学), 李在鎭 (筑波大学), 江田すみれ (日本女子大学) : 文法項目用例データベース「はごろも」の開発と公開</p>	<p>三輪聖 (ハンブルク大学), 野呂香代子 (ベルリン自由大学) : 複言語・複文化主義に基づく対話に焦点を当てた日本語教育を考える - 民主的シテイズンシップと文化間教育の観点から -</p>	<p>能力・読解指導-思考発話データの分析-</p> <p>金山泰子 (国際基督教大学), 申田紀代美 (アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター) : 中上級日本語教育と日本研究の連携の可能性 - 文献講読から探るクリティカルな思考の深化の過程 -</p>
<p>15:45 - 16:15</p>	<p>閉会式 (Amphi 700)</p>			

ポスター発表

- 1 山本絵美（ライデン大学／早稲田大学），米良好恵（てらこや@アムステルダム）：継承日本語を学ぶ子どものための教科書開発
- 2 クレニン・道上まどか（ベルン日本語教室），カイザー青木睦子（ルツェルン日本語学校）：スイスの継承日本語教育とヨーロッパにおけるネットワークの構築-ヨーロッパにおけるネットワーク構築を目指して-
- 3 千仙永（早稲田大学）：発音クラスにおける日本語教実習生の気づき-学習者との対話をとおして-
- 4 小林ミナ（早稲田大学），藤井清美（金沢工業大学），梶田直美（一橋大学）：イタリア語話者のための会話教材における発音表示
- 5 鬼頭夕佳（フランス国立理工大学）：文法、どう教える？
- 6 金庭久美子（立教大学），山森理恵（横浜国立大学），奥野由起子（首都大学東京），鎌田修（南山大学）：「聞き手参加型聴解」の教材開発
- 7 徳弘康代（名古屋大学）：ことばの表出を促す初級語彙マップ教材の開発
- 8 徳井厚子（信州大学）：支援のコミュニケーションにおける「関係構築力」の再考-複言語サポーターのインタビューから-
- 9 佐野香織（早稲田大学）：学習課題設定を支援する対話の「ことば」：日本学を学ぶ大学院生のブログ活動を例として
- 10 宮永愛子（広島女学院大学）：日本語学習者の雑談における語り-協働的な発話連鎖に注目して-
- 11 八木真奈美（駿河台大学）：日本語学習者から日本語ユーザーへ-ある移住者のナラティブから-
- 12 藤森弘子（東京外国語大学）：アカデミック日本語教育における対話タスクの連続性
- 13 赤木彌生（山口大学），伊東祐郎（東京外国語大学），本田明子（立命館アジア太平洋大学）：BJ-CAT ビジネス日本語テスト-タスク遂行型の問題項目の作成
- 14 李在鎬（筑波大学），砂川有里子（筑波大学），長谷部陽一郎（同志社大学）：日本語教育語彙表と検索システム
- 15 西川寛之（明海大学），鎌田修（南山大学），野口裕之（名古屋大学），伊東祐郎（東京外国語大学），嶋田和子（アクラス日本語教育研究所），野山広（国立国語研究所），由井紀久子（京都外国語大学），六川雅彦（南山大学），李在鎬（筑波大学）：会話テスト JOPT 抽出データに与えるインタビュアーの影響

16 ナインドルフ会田真理矢（ダーラナ大学）：異文化能力としての「ポライトネス・ストラテジー」の運用

17 フォード丹羽順子（佐賀大学），三宅和子（東洋大学）：接触場面における日本語母語話者の配慮-ロールプレイにおけるモニタリングの分析を通して-

18 池城恵子（オックスフォード・ブルックス大学）：ブルックス文庫を使った学習者主体の『読む』教室活動の一例

19 高橋亜紀子（宮城教育大学）：中級日本語学習者の文章理解における問題点

20 中尾桂子（大妻女子短期大学部）：留学生の論述パターンから見るレポート指導の方向性-日本人学生の学期末レポート、院生、研究者の学術論文との比較を通して-

21 相川弓映（早稲田大学大学院）：学習者はPCを用いてどのように文章を作成しているのか-ハンガリー人学習者を事例として-

22 毛利貴美（早稲田大学），中井好男（大阪大学）：eポートフォリオを利用した作文指導に対する学習者のナラティブ分析：振り返り活動が定着しなかった学習者の背景とICT教育の課題

23 奥菌克彦（横浜国立大学大学院）：移民指定の社会的統合過程におけるフリースクールの意義について-フリースクール卒業生のインタビューから-

24 伊藤誓子（埼玉大学），保坂敏子（日本大学）：初級教科書の対話に埋め込まれた社会規範-社会文化行動に注目して-

基調講演

書き手と読み手の対話

砂川有里子(筑波大学名誉教授)

「対話」というと話し言葉を思い浮かべる方が多いと思います。しかし、この講演では、書き言葉も「対話」によって成り立っているということを主張し、いろいろなジャンルの書き言葉を観察することで、書くことが読み手との対話を行うことであることを確認します。また、「対話」という観点から作文指導をすることの可能性について考えてみたいと思います。

書き手は読み手の存在を思い描き、その読み手が何を知り、何を知らないか、何に興味を持ち、何に期待するか、どんな意見の持ち主で、自分の意見に同調しそうか、反駁しそうか、素直に聞いてくれる人か、理屈をこねる人か、こういったことごとを常に思い描きながら、書くという作業を行います。このように、書くという行為は書き手が想定する読み手との対話によって成り立つ行為です。だとしたら、書き言葉の対話はどのような表現に支えられているのでしょうか。また、対話を成り立たせる表現は、どのような目的で使われているのでしょうか。

講演では以上の課題を念頭におきつつ話を進めますが、この議論に入る前に、話し言葉と書き言葉のそれぞれの特徴を押さえ、音声・表情・身振りなどの非言語的な情報（パラ言語の情報）の伝達手段を持っていない書き言葉が、どのような手段でこれらの情報を伝達するかを、CMC (Computer-Mediated Communication)での「打ち言葉」を取り上げ検討し、「打ち言葉」がどのような理由で使われているのかを考えます。

次に、軽いエッセイやブログによく見られる語りかけ性の強い表現を観察し、それらの表現が、「対話」という観点から少なくとも以下の4つの役割を果たしていることを説明します。

1. 想定される読み手を描き出す。
2. 読み手との共通基盤を描き出す。
3. 読み手と行うコミュニケーションのタイプを描き出す。
4. 読み手との立場の異・同を描き出す。

さらに、書き言葉の代表格である「新聞」を取り上げ、誌面上のさまざまなジャンルの記事が、上に示した役割をどのような表現やどのような方法を使って実践しているのかを観察します。

最後に、作文教育にも「対話」という観点が役に立つのではないかという提案を、いくつかの事例を挙げて行いたいと思っています。

対話は言語教育に何をもたらすか

細川英雄(早稲田大学名誉教授)

対話の概念は、歴史のうえでも、古くは、紀元前のギリシャのソクラテスやプラトンにさかのぼり、人間の生活や社会の形成に不可欠の要素として認識されてきた。近代においても、たとえば、ミハイル・バフチン(1895~1975)、パウロ・フレイレ(1921~1997)といった思想家のこことばの中に対話概念の指摘を見出すことができる。

では、こうした対話の思想が人間の生きていくうえでなぜ重要な意味を持つのか。それは、言語教育とどのようなかかわりがあるのだろうか。

対話は、他者存在、社会意識、社会形成等の課題と密接な関係にあり、対話こそがことばを形成し、主体を形成するという人間形成自体の目的と深いつながりがあるからだろう。バフチンは、「対話的交流こそ、言語の真の生活圏なのだ」(『ドフトエフスキーの詩学』ちくま学芸文庫)と述べている。

ここで、ひとたび、言語教育の世界に眼を向けると、必ずしもそうではない現実がみてとれる。教師の持つ知識を常識とし、教育の名のもとにその常識が正当化されるというプロセスは、フレイレの言う「抑圧的」状況に他ならないし、それはまた、バフチンの危惧する他者不在のコミュニケーションの姿でもある。他者の声を聞くことにこそ、人間存在の意味があるとバフチンは言う。

しかしまた、対話は、実体として取り出しえないものである。その対話をモノとして実体化し、コミュニケーションのための方法・ツールであるかのように捉えると、自己と他者、個人と社会等の人間存在の意味を見失う危険も潜んでいる。対話は、個人の認識する「今ここ」の感覚と他者存在の重みと深みによって共同体としての社会をホリスティックに形成するものだからである。

ここでは、対話をコミュニケーションの方法・ツールとして捉えることの問題性を指摘し、人間的なことばの教育を取り戻すために何ができるのかをテーマとして考えてみたい。対話が言語教育にもたらすもの、フレイレ流に言えば、それは、対話によって愛と希望の世界を言語教育がつくりだすことができるのかという課題である。

日本文学は日本語・日本文化習得にどのように役に立つか

牧野成一(プリンストン大学名誉教授)

日本語・日本文化学習にどうして文学を使うのか。文学を読むことが日本語・日本文化学習にどのように役に立つのか。文学を読む能力をどうやって測るのか。こうした問題を多角的に参加者といっしょに考えたいと思う。

文学と言っても幅広い領域であるが、私が今まで日本語教育で使ってきたものは主として、俳句、短歌、詩のような韻文、小説(短編)、アニメ絵本などである。では、どうして文学なのか。文学には無論思想性があるが、なんといっても文学は読んでその創造性と想像性を楽しめる。最近では外国語教育の中で「批判的思考」に主力が置かれて、すばらしい教育法が出ているが、私は「批判的思考」と相補的な関係にある「創造的・想像的思考」を育てることも外国語教育では必須だと考える。さらに、文学は言語文化(=言語)だけではなく非言語文化(=文化)の学習にも豊かな材料を提供してくれる。実際に文学を読むにも、速読、精読、多読などさまざまな方法があるが、言語の部分はどう教えるのか。精読で行う文体教育はどうすべきなのか。読むことだけでなく学習者にも文学を創らせるべきか。日本語教育ではどのレベルで文学を教え始めるべきか。文学を読む能力基準をどうたてるべきか。(→アメリカ外国語協会(American Council on the Teaching of Foreign Languages)の読みのプロフィシエンシーの基準)日本語作家を生むような指導はできないのか。さらに、日本の文学の翻訳をさせるべきか。させるなら、どのような方法がよいのか。等々の問題について話し合いたい。最後に村上春樹の短編『螢』([注意]この作品を参加者は学会の日までに読んでおいていただきたい。)を実例にを使って、参加者のみなさんに活発に参加していただき、具体的に日本語と日本文化を教える方法を模索したい。

パラレルセッション1

口頭発表

8月27日(木)13:00-14:30

会場1：発表1

演劇プロジェクト授業における相互自己評価活動

中山由佳（早稲田大学）
中川千恵子（早稲田大学）

本研究はオリジナル演劇作品を制作・上演するプロジェクト型日本語授業における相互自己評価活動の意義と学習者の意識を分析する。

本研究の対象となる授業は、某私立大学の日本語選択科目で中級後半～超級の日本語学習者を対象としたクラスで、週3コマ（1コマ90分）×15週間で行っている。本授業では、学習者が話し合いを通して40分程度のオリジナル演劇作品を制作し、一般公開の形で上演する。

本授業では、学習者自らが評価の主体となることによって学習に責任を持ち積極的に活動に参加するよう促すことと、学習者同士でしかわかりえない部分を成績評価に反映させたいと考えて相互自己評価を導入した。具体的な活動としては、学期前半に議論シークラスで合意して「評価項目」を設定し、上演会終了後自己および他者を評価し出した点数を成績に反映する「相互自己評価活動」を行う。

「相互自己評価活動」では、基準に沿って具体的な根拠をあげつつ客観的に評価を行った学習者もある反面、意義を見出せないように見受けられる学習者もあった。このことから、改善策として評価基準を決める前に相互自己評価活動の意義について学生が話し合う機会を設け、学習者の意識化を図った。

A peer and self-evaluation activity in a Japanese Drama Project Class

This study discusses the significance of a peer and self-evaluation activity conducted by students in a Japanese drama-project class. Furthermore, it examined the students' attitudes towards the activity. Through this project-based class, students experience the process of creating an approximately 40-min drama piece. The performance is open to public, and the class closes with review sessions after the performance. The class setting is as follows: Students' Japanese language competence level is advanced-intermediate to superior or semi-native; the class meets for three periods (90 min per period) per week for 15 weeks.

Peer and self-evaluation are employed as part of assessment, because in such project-based classes, only students are in a position to thoroughly observe and assess their fellow students' participation. Furthermore, we believe that peer and self-evaluation encourage students' autonomy in class participation. Regarding the creation process, students discuss, set criteria and conduct evaluations after the performance. In a past class, some students did not seem to find the evaluation meaningful. Thus, in the subsequent semester, we revised the process and held a class discussion on the significance of peer and self-evaluation prior to setting criteria.

参考文献

市嶋典子（2014）『日本語教育における評価と「実践研究」 対話的アセスメント：価値の衝突と共有のプロセス』ココ出版

古賀和恵、古屋憲章(2007)「活動型日本語クラスにおける「活動を認識するための活動」の重要性 - 「評価項目決め」活動と「終わりに」執筆活動の実践から」『言語文化教育研究』第7巻、pp.2-31

会場1：発表2

先輩日本語学習者と協働での作文活動における対話の分析と そこから生起する学びの一考察

寺田恵理（早稲田大学）
保崎則雄（早稲田大学）

日本学専攻の2年生を対象に、先輩日本語学習者と協働での作文活動を6週間にわたって実施した。各グループは先輩と学習者3、4名からなり、学習者は、これまでの自分を振り返りながら、対話と協働を通して各自の作文を完成させていった。学習者と日本語力の差が最も小さい先輩C（4年生、JLPT N2）のグループでは、初回から徐々に「支持的風土」（縫部、2001）が醸成され、各学習者の疑問や経験等をグループ全体で共有しながら対話を重ねることで、両者の学びが深まっていった。本研究では、先輩Cの活動への関わりとそこから生起する学びを明らかにするため、活動中の対話、学習者とCのつぶやき、両者への毎週のインタビュー、最終回のアンケート調査をもとに、質的（GTAを参考）、量的分析を行った。ここでの先輩Cは、学習者と一緒に悩み、考える存在であり、グループ内では、教師や日本語母語話者にはできない学びが意図しない形で起こっていた。これは、Cと学習者との日本語力の差、Cの経験や学習観にも起因することが収集したデータから明らかとなった。

An Analysis of the Learning Process and Awareness through Collaborative Group Activities in Japanese Composition Sessions with a ‘Senpai’ Japanese Learner: How a ‘Senpai’ Learner Interacts with Novice-Intermediate Learners

This study attempts to clarify how a ‘Senpai’ interacts with a group of novice-intermediate learners to promote active learning in Japanese composition classes over a period of 6 weeks. The class focused on what occurs in the group through collaborative activities, what students learn, how they generate new ideas, how they develop their thinking and how they write what they want to write. Three to four students working with a group leader in a small group learned together and students completed their own composition. One of the interesting findings was that “non-teaching activities” occurred in the group with Senpai C whose Japanese proficiency was closest to that of the participating students, compared to other leaders, and that it effectively promoted more learning. Data was collected by a series of interviews with the group-leaders and students after each session. The field notes during each session indicate that ‘non-teaching activities’ were generated by the way in which Senpai C interacted with students. In this group, a ‘supportive learning community’ (Nuibe, 2001) was gradually created from the first session. The learning of both the participating students and Senpai C enhanced sharing questions, experiences of each participant and repeated interaction in the whole group.

参考文献

縫部義憲（2001）『日本語教師のための外国語教育学』風間書房。

会場1：発表3

学習者との対話

ー共同プロジェクト、自律学習支援サイト作成を通してー

鈴木裕子（マドリッド・コンプルテンセ大学）

平田オリザは「対話」を価値や情報の交換、価値のすり合わせと定義している（平田2012）。教師は学習者と「対話」を通して、どのように価値や情報を交換し、日本語教育の中でお互いの価値観をすり合わせていけるのだろうか。この発表では、学習者と作った自律学習支援サイト『日本語せんせい』の作成過程において、学習者で行った「対話」に焦点を当て、学習を継続していくために必要な自律学習のあり方について考察していきたい。CEFRでは、学習者を「社会で行動する言語使用者（social agents）」と捉え、初級学習者も上級学習者も、そして教師も同じ「言語使用者」と考えている。Social agentsである学習者がお互いの学習方法や学んできたことをレベルを超えて共有することはできないかと考え、初級後半から中級（A2-2, B1, B2）の学習者たちと教師で、初級学習者（A1-1, A1-2）のためのサイトを立ち上げた。その特徴はすべての教材を学習者が作ったことにある。教材作成を通して行った中級学習者との「対話」からは教室では知りえない日本語学習に対するビリーフ、価値観、学習の苦労や工夫が明らかになった。また、ユーザーである初級学習者のフィードバックから学習を継続するための自律学習のあり方をサイトの中でどう表すかという大きな課題が課せられた。

A dialogue with students with the aim of carrying out a team project involving students and teachers to create a self-learning webpage.

Oriza Hirata defines “dialogue” as *the exchange of values and information and a way of bringing different scale of values together* (Hirata, 2012). The latter is particularly relevant in teaching Japanese. In this talk, I would like to analyze the real value of Japanese learning for students, especially in self-learning as a method for developing long term study skills. With this aim, we created the web page called “nihongo sensei” to establish a dialogue with students.

According to CEFR, students are socially active language users – social agents. I think students as social agents can share their learning experience and methodology. So we created “nihongo sensei” together with the A2.2, B1 and B2 students to be used by the A1.1 and A1.2 students. The distinctive feature of the web page is that all the materials are developed by the students.

During the creative process and the dialogue with the students I could understand certain aspects, such as motivation, evaluation, effort and students’ resources, which I had not seen in the classroom. Similarly, a questionnaire filled in by the web page users made me think about the need of conveying the different self-learning methods in a more effective way.

参考文献

- 野呂博子・平田オリザ・川口義一・橋本慎吾（2012）「ドラマチック日本語コミュニケーション」ココ出版
 鎌田修・嶋田和子編著（2012）『対話とプロフィシェンシー』凡人社。
 吉島茂・大橋理枝（訳・編）（2004）『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社

会場2：発表1

日本語母語話者との対話がもたらす学習への影響 ～日本語教育実習生受け入れを通して～

新谷知佳（エルジェス大学）

日本語母語話者と接する機会の少ない、学習歴約5カ月の日本語学習者25名を対象に、実習生受け入れによってもたらされる母語話者との対話が学習者にどのような影響を与えるのかを調査した。学習者は対話を通して自信が増し、より積極的に話し始め、意欲的に学習に取り組むようになった。先行研究では富谷(2007)をはじめとして実習生への効果を研究したものが多かったが、本発表では教育実習が学習者にも効果的であることを主張する。日本の大学生2名の教育実習を3週間行い、教室内外での交流の機会を設けた。調査は記述式と単一選択式のアンケートを学習者の母語で行った。選択式の間からは、日本語をもっと話したいと思うようになった、話す自信がついたと思う、話すときに緊張したり、恐怖を感じたりしなくなったという結果が、記述式の間からは、文法や漢字も大事だがコミュニケーションも大事だと気づいたという学習意欲向上につながるものや、日本人のジェスチャーを知ることができたという面と向かって話すことで得られるものなど、その回答は多岐に渡っていた。この調査結果は、実習生との対話によって学習者へのさまざまな効果が期待できることを示唆していると言える。

The effects of dialogue with native Japanese speakers on learning Japanese : An experience with Japanese teacher trainee students

I researched the effects of dialogue with native Japanese speakers on the learning process. The subjects of my research were 25 Japanese language learners, who had learned Japanese for about 5 months and had had limited contact with native speakers. Through the dialogue, they gained confidence and became more positive which enhance their concentration on learning. In earlier literature, including Tomiya (2007), they dealt with the effect on the trainee student, but in this research, I investigate the trainee experience effect on the learner. I accepted 2 trainee students from Japan and made an opportunity for them to communicate both internally and externally with the class. I used a multiple-choice questionnaire and with essay questions in the Turkish language. From the multiple-choice questions, I got the following result. They wanted to increase their opportunity to speak Japanese more and they gained confidence in speaking Japanese, but did not become nervous and frightened. From the essay questions, they realized that communication, as well as grammar and kanji are important. This connects with improvement in learning Japanese. In addition, they learned Japanese people's gestures. This occurred from meeting Japanese people face to face. There were various answers from the essay questions. The result of this research suggests that dialogue with trainee students brings about a variety of positive effects on learners.

参考文献

富谷 玲子(2007)「海外日本語教育実習における実習生の学び：国内日本語教育実習との比較から」『日本語教育方法研究会誌』14(1), 60-61, 日本語教育方法研究会

会場2：発表2

協働的学習としての日本語実習

岩内佳代子（セルジーポントワーズ大学）

筆者は、日本語教師を目指す学生の海外日本語インターンプログラムの枠組みで日本の交流大学からのインターンシップ生を受け入れている。

この実習でインターンシップ生は、現場の教師の授業の見学と、実際に教師の代わりに授業を担当という2点の活動を行う。そして、各活動のあとに実習レポートを担当教師に提出する。レポートには、授業中に観察した、教師と学習者の発話量のバランス、媒介語の使用、量、タイミング、質問の質、種類、活動の形式、見学した担当教師の授業についての感想そして、自分が行った授業の振り返りを自由に書かせている。担当教師は翌日のミーティングでそのレポートを読みコメントを口頭で行うとともに話し合い（対話）の場を持つ。

本研究では、このインターンプログラムを担当教師と実習生の「協働的学習」という理論を用いて、考察を加えたい。特に、インターンシップ生によるレポート（筆話）、担当教師とインターンシップ生のミーティングでの対話を通して、従来の「担当教師が指導する」という考え方から、「インターンシップ生が自ら自律的に日本語教育を学ぶことができるように支援する」そして、インターンシップ生の報告を通して「担当教師自身も自分の授業を振り返る。」という「二者お互いの学び」としての実証を行いながら、協働的学習の一環としてのこの対話が、いかに学習支援環境の構築に必要なかを検証してゆきたい。このような海外での日本語インターンプログラムに関する研究は筆者の知る限りあまりされていないようである。報告をも兼ねた本研究がこれからの日本語教師育成に役立てれば幸いである。

Collaborative learning In Japanese-Language Interns in overseas

Every year, our university hosts Teaching Assistants (TA) who participate in the Japanese curriculum of their home university.

During his/her internship in our university, the TA has two activities:

- Observing teaching practices (how does a teacher do a course, etc)
- Giving lectures for a Professor

After each class, the TA writes a report, the referring teacher reads this report (dialogues, written) and discusses (oral dialogue) with the TA at the brainstorming meeting.

I intend to apply the "cooperative learning" theory to study this program.

Through written and oral dialogues with TA, the referring teacher helps the student be autonomous and to better adapt to his/her environment. At the same time, this experience allows the teacher to reflect on her teaching. Thus, the two actors, the TA and the teacher reciprocally learn from this process. I want to show the importance of such dialogues for "cooperative learning" in my communication.

参考文献

池田玲子・館岡洋子（2007年）『ピア・ラーニング入門——創造的な学びのデザインの
ために』ひつじ書房

国立国語研究所（2007年）『日本語教育ブックレット9 教室活動における「協働」を考
える』

会場2：発表3

日本語非母語話者の日本語教育実習生は 授業観察を通してどのように成長するか？

大和祐子（大阪大学）

本研究では、日本語非母語話者を対象とした日本語教育実習における授業見学の効果を検討した。日本語教授経験を持たない日本語非母語話者の実習生が授業見学を通してどのように成長できるか、実習生の授業見学でのコメントの内容分析を通して明らかにした。本研究では、実習生による記述のうち、授業見学前半と後半とでコメントの内容にどのような変化が見られたか比較した。その結果、授業見学前半の実習生のコメントからは、日本語学習者の1人として授業に参加している点が特徴的であったが、授業見学後半の実習生のコメントからは、日本語の授業を客観的に観察し、実習生自身の教壇実習に生かそうとする日本語教師としての視点が加わっていることが分かった。つまり、授業見学を継続的に行うことにより、授業を客観的に見るという視点が養われることが明らかになった。本研究は、上級日本語学習者が授業見学を通して日本語教師へと成長することができること、特に経験のない日本語非母語話者にとって授業見学が成長の重要なステップとなりうることを示した。これらの結果は、日本語非母語話者の日本語教師養成の方法を検討するうえで、有益な資料を提供できるものである。

Learning for teaching through lesson observation: in the case of non-native Japanese teacher training students

The present study investigated the effects of lesson observation by non-native Japanese teacher training students. An analysis was carried out on the comments written by teacher training students after the class observations. The teacher training students were advised to participate for the observation every week during the spring semester and write comments after each lesson (overall 10 times). A comparison was conducted between 1st half comments (1st five comments) and 2nd half comments (2nd five comments). The results showed that the comments between 1st half and 2nd half have undergone an attitude transition from a student-perspective to a teacher-perspective. It can be assumed that the participatory nature of the teacher training students in teacher training program have led an attitude transition among teacher training students. Therefore, the study concluded that, it is vital to have classroom observations as a part of teacher training program to nurture nonnative Japanese language teachers those who are with limited teaching experience.

会場3：発表1

B1レベルの対話能力養成のためのストラテジー指導

—『まるごと中級(B1)』の開発をめぐる—

藤長かおる（国際交流基金日本語国際センター）

斎藤誠（国際交流基金パリ文化会館）

CEFR B1 レベルでは、学習者は「自立した言語使用者」として日常的な場面でのさまざまな課題に対処できることが求められる。しかし、B1 レベルでは使用できる言語には限界があるため、自分の言語のレパートリーを最大限に活用して、課題を解決していかなければならない。また、言語能力の不足を補うために、受容的な活動においても、産出的な活動においても、ストラテジーを効果的に使用することが重要になる。

本発表では、国際交流基金が「JF 日本語教育スタンダード」に基づいて開発中の日本語教材『まるごと 日本のことばと文化中級 (B1)』を例として、まず、海外の一般成人学習者にとって必要な B1 レベルの課題遂行 (Can-do) とはどんなものかを、海外の学習者を対象にしたアンケート調査結果をもとに述べる。次に、素材面から、過度の規範化や制限などを見直して Authenticity を確保したテキストはどういうものかを紹介する。そして、課題遂行に到る学習デザインと、そこにどうストラテジー指導を取り入れていくかについての例を挙げる。さらには、本教材の試用版を用いた欧州での実践例を報告し、今後の可能性について考えたい。

Teaching strategies for aural communication at B1 level

- On the development Japanese Language Textbook "MARUGOTO B1" -

At B1 level, learners are required to deal with a variety of situations where they might come into contact in everyday life as "independent user." For this purpose, they have to take full advantage of their repertoire of language, and also need to apply various strategies for effectively using a limited range of language in order to achieve their communication goal, in receptive skills, as well as in productive skills.

At first, in this presentation, the meaning of "can-do" and performance tasks for adult learners abroad would be discussed, with some examples from Japanese language material "MARUGOTO (B1)" which is being developed on the basis of the "JF Standard for Japanese-Language Education". Secondly, authenticity of the text, where grammar and vocabulary are not controlled very much, would be reviewed from the material side. Then the learning designs leading to their communication goal and examples of how to incorporate strategies in it would be examined. In addition, with some reports of using a trial version of this material, future possibilities should be discussed.

参考文献

- Council of Europe、吉島茂・大橋理枝訳・編（2008）『外国語教育Ⅱ—外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠—』初版第2刷、朝日出版社（原著 Common European Framework for Reference of Languages: Learning, teaching, assessment. 3rd, John Trim, Brian North, Daniel Coste, 2002, Cambridge University Press.）
- 国際交流基金（2009）『JF 日本語教育スタンダード試行版』国際交流基金
- CEFR B1 プロジェクトチーム（2012）『CEFR B1 言語活動・能力を考えるプロジェクト 2012 年度活動報告書』

会場3：発表2

やり取りにおける問題解決に焦点を当てた会話教材開発の試み

初鹿野阿れ（名古屋大学）
岩田夏穂（政策研究大学院大学）

CEFR（2001）によれば、言葉によるやり取りは言語の産出的活動と受容的活動が交互に行われるものであり、二人の対話者が同時に話し、且つ聞く以上のもの、いわゆる「方略」を含む。会話参加者は、互いに相手の知識や背景を探り合いながら、やり取りを調整し、協働で意味をつくり上げていく。筆者らは、この会話の調整に関する方略に注目し、特に日常会話におけるやり取り上の問題とその解決を中心とした会話教材の作成を試みた。その際に、会話分析という研究分野が明らかにしてきた知見を参考にした。本発表では、この作成過程と教材の意義、及び、教材化を視野に入れて行った会話データの分析結果を報告する。取り上げる現象は、今回の教材には含めなかったが、次回の教材のために分析している「褒め」への反応である。実際のデータで観察された褒めは、相手の能力や容姿を対象としているものが多く、その反応として、（1）否定、（2）否定＋相手への褒め、（3）否定＋部分的な否定や程度を弱める表現等、いくつかの特徴的振る舞いが見られた。これらの分析結果を利用して、適切なやり方を意識させる活動を導く教材作成が必要であると考えます。

Development of Japanese Conversation Learning Materials: Focusing on the Process of Problem-Solving in Interaction

According to the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR, 2001), language interaction by at least two interlocutors comprises an oral/written exchange in which production and reception alternate. However, learning to interact involves not only acquiring production and reception skills but also learning “strategies” to manage the interactional process. We attempted to develop Japanese conversation learning materials that focus on activities to solve problems in the interactional process. We referred to findings from studies of Conversation Analysis when creating these materials. This presentation will demonstrate the process of how we developed the materials and discuss its significance. Furthermore, we present the result of our analysis of responses to compliments from the data of a conversation between three students, which we plan to use for subsequent materials. Our observation indicates that most compliments in our data are related to the interlocutor’s ability or appearance and that the responses to them are (1) denial, (2) denial + counter-compliment, (3) denial + expression to correct or mitigate part of the compliment. We believe that it is important to make Japanese learners aware of how people react to compliments because it enables learners to manage the interactional process and appropriately respond to compliments.

参考文献

Council of Europe. (2001) Common European Framework of Reference for Language: Learning, teaching, assessment. Cambridge: Cambridge University Press. (吉島茂・大橋理枝他訳・編、2004『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社)

会場3：発表3

言語テストに基づくドイツ人学習者の対話型コーパス構築

村田裕美子（ミュンヘン大学）
李在鎬（筑波大学）

我々の長期的なゴールは、OPI(Oral Proficiency Interview)のレベル判定に見られる主観性の問題を SPOT(Simple Performance-Oriented Test)を用いて解決し、ドイツ人学習者の OPI に準拠したコーパスを構築することである。本発表では、1) OPI と SPOT の関連を統計的に分析することと、2) OPI のレベル判定の妥当性を検証することを目的とする。

利用したデータは、ドイツ語母語話者 35 名（初級 10 名、中級 13 名、上級 12 名）の発話データと SPOT の得点データである。分析方法は、OPI と SPOT の関連を調べるため、分散分析と線形回帰分析を行い、レベル分けの妥当性を検証するため、判別分析を行った。

分析の結果、回帰分析では全体の総発話数、動詞、形状詞の使用頻度から SPOT の得点を高い精度で予測できた($R^2=.852$)。また、分散分析では OPI のレベルを従属変数に、SPOT の得点を独立変数にして分析した結果、有意効果が認められた ($F(2,32)=65.964, p<.001$)。さらに、判別分析では言語的要素の使用頻度から OPI のレベルを予測させたところ、97.2%で正答できた。以上の調査により、本コーパスが客観性の高いデータであることが示された。

今後は、本コーパスを、学習者の言語使用の実態調査の資料として、そして、教育コンテンツ作成の基礎資料として活用したい。

Construction of a Dialogue Corpus for German Japanese Language Learners based on Linguistic Tests

Our long term goal is to establish a corpus in accordance with OPI of German students. The objectives are 1) to conduct a statistical analysis of the relationship between OPI and SPOT, 2) to examine the validity of determining the levels of OPI.

Methodology: OPI data and SPOT score data were collected from 35 German speakers (Novice 10, Intermediate 13, Advanced 12). Variance and Line-Regression Analysis were conducted to examine the relationship between OPI and SPOT, and Discriminant Analysis was conducted to verify the validity of determining based on the language proficiency level.

In Regression Analysis, the number of utterances and the frequency of use of verbs and adjectives were examined to determine the SPOT score. As a result, the SPOT score was predicted with a high precision ($R^2=.852$). In ANOVA, if OPI level was set as the dependent variable, and the SPOT total score was set as the independent variable, statistically effect is significant at the .001 level ($F(2,32)=65.964, p<.001$). In Discriminant Analysis, OPI level was predicted from the frequency of use of linguistic elements. As a result, OPI level was predicted with 97.2% accuracy. In conclusion, this corpus has been shown to measure proficiency level with high objectivity.

会場4：発表1

自律学習の明確化を導くインターネット日本語テスト利用

赤羽優子（ボン大学）

吉岡薫（ボン大学）

ボン大学の修士課程中上級日本語コースでは、「自律学習能力」の育成をコース目標の一つとし、「インターネット日本語テスト」「自律学習グループ活動」「ポートフォリオ」を授業に取り入れた。学生は自身の日本語能力をモニターできるよう、コース開始時に「インターネット日本語テスト」（「J-CAT 日本語テスト」及び「漢字診断中級」（TTBJ））を授業外で受験し、担当教員は個人個人の受験結果をレーダーチャートに作成して配布した。それを元に学生自身が課題を考え、類似テーマを持つ者同士で「自律学習グループ」を作った。自律学習が継続することを狙い、各グループは学習計画を立て、授業内での進捗報告と話し合いを続けた。コース終了時には、インターネット日本語テストを再受験し、その結果と、コース開始時の受験結果とを重ね示したレーダーチャートを教員が配布し、振り返りと今後の目標を報告させた。

これらネット上の日本語テストを授業外で行うことは、経済的・時間的負担が軽い上、結果をレーダーチャート化することで、学習者の今現在の日本語能力を可視化し、自律学習で前提となる「自分の課題を見極める」力の一助となった。

Using Internet Japanese Test to Guide Autonomous Learning

The intermediate and advanced Japanese course under the master's program in the University of Bonn used Internet Japanese tests, study groups, and personal portfolio for developing autonomous learning skills among the students.

The students took the J-CAT Japanese Language Test and the Intermediate level Kanji Diagnostic Test from TTBJ at the onset of the course. The results were shown to students as individual cobweb charts. Based upon these charts the students created autonomous study groups, and time was provided in each class to discuss their learning progress. They were also given portfolio folders and were encouraged to keep a record of their autonomous learning progress. Four months later the students took the same Internet Japanese tests again, the results of which were superimposed onto the earlier cobweb charts. The students were asked to evaluate their autonomous learning and identify their next goal based on the results.

Internet Japanese tests and cobweb charts can be effective tools for students and teachers to visualize and help determine learners' Japanese language proficiency. Such visualization helps learners to identify their learning goals and guides their autonomous learning.

参考文献

青木直子(2005)「自律学習」日本語教育学会(編)『新版日本語教育事典』大修館書店, pp.773 - 775.

会場4：発表2

フランスの大学における日仏遠隔タンデム

—対話を通じての自律学習をめざして—

竹内理恵（フランス・リール第三大学）

フランスのリール第三大学では 2012-13 年度より三年間にわたり、日本の大学と遠隔タンデムを実施してきた。ここでいう遠隔タンデムは広義にとらえ、スカイプなどに加えメールやチャット、フェイスブック等の情報技術を利用したものを指す。リール第三大学側の対象は主に外国語・外国文学・外国文化（LLCE）学部日本語専攻の学生全学年から募った希望者 36~67 名である。この実践の目的は、当大学が抱える様々な問題、とりわけ授業時間の不足と学生の受動的学習態度に解決をもたらすことにあった。具体的には、2012 年実施の「日仏ネット対話プロジェクト」を通じて得た対話の重要性の認識に基づき、授業以外の場で日本語を用いて対話を重ね、各自の学習、各自の日本語との関係に対する気づきの機会を学習者に与えることを目指してきた。しかし、日本語向け遠隔タンデム専用プラットフォームはまだ整っておらず、申込用紙やメール、さらには学習プラットフォーム（ムードル）を用いての手作業で実施を始めた。本発表では、遠隔タンデム実施の詳細を報告し、そこで浮かび上がった問題、さまざまな傾向や要因、そして日本語学習との関係について考察する。

French-Japanese teletandem at a French University
Towards autonomous learning through dialogue

A French-Japanese teletandem has been held between the University of Lille 3 and Japanese universities for three years since 2012-2013. "Teletandem" is used here in a wide sense and includes not only communications using video, but also those using email, chat, facebook, etc. The participants from Lille 3 were 36 to 67 students in 'Japanese Language, Literature and Culture' from the first year of Bachelor degree to the first year of Master degree who wanted to participate. Our first aim was to resolve some problems, such as an insufficiency of teaching hours and students' passive attitude. Inspired by our experiences through "French-Japanese Online Dialogues Project" held in 2012, which revealed the importance of dialogues in learning Japanese to us, we have aimed to offer an opportunity, outside of classes and through dialogues, of reflection about their learning as well as about what the Japanese language means for each one of them. Thus, in this study the background and the conditions of setting up and running of this system will be presented, as well as the difficulties we met, the diverse tendencies and factors involved, and a reflection on the relation between teletandem and learning.

参考文献

「2012 年日仏ネット対話プロジェクト（リール第三大学プログラム）」（2012 年 1 月 23 日～3 月 11 日、プロジェクト責任者：細川英雄）

<http://www.gbki.org/classfrance.html>

細川英雄（代表）（2012）『「考えるための日本語—日本と私—」（リール第三大学プログラム）日仏ネット対話プロジェクト報告』早稲田大学大学院日本語教育研究科細川英雄研究室 <http://www.gbki.org/dat/netconv.pdf>

会場4：発表3

日本語教育における Skype を利用した遠隔交流の実践の試み

－ ミラノ国立大学と早稲田大学との共同研究 －

ティツィアーナ・カルピ（ミラノ国立大学）

本研究はミラノ大学の日本語学習者と早稲田大学の大学院で日本語教育を専攻している学生とのオンラインによる交流を通して、日本語教育における遠隔交流の有効性を検討することを目的とする。参加者は、日本語学習者1人または2人に対し、日本語話者1人でペアを組み、事前に共通のテーマを選んで、交流前の準備をしてから、Skypeを用いて交流を行った。ビデオ会話をを用いた遠隔日本語教育に関する先行研究はあるが、談話分析が多く、また、学習者がお互いの母語を目標言語として交流することが多い（林・杉原・Trummer-Fukada, 2012）。本プロジェクトは日本側の参加者が日本語教育専攻の大学院生であることが特徴的である。本研究では、三つのことを目的とした。（1）遠隔日本語教育に必要な知識や技能などを学び、遠隔日本語教育に対する認識を高める。（2）非母語話者は日本語での交流の機会を増やして、知識をさらに深める。（3）学習者の情動面的な部分を探る。本プロジェクトは終了後、学生から大きな反響があり、日本語教育における遠隔交流の有効性が見られる一方、その継続性と互惠性に向けての課題も浮き彫りとなった。日本語教育方法として、今後も改善を加えていく必要がある。

Japanese language education: an experiment of distance exchange using Skype.

A collaborative research between the University of Milan and Waseda University

The current research investigates distance exchange in Japanese language education through online exchange between students of Japanese at the University of Milan and students majoring in Japanese language education at Waseda University. Participants took part to the language exchange using Skype in a one-to-one and one-to-two format, after choosing a common topic and preparing for it. Previous literature on the use of video conversation in distance Japanese language education mainly concentrates on discourse analysis and most studies deal with learners studying their partner's mother tongue as the target language (Hayashi, Sugihara, Trummer-Fukada 2012). The main feature of this project is that it involves Japanese participants specializing in Japanese language education. Three objectives were set: (1) to learn the necessary knowledge and skills for remote Japanese language education and to raise participants' awareness; (2) to provide non-native speakers with more opportunities of language exchange in Japanese; (3) to explore learners' emotional side during the experiment.

At the end of the project students showed a good response, but despite the effectiveness of distance exchange in Japanese language education, challenges towards the continuity and reciprocal benefits of the project became evident. Methods needs to be further improved in the future.

参考文献

林良子・杉原早紀・Trummer-Fukada Stefan (2012) 「スカイプを利用した日本語・ドイツ語遠隔タンデム授業の実践」国際文化学研究：神戸大学国際文化学研究科紀要, 41: 44-54.

パラレルセッション2

ワークショップ

8月27日(木) 15:00-16:30

会場1

日本語ネイティブ教師とノンネイティブ教師の対話

—ヨーロッパの日本語教育現場での協働を考える—

モデレーター：篠崎 摂子（国際交流基金パリ日本文化会館）

エヴリン・ルシーニュ=オドリ（同上）

協力者：大島 弘子（パリ・ディドロ大学）

ジャン・バザンテ（フランス国立東洋言語文化大学）

2012年の国際交流基金の調査では、西欧の日本語母語話者（ネイティブ）教師の割合は73.0%、フランスでは79.7%と、全世界平均（23.2%）を大きく上回っている。本ワークショップは、このような現状を踏まえ、ヨーロッパの日本語教育の現場でのネイティブ教師（NT）とノンネイティブ教師（NNT）の協働について参加者と議論し、今後の協働のあり方について考えたい。

本ワークショップでは、フランスのNTとNNT各1名がモデレーターを務め、NTとNNTの役割（カイザー1995）や概念（田中2013、DERIVRY2006）に関する先行研究の知見を論点として取り入れる。また、協力者によるフランスの現状報告を取り入れて議論の活性化を図る。このような議論を行うことはNTとNNTという区別や役割の違いを是認し、固定化させるといった意見もあるかもしれないが、教育現場の現状を踏まえた、建設的な議論が行えればと考えている。

本シンポジウムの参加者はNTが多いと予想されるが、NNTにも積極的に議論に参加してもらい、このワークショップ自体が両者の対話の場となることを期待する。ヨーロッパ以外の参加者も交えて、このテーマについて広く考える機会としたい。

On dialogues between native teachers and non-native teachers of Japanese – Thinking about possible collaborations within teaching institutions in Europe

The proportion of Japanese language teachers who are native Japanese speakers is far higher in France (79,7%) and Europe (73%) than the global average (23,2%). In this workshop, we will discuss with the participants about how native teachers (NT) and non-native teachers (NNT) work together in their respective teaching institutions in Europe, and will explore possible ways to collaborate further in the future.

Such a distinction between NT and NNT can of course be questioned. Also, this workshop could arguably be accused of taking the distinction for granted. However, while being conscious of the above, the moderators believe we must admit that this distinction is actually a commonly used framework within which roles of teachers are molded. By observing the real situation in various institutions, we wish to instigate and nurture a more informed debate about this issue.

It is likely that most participants to the symposium will be NTs, but we hope that many NNTs will also take part in this workshop. This should ideally be the place for NTs and NNTs to constructively discuss the issues involved. Also, we would particularly welcome participants from non-European countries, in order to widen the discussion.

参考文献

- カイザー・シュテファン（1995）「ノンネイティブ日本語教師の役割—異文化間教育の現場としての日本語教室を目指して—」『筑波大学筑波大学留学生センター日本語教育論集』10
- 田中里奈（2013）「日本語教育における「ネイティブ」/「ノンネイティブ」概念 言語学研究および言語教育における関連文献のレビューから」『言語文化教育研究』11
- Martine DERIVRY (2006) « Les enseignants 'natifs' et 'non natifs' de langue(s) : catégorisation linguistique ou construction sociale ? » Travaux de didactique du FLE 55

会場2

日本語教育におけるパフォーマンス・ラーニング

－演劇的知を活かす－

仙石 桂子（四国学院大学）

Gehertz 三隅 友子（徳島大学）

コミュニケーション能力を目標とする言語教育において、ロールプレイの必要性は言うまでもない。本ワークショップでは、パフォーマンス・ラーニングの考えを取り入れ、教師自らが会話スキット作成、ロールプレイによる上演を体験し互いに振り返ることを目的とする。パフォーマンス・ラーニング（高尾 2006）は、からだを動かして表現し、同時に他者へ向けて表現することで、自分との対話さらに他者との対話を実現する学びである。教育的意味においては創造的な自分の再構成する学び、言語教育においても目標言語を使う自分を新たに作る学びと考えられよう。

本ワークショップでは、以下の活動を実施する。

- ①インプロの技法を使ったウォーミングアップ
- ②グループによる会話スキットの作成（断り、誘い等の言語機能を題材とした）
- ③グループによる上演（発表）
- ④評価（自己評価・他者評価、学ぶ目標と方法の確認）

ここから自らの実践を振り返り、またロールプレイを改めて考える場としたい。からだとこえを使うことや、学習項目としての日本語表現とは何か、学習者に提示する際の配慮等参加者からの意見を大切に、シンポジウムのテーマ「対話」を体感し共有する。

Performative Learning

-In Search of a New Way in Japanese Language Education-

In language education, where communicative competence is the aim, the vital necessity of role-playing is self-evident. The objective for this workshop, based on the idea of 'Performative Learning,' is for teachers themselves to create conversation skits, present role-playing performances, and look back at their experiences together. Performative Learning (Takao 2006) involves expressing oneself through movement, an approach to learning which involves both dialogue with oneself and with others. From an educational perspective, Performative Learning offers an opportunity to reconstruct oneself and in terms of language education, provides a chance to establish oneself as a user of the target language. In this workshop, we will engage in (and through) the following activities:

- 1) Warm-up using improvisation techniques
- 2) Creating conversation skits in groups (utilizing language functions such as invitation and rejection.
- 3) Performance of the skits by each group
- 4) Evaluation

It is hoped that this workshop will provide a space within which to reflect on our own practice and to reconsider the utility of role-playing. The goal is for each of us to feel and share 'dialogues' between body and voice in Japanese expression.

参考文献

- 高尾隆（2006）『インプロ教育—即興演劇は創造性を育てるか?』フィルムアート社
 平田オリザ（2012）『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書

会場3

マルチ・メディア『詩歌(ことばうた)ワークショップ』

—芸術による相互関係の構築—

山崎佳代子 (ベオグラード大学)

言語習得のためには、教室のなかに、よりよい人間関係を築くことが大切である。マルチ・メディア『詩歌(ことばうた)ワークショップ』は、ヴィゴツキーの発達心理学 (最近接領域・内言など)の概念を応用したオータナティヴな教室活動で、コミュニティー・ビルディングを目的のひとつとする。詩歌の素材を用いて、音楽、視覚芸術 (絵画・芸術写真等)と組み合わせることによって、参加者の内的な発話、他者にむけられた表現を真に動機付け、教室における相互関係を深めることができる。

これまでの参加者は、創造性、非日常性、楽しさ、温かい雰囲気、リラックスした対話、自由な言語表現、すがすがしさなどを特徴として挙げた。

以下の手順で、マルチ・メディア『詩歌ワークショップ』を紹介する。

1. 理論的な枠組み 2. 詩的言語の特徴とワークショップ活動にふさわしい詩の選択の原則 3. 聴覚および視覚芸術の導入の原則 4. 『詩歌(ことばうた)ワークショップ』の構造 5. 詩、音楽、芸術写真を用いたワークショップの体験。

Multimedia Poetry Workshop - Community Building through Arts

The Poetry Workshop is the alternative method of teaching and learning foreign languages, based on the psychology of L. Vigotsky (interactive learning; the zone of proximal development; inner speech; external speech). One of the purposes of this method is creating a good community in the classroom. The Poetry workshop motivates not only the inner speech but also the external speech of all participants (teachers and learners), by using poetry in combination with sound and visual art. This method integrates the emotional and cognitive development of participants in the classroom, deepening and enriching their interaction. Former participants highly evaluated this method, using following expressions: creativity; originality; joy; warmth; relaxedness; freedom of expression; empathy; sense of community.

The Poetry Workshop will be demonstrated in following steps: 1. the theoretical framework; 2. characteristics of poetic language and principles of selecting poems for a workshop activity; 3. principles of using sound and visual art; 4. the structure of Poetry Workshop; 5. demonstration of the basic steps of the Poetry Workshop with poems, music (jazz and classical) and fine art photography.

参考文献

ヴィゴツキー (2009) 『思考と言語』 新読書社.

バフチン (1999) 『行為の哲学によせて』 (ミハイル・バフチン全著作第1巻) 水声社.

会場4

劇作りと対話

斉木ゆかり（東海大学）

劇作りは、学習者に以下のような3種類の「対話」を体験させる。

- 1) 劇中の登場人物になって対話する。
- 2) 劇の前にグループのメンバーと劇作りについて対話する。
- 3) 劇の前後に質問や意見等で教師と対話する。

通常、授業では1)に焦点が当てられがちであるが、2)の「メンバーとの対話」は現実には起こり得る対話場面に近く、コミュニケーション能力や共感的な理解といった対話上の気づきを深める大切な機会となる。しかし、教師は「メンバーとの対話」についてはどんな対話が行われ、あるいはされず、学習者がどのような葛藤を体験したかを知る事はできない。

そこで、ワークショップでは参加者が以下のタスクを体験し、そこで気づいた「対話」について皆とシェアすることで、学習者の気持ちを理解し、授業における教師の言葉や振り返りの方法を考えるきっかけとしたい。

ワークショップは以下の手順でおこなう。

- 1) 「回転寿司」： あるテーマでペアの相手を替えて何回か対話する。ここでのテーマは次の寸劇のテーマと関連し、一種のブレインストーミング的役割を持つ。
- 2) 劇作り： ワークショップリーダーの指示で劇作りの話し合いをする。
- 3) 発表： 無言劇（台詞のない劇）と、有言劇（台詞付きの劇）を発表する。
- 4) その人になって要約： 登場人物になった状態で一人ずつ劇の内容を要約する。
- 5) 振り返り： グループでの話し合いで何を感じたか、教師は学習者へどのような働きかけをすべきかについて参加者全員で話し合う。

On "Dialogue" in Japanese Drama Class

Dialogue in a drama class can be of three types: 1) dialogue within the drama, 2) dialogue between members of the class, and 3) dialogue with the teacher. During dialogue between class members students may experience conflict or differences of opinion that can lead to new learning. However, teachers aren't always aware of the dialogue or what the students may be feeling. In this workshop participants will perform a short drama and then examine these three types of dialogue that take place and clarify the teacher's role in class.

参考文献

斉木ゆかり(2013)「口頭表現クラスにおけるドラマプロジェクトの試み」『日本語・日本語教育の研究—その今、その歴史』pp.54-63 スリーエーネットワーク

パラレルセッション3

パネル

8月28日（金）11:00-12:30

会場1

「非伝達的」な日本語対話能力の存在・解明・育成

* 定延利之 (神戸大学)

鎌田 修 (南山大学)

嶋田和子 (アクラス日本語教育研究所)

(* パネル代表者を兼ねる)

伝統的な言語研究は、「対話のことば、つまり話しことばを（理念としては重視するが実際には）重視しない」「対話、つまりコミュニケーションとは何かという問題を検討しようと思わず、情報の伝え合いといった通俗的なコミュニケーション観で済まそうとする」という対話軽視の因習に染まってきた。そのため、周辺領域からは「言語を中心に考えられたコミュニケーションのモデルは批判されてきたが（北村 1988: 42）、状況は改まっていない。こうした言語研究の影響を受けて、言語教育も話しことば軽視・対話軽視の姿勢から脱し切れていない。

以上の状況を打破し、対話の実質的な研究と、対話能力の真に有効な育成を実現するために、本パネルは伝統的な考えに変革を迫る新しい動きを起こそうとするものである。

その結論は、「対話の中心はいわゆる 5W1H のような命題情報の伝達ではない。むしろ日常の対話において重要な位置を占めるのは、情報伝達を司らず、一見無意味にも思えるフィラーや感動詞、終助詞である。これらのことばは状況との密接な結びつきのもとで発せられ、それだけに、これらのことばの育成には状況を考慮に入れた、全体的な視野が必要」というものである。

Existence, elucidation and development of “non-transmissional” Japanese interactive capability

Within traditional linguistic research, it has become conventional to deemphasize conversation (i.e. speech) and explain it using the common view that it is an “exchange of information,” rather than investigate the question of “What is conversation?” This state of affairs has not changed, despite criticism from related fields. The influence of linguistic research has saddled language teaching with a basic attitude of disregard for speech and conversation.

This panel discussion aims to start a movement to push for innovation in this traditional mindset in order to remedy this situation, enable substantial research on conversation, and foster truly effective conversation skills.

In short, conversation is not simply centered on conveying propositional information, such as 5W1H. The important position occupied by everyday conversation dictates not information transmission, but rather seemingly meaningless filler, interjections, and sentence-ending particles. Such words are produced in intimate conjunction with context. For that reason alone, a comprehensive perspective that takes context into consideration is necessary when teaching these words.

参考文献

北村光二 (1988) 「コミュニケーションとは何か？」『季刊 人類学』19-1, pp. 40-49.

会場1：発表1

「非伝達的」な日本語対話能力の存在

定延利之（神戸大学）

この発表は、日本語のフィラーや感動詞、終助詞が、情報伝達の枠組みではとらえきれず（第1点）、状況と結びついていることを（第2点）示す。

第1点。たとえば患者に「これを飲んでもいいですか」と訊ねられて「えーと、その薬は大丈夫ですね」のようにフィラー「えーと」や終助詞「ね」付きで答えられるのは、その問題を自分の問題として引き受ける「責任者」（医者）に限られる。「質問者」（患者）と「責任者」（医者）とを中継する「伝達者」（看護師）は、たとえ様々な仕事を同時並行的にこなし、「この医者はいま何と言ったのだったかな？」と心内で考えたとしても、「えーと」や「ね」付きで患者に答える権利を持たない。対話が情報伝達なら、対話は「伝達者」（看護師）の発話の集まりということになり、「えーと」や「ね」などを認められなくなってしまう。

第2点。たとえば「その食べ物、からいの？」と訊ねる相手に、一口試して、りきみ声でからさを教える場合は「からいー」「からいよー」いずれでもよい。だが、いまここにその食べ物がなく、過去にそれを食べた体験者としてりきみ声でからさを教える場合は「からいよー」だけが自然で、「よ」が必須である。

Existence of “non-transmissional” Japanese interactive capability

This presentation will objectively show that Japanese filler, interjections, and sentence-ending particles cannot be explained entirely in terms of information transmission and are tied to context.

Consider for example a patient who asks a doctor if a prescribed medicine can be taken together with another medicine for a different illness. The doctor might say: *Eeto, sono kusuri wa daijoobu desu ne* (“Hmm... that medicine will be fine”). Responses such as this, using the filler word *eeto* and the sentence-ending particle *ne*, are limited to “responsible parties” (i.e. doctors) when considering a problem as if it were their own problem. A person (a nurse) transmitting that information between the questioner (patient) and responsible party (doctor) would have to say to the patient: *Sono kusuri wa daijoobu desu* (“That medicine will be fine.”). Even if the nurse, busy with various other tasks, had tried to recall exactly what the doctor had just said, he/she would not be qualified to utter *eeto* and *ne* with the patient. If we treat this conversation as the transmission of information, we see only a collection of the transmitter’s (nurse’s) statements, and fail to recognize the *eeto* and *ne* that were actually present.

参考文献

定延利之（2015a）「日本語コミュニケーションにおける偽のタブーと真のタブー」

鎌田修・嶋田和子・堤良一（編著）『プロフィシエンシーを育てる3談話とプロフィシエンシー：その真の姿の探求と教育実践をめざして』pp. 6-31, 凡人社。

定延利之（2015b）『コミュニケーションへの言語的接近』ひつじ書房。

会場1：発表2

「非伝達的」な日本語対話能力の解明：

談話的直観とプロフィシエンシー

鎌田 修（南山大学）

主張：人間には、言語的／非言語的手段を介し、独話/対話を前提とした何らかのまとまりあるコミュニケーション、つまり、談話行動を成立させる能力が生得的に備わっていると考えられる。それを談話的直観と呼び、言語運用にかかわる「実力（プロフィシエンシー）」の根源もそこにある。

論証：相づちやフィラーなどは生得的で誤用不可能だと考えると（定延 2013）、まとまりのある談話の生起は談話全体を包み込むこれらの要素の共起によって可能になる。L1であれ、L2であれ、言語習得の初期段階では発話の塊がそのままの形で使用され、その後、意味ある分解を始め、次の段階へと発展していく。このプロセスは相づちやフィラーで包まれた塊としての談話が分解され、そこから文や発話が認識される過程と共通し、まず「文脈（談話）」を「分解」させ、「文型（文）」を発見させる「文脈優先型」の指導をすることがプロフィシエンシーの育成にも繋がるといえる。

ポイント:プロフィシエンシーの育成は対話／談話を可能にする談話的直観を重視した「文脈の文型化」によって可能になる。

Elucidation of “non-transmissional” Japanese interactive capability Discoursal Sense and Proficiency: In Search of the Origin of Dialogue

Claim: Given the existence of soliloquy and dialogue it could be reasonable to say that human beings possess an innate ability to accomplish coherent communication, or discourse acts, through verbal/non-verbal means. Naming this “discoursal sense,” we claim that the notion of proficiency originates there.

Rationale: Given Sadanobu’s (2013) claim that backchannelling and fillers are innately acquired and error-free, coherent discourse acts become possible with the occurrence of those items which connect a series of utterances and cover the whole unit. It is well known that for both L1 or L2 acquisition the early stage of language acquisition is characterized first as the use of unanalyzed chunks as a whole and then as initiation of the meaningful processing of the chunk. This is comparable to the processing of discourse acts---first holistically analyzing discourse as a whole which is covered by backchannelling and fillers and then to recognition of patterns and sentences, leading to “context-preferred instruction.” The development of proficiency is also based on this premise.

Point: Development of proficiency becomes possible by “processing of context,” which places emphasis on the discoursal sense.

参考文献

定延利之（2013）「フィラーは「名脇役」か？」『日本語学』32-5, pp. 10-25, 明治書院。

会場1：発表3

「非伝達的」な日本語対話能力の育成

嶋田和子（アクラス日本語教育研究所）

この発表では、対話力の育成をめざした教育を行うためには、文脈化された教室活動が重要であること（第1点）、フィラーや終助詞も初級から自然に学べる工夫が求められること（第2点）について述べる。

第1点。対話力の育成においては、場面・状況を設定し、文脈化された教室活動が求められる。文脈を無視した、句型重視の授業展開をしていては、真の対話力は身につかない。たとえば「作文を書いてきましたか」という教師の問いかけに対して、「いいえ。まだです。アルバイトで忙しいんです」といった失礼で不適切な発話を生み出す結果となる。

第2点。教育現場では正確さを重視することから形式に捉われ、言いさし文を不完全なものと考えたり、言いよどみや終助詞を軽視したりしがちである。靴を脱いで部屋に上がろうとする友人に対して、「あっ、ここでは靴を脱がなくてもいいですよ」といった発話が求められる。こうした他者との関係性を配慮した対話力を育成することが重要である。

以上の2点をもとに、初級レベルから対話教育を進めることの重要性について述べ、さらに実践例をもとに、教室活動における教師の役割、対話教育の進め方について論を展開する。

Development of “non-transmissional” Japanese interactive capability

This presentation aims to explain the importance of

1. classroom activity in a situational context
2. learning of filler and sentence particle in the elementary level

1. In the development of interactive capability, to set up a scene and a situation is required to extend classroom activity in a context. If such considerations are ignored, it must be very hard for the learners to acquire authentic interactive capability. For example, when a teacher asked to a student “Have you done your homework?” the student might answer “*lie, madadesu, Arubaitode isogashiindesu.* (No, not yet. I’m busy with my part-time job)”. His Japanese is impolite and inappropriate from the conversational view point.
2. In the classroom, emphasis on the correctness may lead to the over-evaluation of forms. Sometimes “stop in the midway” (*Iisashi*) might be understood as an imperfect sentence. And also “Hesitation” (*Iiyodomi*) and sentence particle might not be paid proper attention. For example, when you see a man is going into a house taking his shoes off, “*Ah! Kokodewa kutsuwo naganakutemo iidesuyo.* (It is not necessary to take off your shoes.)” is the proper Japanese expression. This kind of conversation, which give proper consideration to the relationship with others, is required to cultivate interactive capability.

会場2

日本語教育における「対話」の意味と可能性

—学習者と教師の「自立」の観点から—

塩谷奈緒子（東京電機大学）

武一美（早稲田大学）

新井久容（早稲田大学）

本パネルの発表者三名は、(1)言語能力を複言語的で複文化的（CEFR）なものとして、(2)学習者を主体的で自立した存在として、(3)日本語教育を主体性や自立や協働等の価値や態度を学び得る「社会的実践」「対話的实践」（佐藤、1995）として捉え、(4)学習者間の相互行為や学習者の内省行為（「対象」「自己」「他者」との「三つの関係を編み直す」対話（佐藤、前出））を重視した日本語教室活動を行っている。

このような共通点の下、一つ目の発表では、「自立した言語使用者」としての自覚と自信の獲得を目指す読書の活動の意味と対話の役割について考察する。二つ目の発表では、現代社会の諸問題を考える活動における他者との主体的な対話のあり方について論じる。三つ目の発表では、日本語教師達が自らの日本語教育観を対話を通して明らかにしていく活動を分析し、教師間の対話が日本語教育にもたらす意味を考える。

日本語教室活動における相互行為（対話）は、日本語教育の目的や教室活動の目標、教室設計と密接に関わっている。本パネルでは、発表者三名が各々の日本語教室の目標との関係性において対話の意義を考察し、日本語教育に対話を取り入れる意味と可能性について考える。

Implications and Possibilities of Dialogues in Japanese Language Education: From the Viewpoint of Autonomy and Independence of Learners and Teachers

The three presenters in this panel are engaged in Japanese language class activities that emphasize interactions and self-reflection among students (dialogues that restructure their relationship with three elements—the subject, self, and others (Sato, 1995))—by treating language skills as multi-linguistic and multi-cultural abilities (CEFR), learners as self-directed and autonomous individuals, and Japanese language education as social and interactive practices where one can learn values and attitudes such as self-direction, autonomy, and cooperation (Sato, 1995).

With such commonalities, the first presentation will examine the meaning of reading activities that aim to gain self-awareness and confidence as autonomous language user. The second presentation will discuss the way proactive dialogues with others should be in activities that consider various problems in modern society. The third presentation will analyze the activities in which teachers gradually reveal their own Japanese language educational philosophy through dialogues.

Interactions (dialogues) as part of Japanese language classrooms activities are closely related to the objectives of Japanese language education, the goals of classroom activities, and the design of classroom. In this panel, three presenters will examine the meaning of dialogue as it relates to the relationship with their own goals in Japanese language classes and consider the value and potentials in incorporating dialogues in Japanese language education.

参考文献

佐藤学（1995）「学びの対話的实践へ」佐伯胖他編『学びへの誘い』東京大学出版会、pp.49-91.

会場2：発表1

読書行為を支える3つの対話

—自立した言語使用者であるために—

武一美（早稲田大学）

本実践では、オートノミーを有する自立した言語使用者（リトル、2011、pp.51-89）としての、自由な読書行為を支えるために、本（執筆者）との対話、自分との対話、クラスメイトとの対話、という3つの対話を教室に配置した。筆者が考える「対話」とは、「自分の意見や自分の価値観を表明し、同時に相手の価値観にも触れること」（平田、2001、p.170）であり、自他の違いを見出し、自分自身の新たな思い・感覚・考えを生み出す装置ともいえるものである。

本研究では、実践における3つの対話の位置づけと意義を、教室実践の目標・内容・学習者の産出物及びインタビューをもとに分析・考察した。その結果、自由で主体的な読書行為の保障から読書の喜びが生まれること、さらに、3つ目の対話（クラスメイトとの対話）は、読書行為の相互観察・読書の喜びの響き合い、といった非言語行為を含む総合的な対話であることがわかった。本研究では、第二言語学習者のオートノミー再生を支えるものとして授業内での対話がどのように機能するのかについて述べたい。

Three Dialogues to Support Reading Activities in the Classroom: Being an Autonomous and Independent Language User

In this practice, three dialogues, namely, dialogue with the book (author), dialogue with self, and dialogue with classmates were incorporated in a classroom in order to support their free reading behaviour as independent language users with the autonomy (Little, 2011, pp.51-89). 'Dialogue', as the author sees it, is to express own opinion and value and, at the same time, to be exposed to the values of the other person (Hirata, 2001, p.170). It can also be regarded as a system to generate new feelings, senses, and thoughts by identifying the difference between self and others.

In this study, I looked at the objectives of classroom practices, materials covered, outputs produced by students, and interviews to analyse and examine the positioning and meaning of three dialogues in practice. The results showed that assuring free and self-directing reading behaviour creates the joy of reading. Furthermore, it showed that the third dialogue (dialogue with classmates) is a comprehensive dialogue that includes non-verbal behaviours such as mutual observation of reading behaviour and resonance with the joy of reading. In this study, I would like to discuss how dialogues in the classroom function to support the regeneration of such autonomy.

参考文献

- ディビッド・リトル（2011）「学習者オートノミーの実践」青木直子・中田賀之編『学習者オートノミー』ひつじ書房、pp.51-89.
平田オリザ（2001）「対話を考える」『現代の国語2』三省堂、pp.166-172.

会場2：発表2

学習者の主体的な議論のための教育実践

—「対象との対話」から「自己との対話」・「他者との対話」へ—

新井久容（早稲田大学）

ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）では、ひとが「社会的に行為する者／社会的存在」であることが前提されている。実際に社会を創り、それを変えていくのは、ひとりひとりのひとである。そして、それが可能になるのは、議論というコミュニケーションを通して、ひとが当初の選好に検討を加えるというプロセスがあつてこそそのことであろう。このように考えると、言語教育において、現代社会の諸問題について主体的に考えて判断し、ことばを用いてそれを調整しようとする意志や態度を重要視していくのは、決して理解できないことではない。

対話を「相互理解を深めたり、新しい何かを作り上げたりする建設的作業」（佐藤・熊谷、2010、p.228）と捉えれば、筆者の授業の議論もその範疇にある。ただ、議論は、明確な論題の下に行われるという点で特徴的である。社会問題を考える際には、その論題の設定自体が困難であることから、それに基づく他者との対話にさらなる困難を覚えるという学生も多い。本発表では、個々の学生が関心を持った問題について主張レポートを作成し、その活動プロセスから学んだことを互いに示し合いながら、最後に最近の社会問題について議論するという教室活動のデータを用いる。そして、学生同士がいかに議論を進めていったかという観点から、社会問題を主体的に議論する、すなわち、議論を通して他者と主体的に関わろうとする際に必要となる条件について考えていきたい。

Language Learner Autonomy in Practice : From Dialogue with the Subject to Dialogues with Self and Others

In the Common European Framework of Reference for Language (CEFR), a learner is regarded as a 'social agent'. This means an actor creates and changes society through communicative acts in practice. The presenter considers it necessary to incorporate the deliberation process for learners to act as autonomous agents into class activities, in which one can reconsider the world hitherto regarded in a matter-of-fact-manner. The importance of one's will and attitude to think and understand social problems independently, and of trying to adjust to or reconcile problematic issues, should be stressed in language education.

In this presentation, the presenter defines dialogue as 'constructive activities to understand each other and create something new' (Sato & Kumagai, 2010, p.228) and she adopts it into her classroom as deliberation, which is characterized as discussing a defined issue. It is difficult for learners to set the issue themselves as a subject for their discussion. The presenter will analyse audio recordings of the class activities, which constitute a curriculum for the topic of social understanding, and consider conditions for the learners to communicate with each other on their initiatives.

参考文献

佐藤慎司・熊谷由理(2010)「おわりに—『対話』と『協働』そして『自己実現』を育むアセスメントへ— 『アセスメントと日本語教育—新しい評価の理論と実践』くろしお出版.

会場2：発表3

日本語教育観を語り、語り直し、語り合う「対話」の活動

—教師の自立と協働を目指して—

塩谷奈緒子（東京電機大学）

筆者にとっての「対話」とは、「著者性」と「真正性」（佐藤学、1994、pp.17-24）を有し、「お互いが共振」しながら「意味を再構成し、創出する機能」（佐藤公治、1996、p.108）を持つ、自立的かつ協働的な相互行為である。そして、そのような対話を教室で発生させるためには、教室参加者達に「話し手としての権力と権威を付与」し、従来の「教室の参加者の構造」を作り直し（ワーチ、2002、pp.141-143）、教室での「能動的な教師と受動的な生徒というエコノミー」を「配置換え」（茂呂、2004）する必要がある。本研究では、このような考えの下、日本語教師を対象として日本の大学院で行っている、他者との対話や文献講読を通して自らの言語・文化・社会観や日本語教育観を表現していく活動を質的に分析する。日本語教育界では様々な教員養成・研修が行われているが、教師達が自分の過去や現在や未来について考え、自分の教育思想や価値観をグループで継続的に語り合い、語り直していく実践は少ない。本研究では、このクラスの教室対話過程と対話の教室作りを教室データと共に明らかにし、教師達による対話の活動と教師の自立と教師間の協働との関係性、学習者の自立と協働との関係性について論じたい。

Dialogic Activities among Japanese Teachers to Discuss, Re-discuss, and Exchange
Opinions on Philosophy in Teaching Japanese Language:
Aiming to Facilitate Autonomy, Independence, and Cooperation among Teachers

For me, “dialogue” is an autonomous and cooperative interaction that is onymous and authentic and has a function to reconstitute and create a meaning while resonating with each other. To generate such a dialogue in the classroom, it is necessary to grant the classroom participants the power and authority as a speaker, revamp the old structure of classroom participants; and replace the economy of active teacher and passive students in the classroom.

Based on this idea, this study will qualitatively analyze the activities held at graduate schools among Japanese language teachers to express own values on language, culture, society, and Japanese language education through interacting with others and reading literatures. There are various teacher development and training classes held in the field of Japanese language education; however, teachers rarely perform an exercise to think about own past, present, and future and discuss and re-discuss on regular basis in group about own educational philosophy. In this study, I would like to analyze the process of designing and creating the classroom for this dialogue activity, and discuss its relationship with dialogues among teachers, autonomy of teachers, and cooperation among teachers. Furthermore, I'd like to discuss their relationships with autonomy and cooperation of students.

参考文献

- 佐藤公治（1996）『認知心理学からみた読みの世界』北大路書房。
 佐藤学（1994）「教室という政治空間」森田尚人他編『教育のなかの政治』世織書房。
 茂呂雄二（2004）「指導と助言の談話過程」『日本語学』23巻1号、明治書院。
 ワーチ、J.V.（2002）『行為としての心』（佐藤公治他訳）北大路書房。

会場3

人類学・社会学とことばの教育

—ことばの教育と人類学・社会学の専門性を持った研究者の連携—

佐藤慎司 (アメリカ プリンストン大学)

村田晶子 (法政大学)

岡野かおり (オーストラリア ラトロブ大学)

Marcella Mariotti (Ca' Foscari University of Venice)

本パネルでは、ことばの教育における人類学・社会的アプローチの意義を検討し、具体的にどのような言語教育研究、言語教育実践が可能か提案を行う。従来の実証主義的な言語学習分析においては、言語、文化、学習といった概念を社会的な文脈から切り離し、抽象化した形での分析が主流であり、そこでは文化・社会は、言語学習をとりまく環境、つまり付随的な一要因として捉えられることも多かった。しかし、最近の言語教育研究では、そのような概念を、埋め込まれた状況から切り離さずに取り扱う人類学・社会的立場に光が当てられるようになっている。また、個人、言語・文化、社会・コミュニティなどの動的な関係を明らかにする、つまり、生態学的立場からの分析を行うために、エスノグラフィ、ケーススタディー、ライフヒストリーなど、人類学・社会的な手法も用いられることも多くなってきている。

本パネルではこうした研究・教育の流れを汲み、ヨーロッパだけでなく世界のことばの教育と人類学・社会学の専門性を持った研究者が連携することにより、ことばの教育に何が貢献できるのか、また、ことばの教育における人類学・社会的な視点の役割は何なのかといった問いについて考える。

Language Education: Anthropological Sociological Perspectives Collaboration between Language Educators, Anthropologists, and Sociologists

This panel examines the significance of anthropological and sociological approaches in the field of language education research and practice, and demonstrates how we can incorporate these approaches in the field. In more traditional positivistic approaches of language studies, the entities such as language, culture, and society are analyzed by separating them from its context. Here culture and society is often treated as a secondary factor to analyze language. However, more recently scholars shed light on anthropological and sociological approaches, which focus more on ecological or The dynamic relationship among the individual, language, culture, society, and community. In this panel, by collaborating among language educators, anthropologists, and sociologists in the world (Australia, Italy, Japan, and U.S.), we would like to show how we, as anthropologists and sociologists, can contribute to the language education research and practice.

会場3：発表1

人類学の方法論に基づいた日本語教育における フィールドワークプロジェクト

村田晶子（法政大学）
佐藤慎司（プリンストン大学）

外国語教育におけるフィールドワークの実施の意義に関して、Jurasek(1995)は留学前の言語文化学習と留学先での言語文化学習のギャップを橋渡しするためにフィールドワークを有効な手段だと指摘し、フィールドワークを円滑に実施するためには、留学前、留学後のオリエンテーション、振り返りジャーナルの記録をした上で、フィールドワークを始めるのが効果的であるとしている。しかし、フィールドワーク準備と実施は、人類学や質的研究のバックグラウンドのない教員にとってどのように行ったらよいのか分かりにくく、プロジェクトの意義はわかっているにもかかわらず実施に踏み込めない教師も多いのではないかと考えられる。

そこで本発表では、1) 留学前、到着後のオリエンテーションで取り上げたらよいのではないかと考えられる内容、2) 短期間で取り上げるべき人類学の基本的な概念、方法論、3) 振り返りジャーナルの書き方とコメントの仕方、4) フィールドワークの進め方とまとめ方の可能性について、具体例をあげながら、必要文献なども提示し、提案を行いたい。

最後に、発表者の考える人類学的立場、つまり、個人、言語・文化、社会・コミュニティなどの動的な関係を重視する立場から、このようなことばの教育におけるフィールドワークのプロジェクトが、学習者の言語文化の学びだけでなく、人間的成長に与える影響、また、学習者が社会・コミュニティに与える影響についても考察したい。

Anthropological Methods and Project-based Activity in the Japanese Language Education

Jurasek (1995) states that ethnographic fieldwork can help foreign language learners explore culture and language in their study abroad experiences. However, organizing fieldwork can be a challenging task for instructors who do not have an anthropological or qualitative research background, although the educational significance is recognized. Some basic guidelines are therefore needed for instructors to utilize fieldwork methods in Japanese language education.

This presentation thus proposes some guidelines for fieldwork for Japanese language instructors in study abroad programs based on an analysis of learners' fieldwork practices and relevant literature. The main items of discussion are as follows: 1) how to prepare students for fieldwork in pre-departure and arrival orientations, 2) how to utilize basic anthropological concepts and methods for short-term fieldwork, 3) how to deepen fieldwork learning experiences with reflective journals and instructors' feedback, and 4) its use in monitoring learners' fieldwork and evaluating final products. To conclude, we explore how anthropological perspectives and fieldwork can help facilitate participants' linguistic and cultural learning as well as their personal growth and social participation.

参考文献

Jurasek, R. (1995). Using ethnography to bridge the gap between study abroad and the on-campus language and culture curriculum. In C. Kramsch (Ed.), *Redefining the boundaries of language study* (pp. 221-251). Boston: Heinle & Heinle.

会場3：発表2

学習者の社会階層と日本語学習

岡野かおり（オーストラリア ラートローブ大学）

教育社会学、教育人類学の分野では、学習者を取り巻く社会的条件や制約が学習成果とアスピレーションにどのような関わりを持っているのかについて、多くの研究がおこなわれている。本論は、教育社会学の立場から、学習者の「社会階層」が外国語学習に影響するのか、もしそうならばいかに影響するのかを、英語圏のオーストラリアの日本語学習をケーススタディとして考察する。

英語圏のオーストラリアでは、外国語学習が必修でなくなった時点で大多数が外国語を継続しないという状況があるが、これは単なる個人の好みの問題ではないようだ。そこで、社会的な階層が日本語学習の継続にどのように関わっているのかを考える。学習者のモチベーションを、単なる個人の問題としてだけでなく、取り巻く社会的及び制度的背景と関連させて理解することの重要性を明らかにする。そしてこうした問題に対して、教育機関、現場の教師がどのように配慮する必要があるのかを検討する。

Learners' Social Class Background and Japanese Language Education: The Case of Australia

One of the major research interests in sociology of education and anthropology of education has long been to examine how learners' achievements and aspirations are affected by their backgrounds (e.g., class, gender and ethnicity). This paper explores how learners' social class might influence learning of foreign languages, drawing on a case study of Japanese language learning in Australia, where the language is one of the most widely taught at secondary and tertiary levels.

The majority of Australian students discontinue studying a foreign language as soon as it ceases to be a compulsory subject, as is the case with other Anglophone societies. The paper suggests that a learner's decision to give up Japanese is not simply an individual preference; and explores how his or her class background might have influenced on the decision directly and indirectly. In so doing, it illuminates the importance of understanding learner achievement and motivation in terms of social and institutional circumstances. The paper concludes by exploring how educational institutions and practitioners can use an understanding of learners' circumstances to facilitate their learning in an individualized way.

会場3：発表3

社会的行為者(social actor)としての学習者

マルチェッラ・マリオッティ (ヴェネツィア「カ・フォスカリ」大学)

本発表では、ヨーロッパで現在使用されている日本語教科書に表象される、静的な社会像、受動的な学習者像の問題点を検討し、それを乗り越えるためのことばの教育における「社会的行為者(social actor)」としての日本語学習者に焦点を当てた教育活動を設計することの重要性を、具体的な実践例を通じて明らかにする。

本発表ではまず、ヨーロッパで現在使用されている日本語教科書の分析を通じて、そこで表象される「日本社会」像、ジェンダー、市民性、権力関係と経済などの問題を検討する。そして、テキストの中で「受動的な存在」、社会に順応すべき存在としての想定されている学習者像の問題点を指摘する。

次に、伝統的な教科書を規定する「学習者、教員、内容、場面」(Doyle & Ponder 1975)の枠組みを超えて、ことばの教育の背景にあるイデオロギーと結びついた「社会的行為者」としての学習者の概念(厚東 1991)を取り入れることの重要性を明らかにする。

最後に、ことばの教育に係る教員がどのように教科書が想定する社会像、学習者観を乗り越えて、学習者を社会参加者として認めている学習活動を促進することができるのかを、「総合活動型日本語教育」(細川 2014)の枠組みから検討する。そして総合活動型日本語教育に参加した学習者へのインタビューデータ分析を通じて、なぜ「学習者」という概念から「社会的行為者(social actor)」という概念へのシフトが必要であるのかを明らかにする。

Foreign language learners as social actors

In this presentation, I consider problems that arise from the view of learners as passive subjects, and from the static social image represented in most textbook for Japanese Language teaching in Europe. To overcome these problems, I demonstrate through concrete case studies the importance of designing teaching and learning 'actions' that focus on the learner as a 'social actor'.

Firstly, through an analysis of textbooks, I consider the image of the Japanese society presented from the following viewpoints: gender, citizenship, power relations and economy. Then, I clarify the problematic points that can arise from such textbook-made-image of 'learners' as 'passive beings' who are supposed to adapt to the imagined 'society' presented in the textbooks.

Secondly, I will point out the relevance of considering the concept of 'learners as social actors' (Koto 1991), and of making this concept the background ideology for Language Pedagogy. In so doing, the frame 'learner, teachers, content, scene' prescribed in 'traditional' textbook can be overcome (Doyle & Ponder 1975).

Finally I reflect, from the standpoint of a 'global action Language Pedagogy' (Hosokawa 2014), how teachers of languages can overcome the images of society and of learner assumed by textbooks in order to promote activities/actions that truly consider learners as 'social actors'. Through interviews data analysis to participants/actors, I then clarify why it is necessary to shift from the concept of 'learner' to that of 'social actor'.

参考文献

- ・ 厚東洋輔 (1991) 『社会認識と想像力』ハーベスト社.
- ・ 細川英雄・三代純平 (2014) 『実践研究は何をめざすか--日本語教育における実践研究の意味と可能性』ココ出版.
- ・ Doyle, W., & Ponder, G. A. (1975). Classroom ecology: Some concerns about a neglected dimension of research on teaching. *Contemporary Education*, 46, 183-190.

会場 4

日本語学習者コーパスにおける対話

—ロールプレイ、メール、エッセイの分析をとおして—

田中真理 (名古屋外国語大学)
迫田久美子 (国立国語研究所)
野田尚史 (国立国語研究所)

これまでの学習者コーパスというと作文コーパスが想像され、コーパスは静的なものというイメージがあった。しかし、現在、国立国語研究所で構築中の「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS)は、数種のタスクによる「発話データ」と「筆記データ」から成るコーパスであり、データ協力者1000名の第一言語は12言語に及ぶ。本パネルでは、発話データの1つである「ロールプレイ」と筆記データの「メール」「エッセイ」をとりあげ、それぞれに表れる話し手と聞き手、書き手と読み手の「対話」を分析し、学習者コーパスが動的なものであることを示す。また、これまで公開されているコーパスは主にアジア圏の学習者が書き手であり、分析・研究対象もアジア圏の学習者のものであったが、本パネルでは上記コーパス中のヨーロッパ言語話者のデータを分析対象とする。そして、ヨーロッパの学習者のアウトプットにどのような特徴があり、課題があるのかを明らかにし、ヨーロッパにおけるスピーキング・ライティング教育に対して提言を行う。以下、順に「ロールプレイにおける依頼表現」「メールにおける読み手を意識した表現」「エッセイに表れた読み手意識」を分析する。

Dialogues in Learner Corpus of Japanese as a Second Language: Analysis of Role Plays, Emails and Essays

We tend to think that Corpus has a static image; however, the International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS), in preparation by the National Institute for Japanese Language and Linguistics, consists of two kinds of data, Spoken Data and Written Data of more than 1000 learners of twelve L1 backgrounds. In this panel, we will argue that the Learner Corpus is dynamic by analyzing the dialogues in (1) Role Play data, (2) E-mail data and (3) Essay data. Furthermore, the L1s of Learner Corporuses is, so far, likely to have been Asian languages so that studies of Learner Corpus also tend to have dealt with Asian learners. So, we will focus on the data of European learners and clarify the features of both spoken and written outputs as well as the problems, exploring implications for teaching speaking and writing in Europe. More specifically, we will discuss “Expressions of Request in Role Play by L2 Speakers,” “Expressions of Reader Awareness by L2 Email-Writers” and “Reader Awareness in L2 Writer-Learner Essays” successively.

会場4：発表1

学習者のロールプレイに見られる話し手の依頼表現

迫田久美子（国立国語研究所）

本発表では、フランス語、スペイン語、英語、中国語を母語とする日本語学習者に対して行った依頼のロールプレイを分析し、学習者の特徴を明らかにする。具体的には、日本料理店での週3日間のアルバイトを週

）（例「あの一、ご相談があるんですが」）、前提(B)（例「今、週3日働いているんですが」）、依頼(C)（例「週2日に変更させていただきたいんですけども」）の部分日本語母語話者の話し方と比較する。

その結果、開始(A)については、アルバイト先の上司に対し、母語話者は言いさし表現を使うのに対し、学習者は「ちょっと話があります」等の言い切りを使う傾向が見られる。前提(B)については、母語話者は前提をふまえるのに対し、学習者は前提をたてず、開始からいきなり依頼を切り出すため、唐突な印象を与えてしまう。本題の依頼(C)については、学習者の場合、「させていただきたい」が使えず、「～てください」「～たいです」で言い切るなど、不自然な言い方が観察された。

以上から、日本語学習者は前提部分を省略し、直接的な言い切りの表現を使うため、上司には不快な印象を与える可能性が示唆される。

Expressions of Request in a Role Play by L2 Speakers

In this presentation I discuss the features of learners of Japanese as L2 in comparison with native Japanese based on the analysis of role play data collected among French, Spanish, English and Chinese speakers. In the role play, learners who are working part time in a restaurant ask the manager to change the number of days to work from 3 days to 2 days a week.

The three parts of the role play, the start of the conversation (A) (e.g. "Excuse me, I have a favour to ask you."), the known information (B) (e.g. "As you know, I am now working here three times a week."), and the request (C) (e.g. "I would like to change the number of days to work from 3 days to 2 days a week.") were analysed compared to the data from native speakers.

In the first part (A), learners tend to use full sentences like "I have a request.", while Japanese native speakers use non-full sentences like "I have a favour to ask you, but ...". In part (B), native speakers provide mutual information before the request; however, learners do not, so they seem impolite to the manager. In part (C), since learners cannot use the expression "Please allow me to ..." in Japanese appropriately, they say "Please change the number of days.", or "I want to change ...", which also seem impolite to the manager.

会場4：発表2

学習者のメールに見られる読み手を意識した表現

野田尚史（国立国語研究所）

本発表では、ヨーロッパの学習者が特定の相手に対してメールを書くとき、どのように読み手を意識し、どのような表現を使っているかを明らかにする。

分析の対象としたメールは、ドイツ語、フランス語、スペイン語などを母語とする日本語学習者約200名が書いたものである。

学習者が書いたメールを、母語話者が書いたメールとも比較しながら分析したところ、たとえば(1)から(3)のようなことが明らかになった。

- (1) 推薦状を依頼するメールでは、昔お世話になったことのお礼を述べているものは多いが、推薦状の様式や締め切りなどを書いているものは非常に少ない。
- (2) レポートの提出が遅れることを伝えるメールでは、お詫びを述べているものは非常に多いが、いつ提出できるかといった情報を書いていないものが多い。
- (3) 観光案内を断るメールでは、別の日はどうかと尋ねたり、代わりに案内する人を提案しているものが多いが、お詫びを述べているだけのものもある。

このような調査結果から、特定の相手に対してメールを書くときは、語彙や文法だけでなく読み手を意識することが重要であり、そのような点を日本語教育でも重視しなければならないことが示唆された。

Expressions of Reader Awareness by L2 Email-Writers

This study investigates reader awareness of European learners of Japanese and what kinds of expression they use in emails with certain readers in mind. Emails written in Japanese by 200 native speakers of German, French, and Spanish were analyzed and compared with emails written by native speakers. The following was found:

- 1) In emails requesting a letter of recommendation, appreciation of things done in the past was often mentioned. However, few emails included details regarding the form of the letter of recommendation and when the letter needed to be sent by.
- 2) When the email was to inform that they would be submitting a report late, many emails included an apology, but few specified when they would submit the report.
- 3) When they were writing to say that they could not help with sightseeing, many suggested an alternative date or suggested someone else to be the guide. Some included only an apology.

These results suggest that while vocabulary and grammar are important, awareness of the reader is also important and that this needs to be kept in mind when teaching Japanese as a second language.

会場4：発表3

学習者のエッセイに表れた書き手の「読み手意識」

田中真理（名古屋外国語大学）

本発表では、エッセイにおける「対話」を、書き手の「読み手意識」という面から捉え、先行研究との比較から、ヨーロッパ言語話者の特徴を明らかにする。学習者のエッセイに具体的に表れた書き手の「読み手意識」を測る指標を、(1)メタ言語、(2)呼びかけ、(3)修辞疑問、(4)モダリティ表現、(5)終助詞、(6)マクロ構成とした（cf. 田中・阿部 2014）。エッセイは、ファーストフードと家庭料理を比較したうえで、食生活についての意見を述べるというものである。コーパス中のドイツ語、ハンガリー語、スペイン語、フランス語、トルコ語各話者のエッセイを分析対象とし、同じテーマで書かれた中国語、英語各話者と日本語母語話者のエッセイについての先行研究（田中・久保田 2014）と比較した。それらの結果を総合的に考察すると、中国語話者や日本語話者が比較中心の展開をするのに対し、ヨーロッパ言語話者は意見を中心とした展開をし、そのため、呼びかけ、修辞疑問、モダリティ表現、終助詞が多くなると推察される。しかし、修辞疑問のようなレトリックと「ね」「よ」は馴染まず、モダリティ表現（～たほうがいい等）も適切に使わないと読み手に対する配慮を欠くことになる。

Reader Awareness in L2 Writer-Learner Essays

In this presentation, considering that Dialogues in essay are viewed as writers' "Reader Awareness," I will discuss the features of European learners in comparison with previous research. The indices of "Reader Awareness" in L2 writer-learner essays are; (1) meta-languages, (2) calls, (3) rhetorical questions, (4) modal expressions, (5) sentence ending particles, and (6) macro-structures. The essay prompt requires writers to compare/contrast fast food and home-cooking, and to state his/her opinion on food habit. Essays written by German speakers, Hungarian speakers, Spanish speakers, French speakers, and Turkish speakers in the corpus (I-JAS) were analysed. Then, the results were compared with those of Tanaka and Kubota (2014), which analysed the same essays written by English speakers, Chinese speakers and Native Japanese. Synthesizing the results, while Chinese speakers and Native Japanese tend to write essays focusing on comparative/contrast, European learners have a tendency to write focusing on opinions; as the results, European learners use more calls, rhetorical questions, modal expressions and sentence ending particles than Chinese speakers and Native Japanese. However, sophisticated use of rhetorical questions does not suit to sentence ending particles ("ne" and "yo"). Moreover, inadequate use of modal expressions such as "te ha ikenai" may lack consideration for readers.

参考文献

- 田中真理・阿部新（2014）『Good writing へのパスポート—読み手と構成を考えた日本語ライティング』くろしお出版。
 田中真理・久保田佐由利（2014）「アカデミック・ライティングの構成について：L1, L2 双方向からの考察」 *CAJLE 2014 Proceedings*, 163-173.

パラレルセッション4

口頭発表

8月28日（金）15:30-17:00

会場1：発表1

日本語母語話者との対話における中級日本語学習者の聴解困難点

野田尚史（国立国語研究所）
中島晶子（パリ・ディドロ大学）
村田裕美子（ミュンヘン大学）
中北美千子（国立国語研究所）

日本語学習者が日本語母語話者と対話するとき、相手の発話の意味を適切に理解できないと、対話がうまく進まないことがある。この発表では、学習者が対話相手の発話をどう理解しているかを調査した結果に基づいて、学習者はどんなところの聞きとりが難しく、どんな誤解をしているのかを明らかにする。

調査は、日本語学習者に日本語母語話者と対話をしてもらった後、その対話の映像を見てもらい、対話相手の発話について理解した内容を自分の母語で語ってもらう方法で行った。調査に協力してもらったのは、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語を母語とする中級日本語学習者40名である。

結論としては、学習者は対話相手の発話に対して特に次のような誤解をしていることが多いことが明らかになった。

- (1) 質問文についての誤解：自分に対する質問文を質問文だと思わなかったり、何を質問されているのかを誤解する。
- (2) 否定文についての誤解：肯定文を否定文だと誤解したり、否定文を肯定文だと誤解する。
- (3) 省略文についての誤解：省略された主語がだれのことかを誤解する。

Difficulties for intermediate learners of Japanese: How do learners interpret what native speakers say in dialogues?

Foreign language learners can feel somewhat awkward during conversations with native speakers. Whereas awkwardness in speaking is an easy target to blame, problems often lie in listening comprehension. The current research investigates which parts of the listening comprehension are difficult and lead to incorrect interpretation for intermediate level learners of Japanese.

We had 40 sessions in total to collect the dialogue data from learners whose native languages were English, French, German or Italian. In each session, a learner and a native speaker of Japanese engaged in a conversation, which was videotaped. The learner then watched the video and described what he/she understood from the utterance of the native speaker using his/her native language.

The results suggest that intermediate level learners have experienced incorrect interpretations listed as follows.

- (1) Misunderstanding related to a question: Fails to recognize a question toward self or fails to understand what is asked.
- (2) Misunderstanding in an affirmation and a negation: Fails to recognize it when an affirmative form conveys negation or when a negative form does not convey negation (e.g., confirmation request using “*zya nai desu ka*”).
- (3) Misunderstanding when a subject of a sentence is omitted: Fails to identify the referent of the omitted subject.

会場1：発表2

「共話」の教育において学習者の認識に注目する重要性

田所希佳子（ボルドー・モンテーニュ大学）

「共話」とは、話し手と聞き手が一体となって談話を進行させていく日本語会話の特徴であり（水谷 1983）、笑いやあいづちなどにより共感を示す、文を共同で創るなどがある（笹川 2007）。「共話」は話し手と聞き手の気配りによって成り立ち、技術というよりは心の持ちようである（黒崎 1995）が、心理的抵抗を示す学習者もあり、心理面への配慮が必要となる。本研究では、「共話」の教育について考察するために、学習者は「共話」をどう捉えるのかという学習者の認識に注目し、日本国内外の学習者6名を対象に「共話」について考える授業を行った。あいづちや先取り場面において当事者双方に誤解や違和感の生じた箇所を編集した映像教材を視聴した後、再生刺激法によるインタビュー資料を読み、誤解や違和感の要因について話し合いを行った。「共話」を気配りと捉えるかどうかには、外国人扱いされることに対する態度など個人的要因が絡んでいるため、他者の多様な認識を知り、視野を広げる機会を設けることが重要になるのではないかと示唆された。

The Importance of Focusing on Learners' Cognition in Education on Kyowa

Kyowa (joint talk) is a characteristic of Japanese conversation, such as showing sympathy with laugh or backchannel, or creating sentences together. Kyowa consists of consideration between speakers and listeners, so it is a kind of psychological attitude rather than technique. This study focuses on learners' cognition in order to consider the education on Kyowa using the data of the lessons given for 6 learners who live in Japan and overseas. They discussed the factors of misunderstandings and discomforts of backchannels and Sakidori. It suggests the importance of sharing different cognitive styles of learners because personal factors affect the attitudes to Kyowa.

参考文献

- 黒崎良昭（1995）「日本語のコミュニケーション—共話について」『園出学園女子大学論文集 30-1』pp.45-60.
- 笹川洋子（2007）「異文化コミュニケーション場面にみられる共話の類型」『神戸親和女子大学言語文化研究』1、pp.17-40.
- 水谷信子（1983）「あいづちと応答」水谷修編『講座日本語と表現 3 話しことばの表現』筑摩書房、pp.37-44.

会場1：発表3

自然会話を素材とする共同構築型 WEB 教材を使った

「対話」と「会話」の教育

宇佐美まゆみ（東京外国語大学大学院）

昨今、厳密には、「会話」と「対話」は、異なるものであることが認識されつつある。「会話」とは、「価値観や生活習慣なども近い、親しい人同士のおしゃべり」を指し、「対話」とは、「あまり親しくない人同士の価値や情報の交換、あるいは親しい人同士でも価値観が異なるときに起こる価値のすり合わせなど」と定義されている（平田、2012）。本発表では、母語場面、接触場面、双方を含む「自然会話を素材とする共同構築型 WEB 教材」を使って、「対話」と「会話」の教育について考える。具体的には、この教材データベースの、日本語母語話者同士と、日本語母語話者と非母語話者のいわゆる自然会話データの中から、「対話」と「会話」に相当する部分を抽出し、牧野（2012）を参考に、省略や繰り返しを中心に分析する。この WEB 教材は、様々な母語場面、接触場面における自然な会話を録音・録画し、それらを蓄積してリソースバンクとしてデータベース化するとともに、「自然会話の素材（音声・動画）の投稿」、「文字化資料のアップロード、ダウンロード」などに加えて、「自然会話を素材とする教材」の「教材作成支援機能」を搭載している。この教材作成支援機能を用いると、入力画面に、ある程度指定された内容を入力してだけで、動画とその会話内容に対応した「文字化テキスト」とそれに関する解説、及び、質問事項等が、WEB 教材として表示される仕組みになっている。有資格者は、NCRB: Natural Conversation Resource Bank と名付けられたこの自然会話リソースバンクのデータを用いて研究できるとともに、「教材作成支援機能」を用いて、文法だけでなく、「省略」、「繰り返し」などの会話のストラテジー、ポライトネスや、「会話」と「対話」のやりとりの違いについて等、自身の研究に基づく解説を加えられるようになっている。

Education of 'dialog' and 'conversation' using collaboratively constructing WEB materials compiled of natural conversation.

In this presentation, I will discuss the education of 'dialog' and 'conversation' using collaboratively constructing WEB materials compiled of natural conversation. Natural Conversation Resource Bank (NCRB) is quite a new system because it is the system that can be constructed collaboratively by owner and users. It is the supporting system for making "teaching-materials (using natural conversation)," which any user can upload the teaching materials that he or she created according to the needs of the users' teaching environment.

【引用文献】

- 平田オリザ（2012）.日本語教育と国語教育をつなぐ「対話」、『対話とプロフィシエンシー』、凡人社
 牧野成一（2012）.省略と繰り返しー「会話」と「対話」の機能論的分析ー、『対話とプロフィシエンシー』、凡人社

会場2：発表1

日本語環境は短期留学生の対話能力にどのような作用を及ぼすか

谷部弘子（東京学芸大学）

高橋美奈子（琉球大学）

本田明子（立命館アジア太平洋大学）

本研究は、非日本語環境で学んだ日本語学習者が、どのような日本語を身につけているか、またそのような学習者が来日後限られた期間内で日本語環境において新たに何を獲得するかを探索的に明らかにすることを目的とする。本発表では、とくに対話の維持という観点から、学習者の日常談話を観察・分析した結果について報告する。

分析に使用したデータは、学部レベルの国費留学生である日本語日本文化研修留学生計18名の日常談話である。協力者には、日本語母語話者との会話および学習者同士の会話の2場面を、来日後2か月以内および帰国前の1ヶ月以内にそれぞれ15~30分程度録音してほしいと依頼した。このデータをもとに、来日時と帰国前の発話にどのような変化が見られるかを観察した。その結果、いわゆる「雑談」を維持するための言語行動においてバリエーションの広がり確認された。中級レベルの学習者の来日時談話では比較的単調な「情報要求」や「情報提供」の連鎖であったのが、帰国時談話では「応答」「驚き」「共感」「確認」などのバリエーションや、対話の維持に積極的に働きかける主体的な行動が多くなり、言語ホストとしての参加も見られるようになった。

Dialogic Effect of Japanese Environment among International Students on Short Stay Programs

This study aims to ascertain the type of Japanese that international students learn in their non-Japanese environment and to evaluate their level of attainment, particularly that which pertains to conversational Japanese, at different phases of their stay in Japan. Eighteen students were involved in the study and all of them were enrolled in Japanese universities as Japanese Studies Students. In order to assess the level of their progress, the students were requested to make a recording of their conversation, of approximately 15-30 minutes in duration, two months after they started the program in the Japanese university and one month before they departed to their respective countries. After comparing the two recordings at different phases of their engagement with the Japanese language, it was concluded that their involvement shifted from one centered around prompting and promoting dialog that was merely intended to gather or provide information to a more diversified and nuanced involvement in conversation, such as that which accompanied surprise, empathetic and subtle responses and clarification and confirmation of the intent being expressed. The results obtained demonstrate that the participants in Japanese language and culture programs developed from mere conveyers and providers of information to more nuanced and active participants and agents of conversation.

会場2：発表2

日本滞在を経て学習者の相互行為参与の形がどう変わったか

—マルチモーダルの分析—

東伴子 (グルノーブル大学 Lidilem)

本発表では、日本での研修を経たフランス語母語話者学生が、日本語での相互行為への参与の仕方において研修前に比べどのような変化が見られるかをマルチモーダル分析を通して明らかにすることを目的とする。近年、欧州の高等教育機関では、モビリティ制度の普及により日本で半年～一年の交換留学、企業研修を遂行し、帰国後日本語学習を続けるタイプの学習者が増えている。学習者は日本滞在中、日常的な社会的相互行為を実践し、さまざまな交渉を経て相互行為能力を習得している。このように、言語学習を認知的な習得でなく、相互行為を通しての社会的な習得と捉えることができる。このような観点から、基礎段階の日本語学習者のケースを取り上げ、1年間の日本研修実施前と帰国後に収録した母語話者との会話(各30分)を比較分析した。当発表では、聞く態度、応答する態度、説明をする態度に焦点をあて、発話行為と共起する身体動作(体や頭の動き、視線)の変化を綿密に分析し、学習者が相互行為をどのように組織化し、どのように参与するようになったかを考察した。この考察を通して学習言語以外の学習環境における相互行為能力の指導法に関して提言を行いたい。

Multimodal analysis of changes in a learner's interactive acts after a stay in Japan

This presentation uses a multimodal approach to examine how a French student's interactive acts changed after an internship in Japan.

Recent years have seen an increase in the mobility of students in European higher education institutions, with a rise in the number of the students staying in Japan for six months or one year, then returning to their home institution and continuing to study Japanese.

These students acquire interactional competence through everyday interactional practices and negotiations during their stay in Japan. Therefore, second language acquisition can be considered not only as a cognitive level acquisition but also as a social acquisition.

This study compares two conversational datasets from a basic level learner of Japanese: data from before his internship in Japan and data after his return to France.

This presentation describes and analyses the changes in his verbal actions and co-occurring gestures (movement of body and head, gaze). It focuses on the learner's listening, responding and explicating attitudes in order to clarify changes in how he organized interactions and participated in them. Pedagogical implications are discussed, in particular how to teach interactional competence in an exolingual context.

参考文献

Duranti, A., Ochs, E. & Schieffelin, B.B. (2015) *The Handbook of Language Socialization*. Wiley-Blackwell.

Kendon, A. (2004) *Gesture : Visible Action as Utterance*, Cambridge University Press.

串田秀也 (2006) 『相互行為秩序と会話分析』世界思想社.

会場2：発表3

日系企業・団体との対話を取り入れた中上級日本語学習環境

—状況的学習論からの分析—

吉岡薫（ボン大学） 赤羽優子（ボン大学）
加藤由実子（ハイデルベルク大学） 田村直子（ボン大学）

ボン大学修士課程中上級日本語コースでは、学部主催の「学生翻訳コンテスト」の運営をシラバスに取り入れている。本報告では、このコースについて「状況的学習論」（Lave & Wenger 1991）という観点から分析し、学生の感想や企業からの反応も交えて報告する。コンテスト運営にあたり、授業では、まず種々の必要テキスト（メール、手紙、ポスター等）の平行テキスト分析（田村 2014）を行った。続いて学生が実際に作成したテキストを使用して、近郊の日系企業・団体とコンタクトを取り、企業訪問に関するソーシャルスキル学習（田中 2010）と訪問ロールプレイを経て、企業を訪問し、コンテストの説明をして協賛を得た。最終的に翻訳コンテスト表彰式への企業担当者の招待、表彰式での司会、来賓とのスモールトーク、謝礼メール等のタスクを行い、半年以上に渡り学生と企業担当者のメールのやり取りという形の対話が続いた。状況的学習論では、学習とは実践のコミュニティへの参加の深まりと考えるが、上記の一連の活動を通じて、学生に翻訳コンテスト運営母体というコミュニティ、あるいは企業担当者との小さなコミュニティに参加し続ける環境を提供できたのではないかと分析する。

Providing a learning environment involving Japanese corporations:
Analyses from the Situated Learning viewpoint

This is a report on two consecutive master's level Japanese language courses at the University of Bonn, in which the syllabi involved organizing the "University of Bonn Student Translation Contest". Subsequent participation in the contest itself was voluntary. As preparation for contacting potential sponsors for the contest, the students, a number of whom are German-Japanese translation majors, were first introduced to various text formats as parallel German and Japanese text examples (Tamura 2015). With the goal of gaining sponsors and prizes for the contest, they then established contact with local Japanese corporations and governmental /academic offices using the Japanese language. Following social skills training (Tanaka 2010) in the classroom, they personally visited their corporate counterparts to secure the sponsorship of the contest. The contest culminated in the award ceremony, to which the sponsors were invited. The project engaged the students with the sponsoring partners for over half a year.

In "Situated Learning" (Lave & Wenger 1991), any learning is considered to result from the deepening of active involvement in a community. It was expected that extending the learning environment beyond the classroom would provide students with such experience. The course, students' reactions, and comments from the local community are analyzed from the "Situated Learning" viewpoint.

参考文献

Lave, J & Wenger, E (1991) *Situated Learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press.

田中共子 (2010) 「異文化適応とソーシャルスキル」『日本語教育』146, 61-75.

田村直子 (2015) 「翻訳コースと日本語コースの協働実践例」『第18回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』215-220.

会場3：発表1

トルコ人日本語学習者の朗読音声に現れる母語の影響

石山友之（チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学）

本発表では、トルコ人日本語学習者による日本語の朗読音声に現れる母語の影響について考察を試みた。学習者による日本語の朗読音声を録音し、母語話者によるものと比較した結果、文中に置かれたポーズの前と述部の前で、ピッチの上昇が見られることがわかった。トルコ語の朗読音声でも同様に、文中に置かれたポーズの前や述部の前でピッチの上昇が見られた。Konfilt(1997)は、トルコ語では動詞の前の構成素にイントネーションのピークが置かれるとしている。また、Demircan(2013)によると、トルコ語ではピッチの上昇が発話の継続、ピッチの下降が発話の終了を示す役割を担っている。そのため、学習者の日本語での朗読音声に見られるピッチ上昇は、トルコ語の韻律規則が適用された結果であると考えられる。さらに、ピッチ上昇が日本語としての「自然さ」に与える影響について調査するため、学習者の朗読音声のピッチを上昇または下降させた合成音声を6種類作成し、日本語母語話者に聞かせ、7段階で自然さを評価させた。その結果、ピッチを最も大きく下降させた音声の評価が最も高く、ピッチが上昇する毎に評価が下がっていくことが明らかになった。

Influence of Mother Tongue on Recitation by Turkish Learners of Japanese

The purpose of this study is to analyze influence of learner's mother tongue on the recitation. Recordings of the recitation in Japanese by Turkish learners were analyzed. The results indicate that pitch rising occur in the mora before pauses in the sentence and in the preverbal mora. These are seen also in recordings in Turkish. Konfilt (1997) has stated that the intonation peak is on the preverbal constituent of the sentence. Demircan (2013) has pointed out that pitch rising indicates the continuation of the speech. Therefore it is clear that pitch rising in recordings are interference of the role of pitch in Turkish language. The experiment of evaluation by native Japanese speakers shows that pitch has an effect on the naturalness of Japanese.

参考文献

Demircan, Ö. (2013) *Türkçenin Sezdizimi(4. Basım)*. Istanbul, Der Yayınları.
Kornfilt, J. (1997) *Turkish (Descriptive Grammar)*. London and New York, Routledge.

会場3：発表2

インターネットを活用した音声指導

ーヨーロッパ圏日本語学習者を対象としてー

戸田貴子（早稲田大学）

大久保雅子（東京大学）

千仙永（早稲田大学）

早稲田大学では従来の対面式授業とは全く異なる新しい発音科目「なめらか!発音3-4」を2012年より設置し、インターネットを活用した発音指導を行っている。この授業のオンデマンド講義には様々な機能が搭載されている。そのひとつに、学習者が自分の発音を録音した音声ファイルを提出し、支援者（メンター）にフィードバックをもらう「発音チェック」という機能がある。この機能は、音声提出時に学習者自らもコメントできるようになっており、学習者はフィードバックを得るだけでなく、学習者とメンターが自由にやり取りを行うことが可能である。

本研究では、メンターのコメントが学習者の発音学習支援として機能したかどうかを明らかにするために、まずコメントの内容を質的に分析した。次に、再提出のあった音声ファイルを音響解析し、学習者の発音の変化に焦点を当てて分析した。

分析の結果、メンターのフィードバックがヨーロッパ圏日本語学習者の発音学習を支援し、習得を促したことが明らかになった。このことは、従来の対面式授業の物理的・時間的制約を超えた音声教育実践の意義を示しており、遠隔地や海外の日本語学習者への発音学習支援の可能性を示唆している。

Teaching Japanese Pronunciation using Internet
- A case study of European Learners of Japanese -

In 2012, we started the new pronunciation class using the internet, "Speaking Japanese with fluency 3-4" at Waseda University. This class is totally different from the traditional pronunciation class based, face-to-face interaction. Various functions are provided through the on-demand lecture. For example, there is the function called "the pronunciation check", by which learners record their own pronunciation, submit an audio file and get feedback from a supporter (mentor) to improve their pronunciation. As this function allows the learner to write comments when they submit their file, the learner can interact with their mentor more freely, instead of just receiving feedback.

In this study, we conducted a qualitative analysis on mentor's comments to find out whether they functioned to support learning for the learner. Then, acoustic analysis was conducted on resubmitted audio files, in order to find out whether learners' pronunciation was improved.

The results of this study revealed that the mentor's feedback effectively supported European learners' acquisition of Japanese pronunciation. This suggests that a new style of teaching pronunciation is possible instead of a traditional face-to-face teaching, which can overcome the restrictions of time and place, and expand its application to the distance learning for overseas Japanese learners.

参考文献

大久保雅子・張婉明・趙靚（2014）「オンデマンド授業における発音学習支援-メンターによる『発

音チェック』機能を中心に-」『早稲田日本語教育学』第16号, pp.39-60.

戸田貴子（2008）「日本語学習者の音声に関する問題点」『日本語教育と音声』くろしお出版, pp.23-41.

会場3：発表3

活動型授業における音声評価ルーブリックの作成の試み

金村久美(名古屋経済大学)

中川千恵子(早稲田大学)

林良子(神戸大学)

磯村一弘(国際交流基金/政策研究大学院大学)

日本語の音声指導においては、適切な評価を行うことによって、より高い指導効果が期待できるが、教育現場において学習者の音声をどのような基準から何をどう評価すべきかという議論は、これまであまり行われてきていない。これは、学習者の習熟度、教室の環境やコースの趣旨などによって重要となる項目が異なるため、客観的な基準を設けることが難しいことが理由であると考えられる。

そこで本発表では、複数の教師がそれぞれ異なる授業の目的に応じた音声評価ルーブリックを作成し、その評価基準について対話的に検討することによって、学習者の音声を共通して評価できる基準を設け、これを音声指導に取り入れた実践について報告する。

本発表で報告するのは、2種類の活動型授業における取り組みである。1つはラジオ番組を作成する活動であり、もう1つは演劇クラスにおける練習の一環としてスキットを演じる活動である。いずれも、作品製作と評価を繰り返し行いながら、評価基準の項目の選択や妥当性を、学習者同士が対話により検討した。

Designing Rubrics for Assessing Pronunciation in Activity-based Classrooms

In order to teach Japanese pronunciation effectively, it is necessary to assess learners' pronunciation appropriately. However, there has not been much discussion about what kind of basis should be used to assess learners' pronunciation. The reason is because it is difficult to decide upon common criteria due to the importance of each evaluation point. These points will vary depending on the difference of learners' level, classroom environment and objectives of the class among others.

In this practice report, we will present how two different teachers designed rubrics for assessing pronunciation for their classes. Through the discussion about the criteria between the teacher and the students in each class and then between the two classroom teachers and other teachers, sharable criteria for assessing pronunciation was suggested.

Two types of activity-based classrooms will be reported here; one is making a radio program, the other is drama. In each class the students discussed in sequence of performance and assessment interactively with the teacher about validity and appropriateness of the criteria for the rubrics.

会場4：発表1

日本語教育とディスレクシア

—ヨーロッパの日本語教育機関における対応の現状と展望—

池田伸子（立教大学）

大島弘子（パリ・ディドロ大学）

西澤芳織（オックスフォード大学）

守時なぎさ（リュブリャーナ大学）

「インクルーシブ教育」の広まりに伴い、日本語教育機関でも学習障害を抱える学生への対応が求められるようになった。特に、学習障害のなかでも大部分を占めるとされ、言語学習に大きな影響を及ぼすディスレクシアについては、現場の教師が認識を高め、学習者の効果的学習を促進・支援する具体的対応策を知っておく必要がある。文科省科研費助成（2012—2014年度、科研費番号：24652105、代表：池田伸子）を受け実施した、日本語教師養成課程用ディスレクシアの手引き書を作成するための基礎研究では、欧州各国でディスレクシアの認定方法や支援体制が異なること、また、大学教育においては、ディスレクシアの症状に伴う困難を緩和するための措置が中心であることが明らかになった。この調査結果と先行研究の知見を踏まえ、本発表では、欧州の日本語教育機関に向けて行った、教師の意識と現状を問う調査の結果をまとめるとともに、教師への聞き取り調査、ディスレクシアの学生へのインタビューデータの分析を行い、欧州の日本語教育の分野におけるディスレクシアの学習者支援に関する現状と問題点、そして今後の展望についても言及する。

Supporting Japanese Language Learners with Dyslexia at Language Institutions: What an European-wide survey can tell us

As inclusive education spreads, the number of students with documented disabilities in language classrooms is increasing. Institutions and teachers are now required to make suitable arrangements so that students can succeed. In particular, teachers need to be highly aware of dyslexia, because this commonly diagnosed condition may have a major impact on learning a new language. Motivated by such a need, a KAKENHI aided project (2012/13-2014/15, Grant #: 24652105, Representative: Nobuko Ikeda) was carried out to develop a teacher handbook to support learners with dyslexia. The findings of the project include that the assessment procedure and support system for dyslexic students varies by country within Europe, and special conditions are the major form of support at university level. An European-wide survey on teachers' awareness and provision for students with dyslexia in Japanese language institutions, has then been designed based on the project findings. Our presentation will report on the survey results. Data from follow-up interviews with teachers and students will also be presented for analysis. The presentation will conclude with highlighting identified issues and future research directions.

参考文献

池田伸子（2013）「日本語教師はディスレクシアをどう認識しているのか—日本語教員養成プログラム開発のための基礎研究—。『日本語教育実践研究』1, 1-15.

会場4：発表2

Identifying Classroom Interactional Features of Japanese Social Studies Lessons - Cognitive Demand and Scaffolding -

Yoshiko Usui (Dokkyo University)

A good understanding of classroom interactional competence (CIC) will lead to learning-oriented interactions¹. As a first step in understanding what should constitute CIC in a content-based language classroom, classroom interactions of a total of 13 Japanese lower secondary social studies classes were analyzed, operationalizing CIC as questioning as well as planned and contingent scaffolding. The paper analyzed teachers' questioning practice with a focus on the extent to which these questions challenged learners cognitively and the way they provided learners scaffolding. While the results of the quantitative analyses showed that teachers asked predominantly display questions stimulating lower order thinking skills (e.g., recall of facts), the qualitative analyses showed that these questions were asked to help learners reach higher cognitive lesson goals. In other words, cognitively challenging tasks were framed in the lesson with planned and contingent scaffolding², extending students' ZPD and assuring students to complete them. Understanding of such interactional features of Japanese social studies lessons will not only help identify problems that JSL learners in regular Japanese classrooms face but also CIC features that help JSL teachers improve learners' learning opportunities.

日本の中学校社会科授業における対話分析 - 認知負荷およびスキファオルディング（足場がけ） -

教室内的相互行為能力(CIC)は学習を促す相互行為に結びつく¹。コンテンツ重視の語学授業におけるCICの構成要素を理解する目的で、日本の中学校社会科授業の相互行為を教師の「発問」の認知負荷の程度と「足場がけ」という観点から分析した。量的分析の結果、認知負荷の低いとされる既習事項を「思い出す」タイプの質問が圧倒的に多かった一方で、質的分析の結果、これら低次処理の質問は認知負荷がより高いタスクを遂行・達成するための「足場がけ」としての役割を果たしていることがわかった。つまり、「計画的および偶発的足場がけ」²により学習者のZPDが拡張され、高次処理を要するタスクが遂行・達成されている。日本の社会科授業の相互行為の特徴を明らかにすることで、日本語を母語としない学習者が直面するであろう問題の特定のみならず、日本語教師が日本語学習者の学習機会を最大化する支えとなるCICの特定につながるであろう。

¹Hammond, J. (Ed). (2001). *Scaffolding*. Sydney: PETA.

²Walsh, S. (2011). *Exploring Classroom Discourse: Language in Action*. London: Routledge.

会場4：発表3

日本人の『ちょっと面白い話』は日本語学習者に伝わるか

—フランスにおけるアンケート調査の分析結果から—

山元淑乃（琉球大学）

ジスラン・ムートン（琉球大学）

一般の日本人が語る「ちょっと面白い話」の動画に字幕をつけ、日本語学習者がその面白さを、どの程度理解し、どのように評価したかを調査し、字幕翻訳の可能性と限界を探索する。音声言語研究データ共有化の取組として、神戸大学国際文化学研究推進センター主催により2010年から実施されている「わたしのちょっと面白い話コンテスト」の参加作品は、日本語字幕と一部多言語字幕が付けられ、インターネット上に公開されている。この作品中、日本で高評価を得た5作品（4作品は対話形式による）について、フランスの大学で日本語を学ぶ学習者140名を対象にアンケート調査を行った。調査の結果、学習者と日本人の間に、作品の評価に対する差がみられた。例えば、日本で高評価を得た「ハゲ頭」を扱った作品に対する評価が、フランスでは低かった。その理由として「幼稚」「差別的」等が挙げられ、ハゲ頭がユーモアの対象となっていない実態が明らかになった。また面白さの評価について、日本語運用能力、年齢、性別、字幕の役立ち度との間に相関関係がみられること、学年が上がるにつれ理解のために字幕を使用していないことなど、いくつかの興味深い傾向が観察された。

Can “Funny Talk” by Japanese Native Speakers be Translated?

- Through the analytic results of a questionnaire survey -

How much do Japanese language learners understand the humor of stories told by Japanese native speakers when they are subtitled? A survey questionnaire conducted in a French University produced some interesting results. The folk art of storytelling, titled “My Funny Talk Tournament” has been organized on the internet since 2010 by the Research Center for Promoting Intercultural Studies of Kobe University in Japan. All the video and audio data are subtitled in Japanese, or multilingually, and are available for free on the internet. We chose 5 stories, which were highly ranked among a Japanese audience, then asked 140 French native speakers, who are Japanese learners to answer the questionnaire. We were able to observe some differences between the way Japanese native speakers and the learners rated the humor. For example, the funniest story among the Japanese audience, which was about a “bold” man, was not found funny by the learners. Their ratings correlated with their: (1) Japanese language proficiency, (2) Age, (3) Sex, (4) Use of the subtitles etc... We also found that the higher their proficiency level is, the higher their rating becomes, and the less likely they are to use subtitles for their comprehension.

参考ウェブサイト

神戸大学大学院国際文化学研究科国際文化学研究推進センター「「わたしのちょっと面白い話コンテスト」第5回公式サイト」<<http://www.speech-data.jp/chotto/>>（2015年6月22日）

パラレルセッション5
AJE プロジェクト報告
パネル
口頭発表

8月29日（土）11:10-12:40

会場2：パネル

複数言語環境に生きる人々の「日本語使用、日本語学習」の 意味とアイデンティティ

三宅和子（東洋大学）

川上郁雄（早稲田大学）

岩崎典子（SOAS, University of London）

複数の言語環境下に生きる人々にとって、日本語の使用や学習には、それぞれの社会的な環境や言語バイオグラフィが深く関わっている。本パネルでは、それらの人々の日本語をめぐる認識や葛藤の変化を、3つの異なる視点から考察し、自らのアイデンティティの選択として日本語を学ぶこと、日本語を学習させることの意味を、方法論や目的論を超えた議論として展開したい。

発表1では、母親の語りを通して、子どもの日本語学習が親子の紐帯や母親自らのアイデンティティの証しとして機能していること、継続や中断は努力や意識の優劣によるのではなく、言語環境、家庭環境、夫や家族の理解などの複雑な要因が絡むことを示す。

発表2では、学習者の大学生が親の願いや期待とは別次元で自らの言語資本を考え、自己アイデンティティを捉えていること、家庭環境、移動の歴史、子どもにとって意味のある言語活動と他者の存在等がその認識に影響を与えていることを示す。発表3では、多言語環境で成長する中で日本語と遭遇し、英国の大学で専攻する選択をした欧州の学生をとりあげ、その遭遇の形と専攻最終年の言語アイデンティティを分析し、欧州における日本語教育の意義を考える。

The Meaning of Using and Learning Japanese in Multilingual Environments: In Search of Identity

For those who live in diverse linguistic environments, social backgrounds and linguistic biographies play a key role in influencing their attitudes, reasons for and ways of using/learning Japanese. This panel aims to capture the attitudes of people ‘on the move’, and their inner conflicts, towards the Japanese language. It explores the significance of children learning and maintaining the Japanese language, in terms of their own identity negotiation as well as their parents’.

The 1st paper analyzes narratives of Japanese mothers in the UK. It maintains that the children’s use of Japanese serves to strengthen mother-child bonds as well as the mothers’ identity. It argues that the success/failure at maintaining Japanese involves complex factors and should not be treated as direct results of the parents’ effort or motivation. The 2nd paper focuses on the memories of university students and their parents who have lived in multilingual environments. It maintains that the students’ awareness of their own plurilingual competence and identity are formed through memories such as experiences of moving to different countries and language learning, as well as their relationships with meaningful others. The 3rd paper deals with students who encountered Japanese while living in multilingual environments in Europe and decided to study it at a UK university. It explores the significance of studying and teaching Japanese in Europe today, by analyzing the students’ first encounter with Japanese and examining their linguistic identity during their final year of study.

会場2：発表1

在英国国際結婚家庭における「日本語学習」をめぐる親と子の葛藤と選択

三宅和子（東洋大学）

本発表は、国際結婚した在英の子育て世代女性10名に行ったインタビュー調査をもとに、子どもたちの日本語学習をめぐる語りを分析し、複数言語環境下で「日本語を続ける」ことの意味を考える。

子どもの日本語習得に関する母親の語りには、実利と情動の両面がみられる。将来の選択肢を広げ、就職に有利といった実利的な側面、日本の家族との関係維持や、複数言語で得られる世界観の広がりといった実利と情動を兼ね備えた側面もあるが、最も多いのが、「半分日本人なのだから…」、「子どもが日本語がわからないと私の一部がなくなるような…」といった情動的な発言である。「方言を話すようになって愛おしさが増した」といった発言からも、日本語を通して親子の紐帯が強まる実感や、子どもが日本語を話すことが母親のアイデンティティの一部となっていることがうかがえる。

日本語を断念するケースも少なくない。その背景には父、母、子どもそれぞれの関心や志向性、親子関係、子どもの日本をめぐる経験の質や記憶などが多様に影響しており、子供と日本・日本語との付き合いは新たな局面を迎えて継続するものであり、失敗や成功といった二元論で語られるものではない。

Conflict and Acceptance over Learning and Maintaining Japanese between Mothers and Children of International Marriage families

This paper analyzes narratives of Japanese mothers, who are married to the UK citizens and settled in the UK, on their children's learning and maintenance of Japanese. In particular, it explores the significance for the mothers of continuing to use Japanese and seeing their children learn and maintain Japanese in the UK.

In the narratives, the mothers' wish for their children to acquire Japanese appear to be motivated by primarily two desires: utilitarian and emotional. While many noted benefits of bilingualism such as increased employment opportunities, broadening horizons and the maintenance of ties with family in Japan, the most salient were emotional rationalizations such as 'Because they are half Japanese...' and 'I feel like losing a half of myself if my child cannot speak Japanese'. 'My attachment deepened when my child started speaking in my local dialect.' is another example of how children's use of Japanese serves to strengthen the mother-child bond. Moreover, the analysis reveals how bringing up their children bilingually forms an important part of the mothers' identity construction.

Finally, in the context of growing interest in heritage language maintenance, this paper seeks to demonstrate the complex processes and factors which influence children's successful attainment of bilingualism, which go beyond parents' efforts and motivation.

会場2：発表2

「移動する子ども」という記憶に親子はどう向き合うのか
—幼少期より複数言語環境で成長した大学生とその親の語り—

川上郁雄（早稲田大学）

「移動する子ども」とは、空間、言語間、言語学習場面間（言語教育カテゴリー間）を移動する子どもという分析概念であって、その中心にあるコンセプトは「記憶」である。幼少期より複数言語環境で成長する子どもは、異なる言語で他者をつながる体験、つながらない体験が記憶として自身に刻み込まれ、子どもの複合的なアイデンティティ形成に影響していく。その過程は自らの言語資本と向き合う経験であり、記憶の意味づけはライフコース全般に及ぶ。

このような子どもの言語使用と言語学習に対する意識と、その親の子どもに対する意識についてインタビュー調査を行った。子どもは親の願いや期待とは別次元で自分の言語資本を考え、自分のアイデンティティを捉えている。そこには、家庭環境、家族の移動の歴史、子どもにとって意味のある言語活動と他者の存在等が影響を与えている。本発表では、大学生が幼少期より複数言語環境で成長したことをどのように意味づけ自らのアイデンティティを形成してきたか、また親が自分たちの子どもを複数言語環境でどのように育ててきたと考えているかを軸に、その意味を検討する。

Memory as Children Crossing Borders:
On Narratives of Children Growing Up in Plurilingual Settings and Their Parents

Children Crossing Borders (CCB: Kawakami, 2006) is an analytical concept, which can be used to analyze and understand the life of children crossing spatial and linguistic borders in learning and using different languages. Memory is at the core of this concept, in particular, the memory of success or failure these children have had in communicating with others growing up in plurilingual settings. These experiences of success or failure are constructed as either fun or difficult memories. These memories are also influenced by socio-cultural factors and transform depending on daily negotiations with others in the social context. As a result, these memories and their recollection construct and reconstruct the diverse identities of such children over their life paths.

This paper focuses on the memories of university students and their parents who have lived in two or more languages. Based on interviews with these students in Japan and their parents, this paper analyzes how the awareness on the students' plurilingual competence and their identity are influenced or not by their family history, the various borders crossed, the languages learning settings, language activities and their relationships with meaningful others.

会場2：発表3

日本語のために移動する学習者たちの言語観とアイデンティティ

—複数言語環境の欧州で—

岩崎典子 (SOAS, University of London)

本発表では、日本語を専攻するために英国に移動した欧州の学習者を取り上げ、いかに日本や日本語と遭遇し、日本語専攻4年目にはどのような言語アイデンティティを構築したのかを探る。対象となったのは、ポーランド、スペイン、フランス、オランダ出身の学生で、母語の他にも幾つかの欧州言語の学習経験があったが、英国に移動して、日本語を専攻し、さらに3年目には日本に留学した。彼らにとって日本語などのような意味を持つのか。

言語ポートレート(Krumm 2008; 姫田 2012)を用いると、複数言語使用者の各言語の関係や位置づけが明示され、言語アイデンティティを明らかにできる。日本留学後に、この方法を用い、身体をかたどった線画の上に自分の言語を位置づけて説明することを求めた。彼らにとって日本語は、心臓(大事な/大好きな言語)(3人)や脳(考える言語、頭脳を使う言語)(3人)であり、日本語への熱い想いが顕著に現れる一方、母語こそが心臓(感じる言葉)(1人)と考えている場合もあった。欧州にしながら日本語を選択する学習者の背景と彼らの言語アイデンティティの調査を通し、欧州における日本語教育の意義を考察する。

The Linguistic Identities of European Students Majoring in Japanese in England

This study sheds light on the place of Japanese language and culture in the cultural and linguistic identities of four university students who have left their home countries to study Japanese as their major at a university in England. They came from the Netherlands, Spain, Poland, and France. They participated in interviews before and after they spent one academic year in Japan. After the year abroad, they also drew their own language portraits, by placing each of the languages they know on a drawing of the human body where they associated the language. They then explained their choice. The interviews revealed that they grew up with exposure to multiple languages and became interested in Japan and Japanese from a young age, being influenced by their family members, or by video games or animation. Their time in England and in Japan further deepened their interest. Their language portrait showed the students' passion and longing to be in Japan and use Japanese (placing Japanese on their hearts) and/or their engagement in the language (placing Japanese on their brain <to learn the language and to think hard in order to use it>, hands, ears and/or mouth <to write, listen, and/or to speak).

会場3：口頭発表1

漢字系統樹 2800 の作成とその意義

善如寺俊幸（元東京外国語大学）

漢字の字源に基づく字形構造的関係を系統的に示した「漢字系統樹」の考えとその意義を説明するとともに、漢字 2800 字の関係を俯瞰できる「漢字系統樹表 2800」を公開する。その「漢字系統樹」を辿って推理しながら漢字を系統的に学習する斬新な方法も紹介する。

漢字の字形を構造的に分解していくと、幾つかの有意パーツ（構成要素）に分かれる。その中心的パーツは、従来の左半の「偏」にではなく、字源論的にはむしろ右半の「旁」にあることがわかる。「日」群「莫」系の系統樹を見ればわかりやすい。

日 莫 暮 募 墓 慕 模 幕 膜 漠

これを基に、対話を展開しながら、学習者の好奇心を喚起して漢字創成の謎解きをしていく指導法も可能になる。

漢字は形を基に作られた。「山」は形から作られたことがよくわかる。

-では「車」はどんな形から作られたか？

-「軍」になぜ「車」が使われているか？

-形のないものはどうやって表したか？

-「つよい」は何を使って表すか？

-3500年前の中国では、「つよい」と「よわい」を表すのに「弓」を使った。なぜか？

-「強」には「虫」が使われているが、なぜか？

The Kanji Systematic Tree for 2800 characters

The concept and signification of "The Kanji Systematic Tree" will be introduced. The table which shows the overall Kanji relationships among 2800 characters will also be presented.

When we break singular Kanji into different parts, it can be recognised that each individual part has different meanings. For example, a branch of "日" group "莫" series is categorized as shown below.

日 莫 暮 募 墓 慕 模 幕 膜 漠

By applying this concept to Kanji teaching method, learners can visualize how Kanji have been formed, and it can result in them being more curious.

Kanji has been formed based on its shape. It is well understood that Kanji "Mountain (山)" was formed by its appearance.

- Then, how has the appearance of the "Car (車)" been formed into Kanji?

- Why "Army (軍)" has "Car (車)" as a component?

- What about the words such as "Strong (強)" that do not have any appearance?

- "Bow (弓)" is used to represent "Strong (強)" and "Weak (弱)". Why?

- Why "Insect (虫)" is used to describe "Strong (強)"?

参考文献

善如寺俊幸 (2010) 『漢字イメージトレーニング 500』 三恵社

善如寺俊幸 (2012) 「漢字系統樹と漢字イメージトレーニング」 『JS 漢字学習研究会誌』 4

白川静 (1996) 『字通』 平凡社

白川静 (2001) 『白川静著作集』 平凡社

白川静 (2004) 『新訂字統』 平凡社

諸橋轍次他 (1982) 『広漢和辞典』 大修館書店

会場3：口頭発表2

逆引き辞書の作成を可能にする対訳辞書編集システムの構築

川村よし子（東京国際大学）

本研究の目的は、逆引き辞書の作成を視野に入れた対訳日本語辞書編集システムの構築にある。英語圏以外の学習者にとって、母語で書かれた日本語辞書が少ないというのが実情である。また、逆引き辞書がほしいという希望も多い。そこで、本研究では、逆引き辞書作成に配慮した辞書編集システムを構築することにした。

各言語版の辞書編集者は、日本語および英訳を参照しながら、対訳辞書を作成する。ところが、各単語の意味範囲は言語ごとに微妙に異なっているため、対訳辞書をそのまま逆引き辞書にすると、様々な問題が発生する。そこで、日本語が多義の場合、意味を特定するための注釈を付加した。また、日本語の意味が一つでも訳語が複数になる場合にも対応できる仕組みを整えた。これによって、完成した対訳辞書を元に、逆引き辞書の作成を容易に行うことができる。

本発表では、① 対訳辞書をもとに逆引き辞書を作成した場合に起こる問題点、② 意味を特定するために必要となる注釈、③ 逆引き辞書作成を可能にする対訳辞書の編集方法について報告する。本研究によって完成した辞書編集システムは Web 上で公開し、世界各国の辞書編集者が自由に利用できる形で提供する。

Building an Editing System for Editors of a Reverse Bilingual Dictionary

For many learners of Japanese, there is a dearth of bilingual dictionaries using the learners' native language with translations into Japanese. To rectify this situation, the present project has undertaken the development of a bilingual dictionary editing system to help create what we refer to as a "reverse bilingual dictionary". The bilingual editing system contains a bilingual or interlinear dictionary that allows editors to first identify an appropriate translation by viewing either the Japanese or English equivalent. However, when the equivalent meanings in Japanese are numerous, the system displays an explanatory note giving the "core" meaning of the word. Based on this "core" an appropriate target language equivalent can be identified. Similarly, when the Japanese equivalent is a single word with numerous target language equivalents, the system aids in the selection process with annotations.

The presentation will provide an explanation of the following: 1. problems inherent in writing a reverse bilingual dictionary; 2. the specific identifying semantic markers required for creating annotations; 3. an explanation of the overall development of the editing system used in creating a reverse bilingual dictionary (target language-Japanese dictionary). Upon completion of the system it will be made available on the Web.

参考 URL

読解学習支援システム「リーディング・チュウ太」：<http://language.tiu.ac.jp/>
 チュウ太の Web 辞書：<http://chuta.jp/>

会場3：口頭発表3

日本語母語話者と日本語学習者における カタカナ語の使用についての研究

池谷知子（神戸松蔭女子学院大学）
久津木文（神戸松蔭女子学院大学）

日本語を学ぶ外国人が苦勞するものとして「日本語の中のカタカナ」が挙げられる。本研究は英語母語と話者の日本語学習者55人に次の6組のカタカナ語と非カタカナ語の使い分けの研究を行った。これらの6組を理解しやすいと予測されるもの順に分類し、日本語のレベル（初級か上級か）がカタカナ語の使用にどのように影響しているかについて調査を行った結果、以下のようなことが明らかになった。

■タイプⅠ：理解しやすいタイプ■

＝カタカナ語と非カタカナ語の指示対象が別になっており、カタカナ語が有標なもの

カテゴリー3 Glove グローブと手袋

カテゴリー4 Potato ポテトと芋

■タイプⅡ：使い分けの基準がわかれば理解しやすいタイプ■

＝材質や形態、使用方法などで使い分けがされているもの

カテゴリー1 Bottle ボトルと瓶

カテゴリー2 Brush ブラシと筆

■タイプⅢ：理解しにくいタイプ■

＝一見、非常に意味がよく似ていて使い分けの基準を規則化しにくいもの

カテゴリー5 Tea ティーとお茶

カテゴリー6 Ticket チケットと券

Usage and differentiation of katakana by Japanese native speakers and English speakers learning Japanese

Learners of Japanese as a second language find KATAKANA words difficult as it is hard to distinguish them from English words and there are also non-KATAKANA synonyms in Japanese.

This study investigates 55 English-speaking Japanese learners for their ability to distinguish 6 KATAKANA /non-KATAKANA word pairs. The following results were obtained: with words classified into three types by ease of understanding.

■ **Type I: Easy to distinguish KATAKANA word from non-KATAKANA word as they have their own denotations respectively.**

Category 3 Glove “GUROOBU” “TEBUKURO” Category 4 Potato “POTETO” “IMO”

■ **Type II: Need to realize standards of usage. Correct words must be chosen according to material, form or situation.**

Category 1 Bottle “BOTORU” “BIN” Category 2 Brush “BURASHI” “FUDE”

■ **Type III: Difficult to distinguish KATAKANA word from non-KATAKANA word as they indicate almost the same thing.**

Category 5 Tea “THI” “OCHA” Category 6 Ticket “THIKETTO” “KEN”

参考文献

陣内 正敬(1993)「『さじ』と『スプーン』:外来語化と命名のゆれ」『言語文化論究』4号,47-54. 九州大学言語文化部.

会場4：口頭発表1

現代日本語動詞モウケルの意味用法について

池田諭 (Université de Paris-Est and Lycée Jules Ferry)

モウケルは他動詞とされ辞書等では一般に次の4種の用法が見られる。

- (1) 組織等を作って置く。この問題に委員会をモウケタ。
- (2) 建物等を準備して建てる。新しい学校をモウケタ。
- (3) 子供をつくる。夫との間に娘を一人モウケタ。
- (4) 金銭を偶然的手段で得る。株でお金をモウケタ。

(1)と(2)の類似から少なくとも3種の用法が考えられるが、この動詞は同音意義語なのであるだろうか。

記述では機能主義的立場を取り、これによって表面上の意味変化が1つの操作に還元される。ここで動詞モウケルの操作は次の仮定で提案される。先ず主体(S)と対象(O)が距離を持って置かれる。この状態ではSはOに介入出来ない。そこで中間体(M)がSとOの間に作られる。S-M-O構造に至り、SはMを媒体に間接的にOに介入する。この直接性を否定する間接性が基本的要素である。以上の同一操作に文脈繁華変化を入れ観察された表面上の意味が説明される。最後に分析結果からの日本語教育への幾つかの応用可能性についても言及される。

An analysis of the Japanese verb *mookeru*

The most of dictionaries give the following four usages of the verb *mookeru*.

- (1) Setting up an organisation: *kono mondai ni iinkai o MOOKETA*.
- (2) Providing a building: *atarashii gakkoo o MOOKERA*.
- (3) Having child: *otto to no aida ni musume o hitori MOOKETA*.
- (4) Making money by chance: *kabu de okane o MOOKETA*.

We note a similitude between (1) and (2), so it thus seems to us that there are three *mookerus*. Is this verb a homonym?

In our description, we will accept the functional position which will enable us to unify various semantic values (meanings) in an operation. The verb *mookeru* will be the trace of the following operation: the subject (S) can't have a direct relationship with the object (O) because of the distance between S and O. As a consequence, an intermediate (M) is created between S and O. In this structure S-M-O, S has an indirect access to O through M. By applying this invariable function to various contexts, we will describe the above-mentioned semantic values (meanings). In the last part of our communication, we will consider the possibility of introducing our description to the didactics of Japanese as a foreign language.

参考文献

POTTIER, Bernard (2000) *Représentations mentales et catégorisations linguistiques*, Louvain, Peeters.

SVEDELIUS, Carl (1897) *L'analyse du langage appliqué à la langue française*, Uppsala, Almqvist&Wiksell.

会場4：口頭発表2

中級以上の日本語学習者に対するアカデミック・ライティングのための日本語 文法教育

—引用動詞を用いた意見述べの文末表現をめぐって—

小森万里（大阪大学）

発表者は中級以上の短期留学生（以下、学習者）を対象に「レポートを書くための日本語文法」の授業を行っている。本研究では当授業で扱う項目のうち、学習者が特に難しいと訴える意見述べの文末表現に焦点をあて、授業のための基礎的研究として、日本語母語話者の学術論文における使用傾向を調査する。引用動詞を用いた意見述べ文末表現に焦点をあてるのは、母語話者が引用動詞を用いた「と思われる/考えられる/いえる」を使用することが多いのに対し、学習者は「と思う」を繰り返す等、その使い分けが難しいことが窺われるためである。調査対象は『学会名鑑』で人文・社会科学系にあげられている分野のうち、発表者の所属機関で学ぶ学習者の多くがレポートを書く5分野で、1000名以上の会員数がある学会誌、あるいはその分野の専門教員が「定評がある」とした学術雑誌からの論文50本である。効果的な意見述べは、自らの考えを読み手に納得させるというレポートの目的に合致するものである。本研究ではこれら3つの表現の使用傾向の違いを分析し、「と思われる/と考えられる」と「といえる」は、読み手を念頭においた対人的メタ談話レベルでの機能が異なることを述べる。

Teaching Grammar in Japanese Academic Writing to Intermediate and Advanced Learners—Focusing on the Expression with Quotation Verbs—

This study focused on the expressions of opinion using quotation verbs and investigated how native Japanese speakers employed these verbs in their academic writings. Native Japanese speakers often use “to omowareru / to kangaerareru / to ieru” when they propose their opinions; alternatively, Japanese learners are likely to repeat the same expression, such as “to omou.” This indicates the challenge for learners regarding the appropriate usage of various expressions and in effectively expressing their opinions. We investigated humanities and social sciences papers in “Gakkaimaikan.” We selected 50 papers from five academic journals, whose societies have over 1000 members or those journals that have well-established reputations among their discipline’s researchers. One significant purpose of academic writing is to state an opinion so effectively that readers are convinced by the idea. Thus, we should consider the relationship between writers and readers, while attempting to write our papers in a rhetorically organized manner. This study proposes that from the perspective of interpersonal metadiscourse, “to omowareru / to kangaerareru” and “to ieru” are different.

参考文献

森山卓郎（2000）「「といえる」をめぐって—テキストにおける客観的妥当性の承認—」『言語研究』118, 55-79.

Ken Hyland（2005）*Metadiscourse*, Continuum.

会場4：口頭発表3

日本語学習者の体験談における接続表現 —より面白く語るちょっとしたコツについて—

金田 純平（国立民族学博物館）

本発表は、英語およびフランス語を母語とする日本語学習者が語る体験談（ナラティブ）について、母語と日本語で話した場合の特徴を比較し、日本語学習者が日本語で語る上での問題点と解決策について提案することを目的とする。

調査は、英国およびフランスで日本語を学習する学生計6名を対象に、同じ内容の体験談を母語と日本語で語ってもらい、その内容を分析した。その結果、日本語で語った場合は母語よりも接続表現のバリエーションが乏しかった。母語に比べて表現が貧弱で、話の面白さが十分に伝わらなくなっていたと考えられる。

次に、接続表現をタイプ別に出現頻度を取り、加藤(2003)による調査データと比較したところ、動詞のテ形や「それで」「で」、前置きや逆接の「けど」、理由の「から」「ので」がよく使用される一方で、「そしたら」および「見たら」など《動詞+たら》のタラ系が使われていないことがわかった。日本語話者はこのタラ系を多用し、オチ以外に途中でも話の盛り上げにも活用する。タラ系に予想外な事態の遭遇・発見を導く用法があることを学ぶことで、場面の展開と盛り上がり表現でき、体験談の面白さは幾分改善されることが予想される。

Conjunctive Expressions in JFL Learners' narrative speech: Tips to make a speech a bit funnier

This study aims to suggest JFL learners to speak more effective narratives by comparing characteristics of narratives in their first language (English and French) and in JFL.

Research was conducted in this way: 6 JFL learners in UK and France made a narrative as the same story both in their first language and Japanese, then narratives were recorded and analyzed in the expression level. As a result, varieties of conjunctive expressions or discourse markers are poorer in JFL than in their first language. Managing skills of narratives in JFL seemed to be poor and funniness of narrative might not be so effective.

Then conjunctive expressions were classified and counted by the form and compared with the data collected by Kato (2003) from Japanese TV shows. The result was that JFL learners used much less *soshitara* and *V-tara* form than *V-te*, *sorede*, *de*, *V-kedo*, *V-kara*, *V-node*. Japanese native speakers use these *tara* forms in high frequency to ginger up the story not only at the punchline. The knowledge that *tara* forms have usage to emphasize unexpectedness of the case the speaker had encountered will enable JFL learners to express the story line more effectively and their narrative will sound more funnier.

参考文献

加藤陽子 (2003) 「日本語母語話者の体験談の語りについて — 談話に現れる事実的な ‘タラ’ ‘ソシタラ’ の機能と使用動機 —」 『世界の日本語教育』 13, pp.57-74.

榎原芳美 (2010) 「物語の始まりと終わり — 笑いのプロは過去の経験をどう語るのか —」 『関西外国語大学留学生別科 日本語教育論集』 20, pp.119-132.

パラレルセッション6

口頭発表

8月29日(土) 14:00-15:30

会場1：発表1

複言語・複文化アイデンティティ構築過程における日本語習得の影響

—フランスの大学の日本語学習者を対象に—

小間井麗 (INALCO)

本研究では日本語を学んでいるフランスの学生の動機、習得の過程に着目する。Norton (2000) の研究や、ヨーロッパでの CEFR (2001) 導入以降、言語習得とアイデンティティの問題を考える研究が注目されてきている。そのアイデンティティとは、社会構成主義の影響から、社会における言説実践で構築されていくものと考えられている。ひいてはコミュニケーションの中での「対話」を通して形成がなされるとも言える。よって、日本語の習得も、学習者が社会との接触を通して構築していくアイデンティティと深くかかわっている (三代 2011) と考えられる。そこで、フランスの学生にライフストーリー・インタビューを行い、それぞれの環境や経験と結びついた日本語の学習動機、学習方法、習得の変遷、さらにアイデンティティ構築に影響のあった日本語の言説実践について話を聞く。そして学習者を取り巻く社会、家庭、職場、教室におけるディスカールにおいて、日本語習得がアイデンティティ交渉の影響を受けたり、アイデンティティ構築に影響を与えたりという相互作用を経ながら為されてきていることを示す。そこに SLA の動機研究からの問題提起をふまえて考察を加え、教育実践について考える。

**Influence of Japanese language learning in multilingual and multi-cultural
identification process: Japanese language learners of French university**

This study focuses on French students' motivation and process to learn Japanese. Since Norton's (2000) research and the introduction of the CEFR in Europe (2001), research into the problem of language learning and identity has been conducted. It is believed that identity is built into discourse practice in society due to the impact of social constructivism. Thus, it can also be said that identity is formed through "dialogue" in communication. Therefore, learning Japanese is also considered to be deeply connected with the identity that learners continue to build through contact with society (Miyo 2011). In light of this, I conducted life story interviews with French students, and researched their motivation to learn Japanese language, their learning methods, their trajectory of learning in each environment and experience, and the Japanese discourse practice that affects identity building. I demonstrated that participants learned Japanese through discourse in their surrounding society, the home, the workplace, and the classroom, and that Japanese learning is affected by identity negotiation through interaction, or gives effect to identity construction. Finally, consideration and analysis were conducted based on the problems raised by motivation research into SLA, to consider educational practices.

参考文献

Conseil de l'Europe. (2001). *Cadre européen commun de référence pour les langues*. Paris: Didier.

Norton, B. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*. Harlow, England: Longman.

三代純平. (2011). 「言語教育とアイデンティティの問題を考えるために」. 細川英雄 (編) 『言語教育とアイデンティティ: ことばの教育実践とその可能性』春風社, 245-259.

会場1：発表2

ソーシャルメディアを活用したキャリア学習環境を学習者は どのように捉えているか

—ベトナム人学生へのライフストーリーから—

高橋 薫（早稲田大学）

藤本 徹（東京大学）

山内祐平（東京大学）

本研究は、ソーシャルラーニングプログラム Socla（ソクラ）の受講生を対象としたライフストーリー研究である。Socla は Facebook を学習のプラットフォームとしたキャリア学習プログラムである。対象は高校生で、彼らは仲間同士や支援者の大学生や社会人との対話を通して、働くことや大学進学の意味について学んでいく。本発表では、参加者のうち唯一の日本語非母語話者で、現在は大学生となったベトナム人男子学生1名のインタビューを取り上げ、Socla の活動を学習者はどのように捉えているかを検討する。彼は当時の自分を振り返り、自分は「マスクをかぶっていた」と述べている。プログラム終了後も参加者同士はソーシャルメディアでつながっているものの、彼自身はその輪の中に入っていくことができず、自分が否定されたと感じることがあった。しかし、それは自分がマスクをかぶっていたためであり、人と関わるにはこの構えを外す必要があると気がついた。そのきっかけが Socla の活動であったという。溝上（2008）は他者と出会い自己形成していくさまを「他者の森を駆け抜けて自己になる」と表現しているが、本プログラムが複文化環境で自己形成していくきっかけとなったことが分かった。

The Career Learning Environment in Social Media: Learner insights based on the experience of a Vietnamese student enrolled in a social learning programme

This study describes the experience of a SOCLA student. SOCLA is a career learning programme that uses Facebook as a social learning platform. The participants are high school students who learn about the meaning of work or study by engaging in dialogue with their peers, university students, and working adults who act as supporters. This presentation focuses on an interview with a Vietnamese student who was the sole non-native Japanese participant. He is now a university student. The influence of his participation in SOCLA on his self-formation is examined. Although many of the SOCLA participants remained connected through social media after the programme, he could not join the community and felt that he had been rejected. Reflecting on the matter, he described that he was 'wearing a mask'. This was what prevented him from joining the community, and he realised that he should throw off the mask to communicate with others. Mizokami (2008) describes adolescent self-formation using the metaphor 'Running through the forest of others and becoming a self'. It was observed that SOCLA provided an opportunity for this student's self-formation in a pluricultural environment.

参考文献

溝上慎一（2008）『自己形成の心理学 他者の森を駆け抜けて自己になる』
世界思想社

会場1：発表3

CLD 生徒に対する縦断調査の結果から窺える対話と継承語の重要性

野山 広（国立国語研究所）

本発表では、日本の外国人集住地域 A に居住する日系ブラジル人生徒に対して、2007～2012 年まで行ってきた日本語会話と言語生活に関する縦断調査と、散在地域 B に居住するパキスタン出身の生徒に対して、2013～2015 年まで行ってきた同様の縦断調査結果から窺える対話と継承語の重要性について報告する。OPI (Oral Proficiency Interview)の結果や、言語生活に関する調査結果を踏まえると、日本語会話力が最終的に伸びた生徒において、以下の 1)～5) の共通点が窺えた。1) 来日後数年間、通常学級だけでなく取り出しの日本語教室に通っていた。2) 中 3～高 1 の時期に、日能試の 2 級 (N2) か 1 級 (N1) に合格した。3) 中 3～高校の時に、日本語教室の支援者 (TA) として参加した経験がある。4) 16～18 歳の年に OPI の測定に参加して、成人と日本語で対話する機会を得た。5) 家庭内言語は原則として継承語を使用していた。こうした実態は、複数言語環境下で継承語や第二言語を維持し伸ばすには、言語使用の必然性がある対話場面の提供が肝要であることを示唆している。発表では、場面提供やネットワークの拡充に欠かせない *ethnolinguistic vitality* の確認に繋がる実践や工夫の在り方に関して考察しつつ、具体的な事例を出来る限り報告したい。

Importance of Providing an Opportunity of Dialogue and of Heritage Language Maintenance : From a Finding in the Result of the Longitudinal (Long-Term) Research that We Carried Out for Culturally and Linguistically Diverse Children in Japan.

This is a report on the importance of providing an opportunity of dialogue and of heritage language maintenance : from a finding in the result of the longitudinal (long-term) research A and B that we carried out for CLD (Culturally and Linguistically Diverse) Children in Japan. This long-term research relates to a change of the Japanese speaking proficiency and a language life. Former research A was carried out for the Japanese-Brazilian student who lived in the A prefecture C town (the area where a lot of foreigners live in) from 2007 through 2012. On the other hand, research B was carried out for a student from Pakistan which lived in the B prefecture D city (the area with a little population of the foreigner) from 2013 through 2015.

In the student that particularly Japanese speaking proficiency finally improved, the following common points (1)-5)) were indicated from the result of research A and B.

1) Students usually went to not only the class but also the JSL class after a visit to Japan during several years. 2) Students passed the second grade (N2) or the first grade (N1) of the JLPT when they were a ninth grader student or a high school student. 3) Students have the experience that they participated in as a Teaching Assistant (TA) of the Japanese classroom when they were a ninth grader student or a high school student. 4) Students participated in an interview of OPI to 16-18-year-old age and obtained an opportunity to talk with a Japanese adult in Japanese. 5) Students used a heritage language as a general rule among the families.

What the author understood from these findings suggests the following things. » In everyday life, it is vital to provide the dialogues scene where it is necessary to use target language as much as possible to improve the proficiency of heritage language (or SL) of students living under plural language environment. »

会場2：発表1

日本語教科書における「ましょう」の導入について

—使用実態の視点から—

東條和子（桜美林大学）

「ましょう」は主体が誰かにより、誘いかけ、意志、推量の3つの用法に分けられる。誘いかけの用法は、主な初級教科書では比較的最初のほうで、例えば『みんなの日本語初級』では第6課で提出されているが、意志、推量の用法は提出されていない。また、誘いかけの使用には、発話者と聞き手の上下関係等の制限があるにもかかわらず、特に場面設定もなく提出されている。さらに、「ませんか」に対する答えとしての「ましょう」の導入にも疑問を挟む。使用実態を把握するためコーパスを用い、会話の部分から用例を取り出し分析した。その結果、各用法は連続的ではあるものの、意志の用法が圧倒的に多いということがわかった。また、コーパスの種類や発話者によっても傾向があることがわかった。本稿は、上記に挙げた「ましょう」の使用条件、及び分類について検討を加える。また、主な既存の初級日本語教科書における「ましょう」の導入を分析する。それらの結果を踏まえ、「ましょう」の授業への導入順序及びその方法を論じていくものである。

A Study on an Introduction of “*masho*” in Japanese Textbooks :
From the Viewpoint of the Actual Status of the Usage

Masho has three meanings: invitation, volition, and conjecture depending on who is the agent. Invitational *masho* appears in the beginning part of the textbooks, for example, at the lesson six in “Minna no Nihongo”. However, volitional and conjectural *masho* don't appear in most basic-level Japanese textbooks. Although usage of invitation is limited in use, it is introduced without any settings. Moreover, It isn't appropriate for the introduction that *masho* appears as a reply to *masenka*. By using data in conversational parts of corpus, this paper demonstrates that though these three usages are linked, invitational and conjectural *masho* are used much less than volitional *masho* in everyday conversation. In addition, the data presents the usage of *masho* has a tendency of its use depending on the corpus and the speaker. This paper examines the classifications and conditions of the usage of *masho* and analyzes most Japanese textbooks. Based on the above results, this study proposes a plan and order for the introduction of *masho* reflecting actual usage.

参考文献

- ・ 姫野伴子（1998）「勧誘表現の位置—「しよう」「しようか」「しないか」— 『日本語教育』96号.
- ・ 日本語教育学会（編）（2005）『新版 日本語教育辞典』大修館書店.

会場2：発表2

教科書の会話練習の活用と文法学習について

藤野華子（オックスフォード・ブルックス大学）

日本語の教科書には様々なモデル会話が用意されており、それらは通常、その課で登場する新しい文法の使用例を提示することによって、学習者が実際の場面でも使えるようになることを目的としている。しかし、文法学習という観点からこれらの会話部分の活用法を考えた場合、今までの教え方には問題があることがわかる。例えば、オーディオリンガルアプローチに従ったパターン練習では、応用力がなかなかつかないことが指摘されている。また、コミュニケーションアプローチや課題遂行型のアプローチでは、発話内容が焦点となるため、文法の正確さは二次的になってしまう。つまり、ドリルなどの書く練習では文法学習が明確な目標となっているのに対し、会話練習は文法学習とあまり結びついていないと言える。本研究では、英国の5つの大学で初級から中級の日本語学習者約100人に実施した文法に関するアンケートの結果から、学習者が教師の認識以上に話す活動を文法学習と強く結びつけていることを示す。そして、どのように教え方を工夫したら、より学習者の認識に近づけられるかを検討し、教師による修正フィードバックが極めて重要な役割を果たすことを主張する。

On Grammar Learning and the Use of Textbook Dialogues

Hanako Fujino (Oxford Brookes University)

Japanese language textbooks include a variety of model conversations, which are designed to show examples of how the new grammar presented in the lesson is used, and are aimed at enabling learners to apply it in real life. However, when we look at conversation exercises from the point of view of grammar learning, we see that there are problems in our current ways of teaching. For example, pattern practice following the audio-lingual approach has not been shown to be effective in helping learners apply the new grammar to new situations. In a more communicative or task-based approach, the main focus becomes the content of the conversation or task completion and grammatical accuracy is secondary. That is, in contrast to written exercises such as drills, where the objective is clearly set to the learning of new grammar, conversation exercises are not directly aimed at it.

In this study, I will present the results of a questionnaire on Japanese grammar administered to approximately 100 Japanese language learners from beginner to intermediate levels in 5 universities in the UK and show that learners relate speaking activities to grammar learning much more than teachers think. Through a discussion on how we could change our teaching methods to accommodate learners' expectations more, I claim that corrective feedback by the teacher plays a key role.

会場2：発表3

文法項目用例検索データベース「はごろも」の開発と公開

堀恵子（東洋大学）

李在鎬（筑波大学）

江田すみれ（日本女子大学）

コミュニケーションのための文法教育が問い直される中、旧 JLPT 出題基準に代わる文法シラバスの模索が続いている。教材・テスト作成などの際に真正な用例を豊富に参照できれば、文法項目が使用される場面、共起する語、表現形態に関する情報を得られ、日本語教師にとって有効であろう。

そこで発表者らは、特に海外の非母語話者日本語教師の教育支援や中上級以上の学習者の自律学習支援を目的として、文法項目とその6段階レベル分けを示し、話し言葉・書き言葉の複数のコーパスから文法項目を含む実際の用例を web 上で公開するシステムを開発した。文法項目は、1,848 項目で、旧 JLPT 出題基準、グループジャマシイ(1998)など5種の資料・先行研究を参考に決定した。用例の元としたコーパスは、話し言葉は「名大会話コーパス」など4種、書き言葉は「CASTEL/J」など4種である。6段階のレベルは、7名の日本語教師に対して主観判定の方法による難易度の調査を行い、一致率の高い5名の平均値をもって決定した。

2015年3月末から文法項目とレベル、典型的な用例（作例）の公開を開始しており、年内には用例検索システムを公開予定である。

Development and Public Release of the Japanese Grammatical Items Example Sentences Database and Searching System “HAGOROMO”

While grammar teaching aiming at communication is reexamined, new grammar syllabi have been sought instead of the old JLPT criteria. If teachers can consult abundant authentic example sentences while creating teaching materials or tests, information about the situation in which the grammatical item is used, co-occurring words, and frequency in spoken and written language will be helpful.

Therefore, intending to support especially oversea non-native Japanese language teachers and learners at an intermediate and advanced level, we developed the web Japanese grammatical items example sentences database and searching system “HAGOROMO”, which is based on grammatical items in 6 levels of difficulty, whose example sentences are extracted from spoken and written corpora.

The 1,848 grammatical items were determined by reference to the five sources in the literature including the old JLPT, and Group Jammassy(1998). We used four spoken and four written language corpora including the Meidai Dialogue Corpus and CASTEL/J. Levels of difficulty were determined by subjective judgement based on average of five among seven participating teachers.

A sample of grammatical items with a typical example is available to downloaded from the end of march in 2015, and the searching system will be made public at the end of this year.

参考文献

グループジャマシイ(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版

会場3：発表1

ビデオ会議における「異文化理解」を再考する

—「他者」の議論を手がかりに—

川本健二（チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学）

深川美帆（金沢大学国際機構留学生センター）

これまで金沢大学（日本）とチャナッカレ・オンセキズ・マルト大学（トルコ）では、2011年から異文化理解教育と言語教育のためのビデオ会議ディスカッションを実施してきた。これは日本語学習者と日本語母語話者双方にとって得るものが大きい学習活動であり、研究においても方法論的に成果を上げてきたものの、テーマである「異文化理解」についての検討が十分なされたとはいえず、根本的な議論をする必要があった。そこで本発表では、思想的・哲学的議論を手掛かりにビデオ会議における「異文化理解」について考察を試みる。「異文化理解」とは、「他なるもの」をどう「理解」するかということが一つの大きな問いであるが、まず、その「他なるもの」或いは「他者」の議論を検討し、「異文化」の包括的な「理解」を目指すことへの限界性を確認する。その上で、今後のビデオ会議のあり方として、その「理解」自体を見直す必要性、また、安易な「理解」で完了させるのではなく、共に問いを交わし、その困難さが確認できる仕組みを再構築する必要性を指摘する。最後に、それらの環境整備などの方法案とそれぞれの課題を確認する。

Reconsidering “Cross-Cultural Understanding” in Video Conferencing
—Based on Arguments of “Other” —

A video conference discussion of cross-cultural understanding education and language education has been carried out by Kanazawa University (Japan) and Canakkale Onsekiz Mart University (Turkey) since 2011. This is a learning activity that has much to teach both Japanese learners and native Japanese speakers. It has produced methodological results for research, but it is difficult to say that this project has carefully considered the idea of “cross-cultural understanding”; therefore, it is necessary to consider this term fundamentally. In this presentation, we discuss the “cross-cultural understanding” in the video conferencing by focusing on discussion partners, that is to say, “other”, based on social thought and philosophical arguments. “Cross-cultural understanding” raises the difficult question of how to “understand” “otherness”. First, we consider the philosophical argument concerning “otherness” and confirm the limits of that aim in achieving a comprehensive “understanding” of “other”. Then, we point out the need to rethink the very idea of “understanding”, rather than prematurely assuming a complete “understanding.” We then propose to re-establish a conference system that can confirm the difficulties of “understanding” and open a discussion with other members. Finally, we confirm various problems with this system and provide methods of video conferencing.

主要参考文献

レヴィナス、エマニュエル（1961/2005）『全体性と無限』熊野純彦訳、岩波書店。
鷲田清一（2015）『「聴く」ことの手がかり—臨床哲学試論』筑摩書房。

会場3：発表2

異文化は教室の外にあるのか

ーフランスの大学日本語専攻の教室で起きた「日本」のイメージをめぐる対立と承認についての考察ー

原伸太郎（東京福祉大学）

日本国外における日本語教育は多くの場合外国語教育の一環であり、その目的には「異文化理解」が掲げられる。そして日本語学習者の理解すべき「異文化」とは「日本文化」であり、それは教室の外にあるとみなされている。しかし本発表では、日本国外の日本語教室において学習者が第一に体験する「異文化」は、教室の中で出会う自分とは違う「日本」観を持った他の学習者との接触ではないか、という論点を提起したい。

発表者は、フランスの大学日本語専攻課程の日本語教室で学習者に「私たちにとっての「日本」のイメージ」というテーマで発表させるという実践を行った。この際明らかになったのは、それぞれの学習者が持つ「日本」のイメージの落差であった。そしてそこでは、ある学習者が「漫画やアニメを通じた日本のイメージは正しくない」と他の学習者を批判したことをきっかけに、教室内で対立と論争が起こった。

本発表では、発表者の実践の記録（教室での学習者の発表・発言の文字化データ）を基に、日本語の教室で「日本」のイメージをめぐる学習者間の「異文化」対立が表面化し、ある程度の相互理解に至った過程を紹介する。この事例を踏まえ、日本語の教室における学習者にとっての「異文化」接触経験とは何か、それが現代社会における言語教育としてどんな意義を持ちえるかを考える。

What is the intercultural experience in the class room of Japanese?

Generally, one of the purposes of foreign language education is “intercultural understanding”. And the culture learners of Japanese language outside Japan must understand is “Japanese culture”, which is outside of the classroom. But in this presentation, the presenter will insist that the intercultural experience which learners of Japanese will have in the class room at first is the contact with other learners who have a different point of view to “Japan”.

The presenter had done an educational practice in a class of Japanese of a university in France. In the class, each students explained their own images of “Japan”. At that time, one of the students criticized other students for having stereotype of Japan through Manga or Anime, and it made a conflict in the class.

In this presentation, the process of “intercultural” conflict and mutual understanding of students in the class of Japanese will be shown based on the dialog of students. The presenter would like to discuss about the mean of this process in the field of language education.

参考文献

細川英雄（2003）「『個の文化』再論:日本語教育における言語文化教育の意味と課題」『日本語教育から文化リテラシーへ 21世紀の日本事情』第5号、くろしお出版。

会場3：発表3

複言語・複文化主義に基づく対話に焦点を当てた日本語教育を考える

— 民主的シティズンシップ教育と文化間教育の観点から —

三輪聖（ハンブルク大学）、野呂香代子（ベルリン自由大学）

日本語教育は何を目指せばいいのだろうか。本発表では、欧州評議会の掲げる言語教育政策の理念に注目し、その理念から「言語教育」を主体的に社会参加できる民主的シティズンシップや異文化間交流に参加できる能力の育成に資するものと捉え直し、パウロ・フレイレの「対話」を重視した授業実践を提案する。

「民主的シティズンシップ教育」とマイケル・バイラムの「文化間教育」を概観し、それらの基盤となっている市民教育としての「政治教育」「批判的文化アウェアネス」、そしてその土台となる「対話」の重要性を主張する。そして、異文化接触において問題が生じた際は、「対話」を通して複数の文化や価値を相対的に分析し、最終的に自らの知識や価値観を調整しつつ解決に向かって交渉し、自身が持つあらゆる技術を駆使して実際に行動に起こせるような力を育成できるような実践とは何かを考える。特にパウロ・フレイレの「対話」に着目し、対話がもつ民主性、政治性を明らかにした上で、教室における教師からの問いかけからどう変わっていくのかという側面に焦点を当て、具体的な実践案を提案したい。

Reconsidering Japanese Language Education Focusing on "Dialogues," According to Plurilingualism and -culturalism: From the Standpoint of Education for Democratic Citizenship and Intercultural Education

What kind of goal should Japanese Language Education pursue? In this presentation, we will focus on the ideal of language education policy which is promoted by the Council of Europe. Based on this ideal, we reinstate the idea of "language education" as such, in order to contribute to nourishing democratic citizenship, which in turn enables active participation in society and the ability to engage in intercultural communication. In addition, we propose lesson practices, which place the emphasis on "dialogue" of Paulo Freire.

At first, we give a broad overview of "education for democratic citizenship" and Michael Byram's "intercultural education," and we then advocate the importance of "political education" and "critical cultural awareness" These forms of "education" hinge on the necessity for dialogue. Finally, we examine the practices in order to foster the ability to a) analyze multiple cultures and values relatively through dialogues when problems arise, and b) finally to negotiate to solve the problems, while adjusting one's own knowledge and values, and to take concrete action using every possible technique and strategy. We will propose concrete ideas for lessons focusing on the aspect of how the questions of teachers could change, in taking particular note of the concept of "dialogue" of Paulo Freire and clarifying the democratic and political nature contained in dialogue itself.

会場4：発表1

卒業論文執筆を意識した日本語授業 —アカデミックな対話の促進を目指して—

内川かずみ (エトヴェシュ・ロラード大学)

筆者の勤める日本学科では卒業論文に関し①日本語の文献も活用する②日本語での要約を添付するという決まりがある。しかし、これまで我々日本語講師が行う日本語授業はこの2点とは連動していなかった。そこで、今年度は卒業論文執筆に焦点を合わせた授業内容に路線変更することを試みた。本発表はその実践報告である。

2年生の授業では、日本語で書かれた論文執筆の指南書や論文そのものをジグソー法を用いて共同で読む活動を行い、学期末には全員がそれぞれの研究テーマに関して短い発表を行った。一方、3年生の授業は学生の研究発表がメインで、発表者は教員のような役割を務め、また、聴講者は毎回発表の要約を提出した。成果としては①学生が自分の研究テーマを模索する時期が早期化した②学生間の情報の共有や研究に関する対話が増えた、などが挙げられる。

卒業論文の執筆は大学生にとって共通の目標であり、同時に多様性を受容することができる課題である。日本語授業に生かすことにより、授業が内容重視になり、学生間では学術的対話が増える。始めたばかりの試みではあるが、実践結果を報告し、今後の可能性を検討の俎上に載せたい。

Orienting students towards thesis writing during the Japanese language classes: With the aim of promoting academic dialogue

In the Japanese Department, where the author is working, there are two rules for thesis writing: 1. Japanese literature has to be used as well, not only those written in Hungarian or English. 2. An abstract, written in Japanese, has to be attached to the thesis. The Japanese language lessons, however, haven't been concerned with these rules. Hence, in this year, I tried to modify my classes and focus on thesis writing.

During the 2-nd year students' lessons, they read a guidebook of essay writing and essays in Japanese, according to Jigsaw method. In the end of the semester, every student made a presentation about his/her topic of thesis. In each of the lessons for 3-rd year students, one person made a presentation about his/her thesis, while playing the role of the teacher as well.

Results show that students started to think about their research topic earlier, compared to previous years. Additionally, academic conversations and information exchange has increased among students. Thesis writing is a common aim for university students, and their various interests can appear in that task. By concentrating on thesis writing in language classes, lessons can become content-based and academic dialogue between students can be promoted.

参考文献

山辺真理子・谷啓子・中村律子 (2005) 『アカデミック・ジャパニーズ再考の試み—多文化プロジェクトワークでの学びから—』 日本語教育 126 号

朱桂栄・砂川有里子 (2010) 『ジグソー学習法を活用した大学院授業における学生の意識変容について—活動間の有機的連携という観点から—』 日本語教育 145 号

など

会場4：発表2

学習者の自己内対話から読解能力・読解指導を考える

—思考発話データの分析—

櫻井直子（ルーヴァン・カトリック大学）

本学2年次の読解授業では言語構造的知識をストラテジーとして用いる読解ストラテジーを指導している。その指導方法の効果を確認するため、思考発話法を用いて、読解時の学習者の発話データを取り、読解能力の分析を行った。分析には、van Dijk and Kintsch (1983) の読解プロセスモデルを採用した。その結果、現在の指導法では読解プロセスの途中までの指導には有効であるがそれ以降に関しては更なる分析と授業法の構築が必要であることが示唆された。

本発表では、学生の発話データを自己内対話と捉え、学習者が読解の最中にどのようなストラテジーを使用しているのか、その対話から読み取っていき、上記指導法の利点と改善点を探る。この発表は1つのコースの事例ではあるが、読解ストラテジーの指導を考える上で、1つの提言となるのではないかと考えている。

Reflections on reading competency and its development through self-talk by learners - analysis of the thinking aloud protocol -

The objective of the course in reading comprehension in the second year at KU Leuven is to obtain an efficient use of Japanese syntactical knowledge as a strategy for reading. In order to assess the effectiveness of this strategy towards the students' reading abilities, I analyzed the 'thinking aloud' protocol by applying the reading model by van Dijk and Kintsch (1983). The result indicated that this strategy provided a positive effect on the first phase of the reading process, and suggested the requirement for further research on these reading strategies for the other phases.

During this presentation, at first I will present the students' self-talk during their reading activities and secondly we will confirm which strategies the students employed and the effectiveness of their application. Finally, I want to show the possibilities for the further research.

参考文献

- 近松（2003）「外国語としての日本語の読み・読解研究」『第二言語習得研究への招待』pp67-85、くろしお出版
van Dijk and Kintsch（1983）*Strategie of Discourse Comprehension*, Academic Press

会場4：発表3

中上級日本語教育と日本研究の連携の可能性

－文語文献講読から探るクリティカルな思考の深化の過程－

金山泰子（国際基督教大学）

串田紀代美（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター）

本発表では、日本研究者をめざす上級レベルの大学院生を対象とした文語文献講読チュートリアルの実践を報告する。本実践の対象学習者は北米大学院博士課程に在籍する学生の事例である。本実践では、文語文献読解において学習者が批判的思考を深化させる過程を見ることを目的とし、発話思考法を用いて文語の文献読解における思考過程を言語化し顕在化させて観察した。こうした認知作業の想定を可視化し質的に分析することにより、読解過程における学習者の批判的思考能力を引き出すことを狙いとした。

この読解における思考過程の認知化およびチュートリアル後の教師との対話の言語化データを考察した結果、より具体的な専門分野の研究テーマを持った第二言語のテキストの読み手は、テキストの文字以外の情報へ積極的にアプローチしていることが明らかとなった。その際、絶えず既存知識との交流をするだけでなく、批判的思考に基づく自問自答により高いメタ認知力を働かせながら、テキストの理解を深化させる傾向がみられた。

The Possibility of Cooperation between Intermediate and Advanced Japanese Language Education and Japanese Studies: From Reading Classical Literature to Developing Critical Thinking

This presentation outlines the practice of literary reading tutorials for advanced level students who aspire to be Japanese researchers through the case study of a doctoral student from a North American graduate program. The objective of this practice was to see how such learners deepen their critical thinking through literary readings, and we observed that by using the thinking aloud method, the thinking process could be made clearer through verbalization while reading and comprehending written literary language. Through visualization and qualitative analysis of the suppositions made during these cognitive tasks, we aimed to bring out the critical thinking skills of the learners during the reading and comprehension process.

In this study we analyzed the thinking process during such reading comprehension, and verbalized data from post tutorial interactions with teachers. The result showed that the readers of text in a second language, who had research themes in more specific subject areas, were approaching information other than the text itself in a proactive manner. In such cases, not only did the learner form connections between pre-existing knowledge and the text, but while exercising high meta-cognition through questions and answers based on critical thinking, but also attained a deeper understanding of the text.

ポスター発表

発表1

継承日本語を学ぶ子どものための教科書開発

山本絵美(ライデン大学・早稲田大学)
米良好恵(てらこや@アムステルダム)

本発表は、海外で「母語／継承語」として日本語を学ぶ子どもたちのための、日本語教科書制作プロジェクトの中間報告である。本プロジェクトは2015年度の国際交流基金の助成金を得て(てらこや@アムステルダム教科書「おひさま」制作プロジェクト)実施されている。

本教科書は、複言語主義の考えを参考に作成され、2015年6月現在、上下巻の上巻が完成し、オランダ各地の教育現場で試用中である。『「日本人だから」やらなければならない日本語』ではなく、一人一人の言語体験、言語知識を豊かにし、自己表現と相互理解を可能にする日本語学習を理念としている。

この理念実現のため、子ども達が楽しく勉強できることと、他者に「伝えたい」という気持ちを育てることを重視した。また、言語面では、語彙、助詞、敬語など、特に海外の子どもたちにとって難しい部分に焦点を当て、文化面では、日本文化紹介だけでなく、実際に体験できる形にしたり、在住国(試用版ではオランダ)の文化と比べられるようにした。子どもたちに身近な文脈の中で、日本語を学ぶことこそが重要だという考えからである。この教科書によって、子どもたち自身が、彼らの言語使用やことばの学びに価値を見いだせるようになってほしいと願っている。

Making a Textbook for Children Learning Japanese as their Heritage Language

This presentation is a preliminary report on a project for making Japanese language textbooks for children abroad learning Japanese as their “mother tongue/heritage language”. For this, we receive subsidy from the Japan Foundation in 2015 (Project “ohisama” textbook for Terakoya Amsterdam).

The textbooks are made on the idea of plurilingualism. At present --- June 2015 --- the trial version has been completed and tested at language schools in the Netherlands. Our key idea is not trying to force children to study Japanese because “they are Japanese”, but enriching children's experience and knowledge about languages, and enable deeper self-expressions as well as better mutual understanding. To achieve this goal, we emphasize stimulating the desire to communicate and the enjoyment of language learning. From the linguistic perspective, we highlight vocabulary, particles and honorifics which are important aspects of the Japanese language that are difficult to acquire for the children living outside Japan. From the cultural perspective, we do not only introduce Japanese culture in writing, but also propose activities to experience the culture first-hand and ask children to compare the cultures of Japan and their country of residence (the Netherlands in the trial version). We hope our plurilingual approach will make children more aware of their own language usage and potential, thereby raising their valuation of language learning.

発表2

スイスの継承日本語教育とネットワーク構築

—ヨーロッパにおけるネットワーク構築をめざして—

クレニン道上まどか (ベルン日本語教室)
カイザー青木睦子 (ルツェルン日本語学校)

「継承日本語教育」という言葉は、最近よく耳にするようになってはきたが、共通の定義、認識があるとは言えない。そんな中、継承語としての日本語を学習する子供たちはヨーロッパでも毎年増え続けている。

スイスでは保護者達の運営による初めての継承日本語教育機関が30年前に創設され、現在は同様な機関が8校存在する。3年前から、これら非営利の継承日本語教育機関の連絡会が開かれるようになり、学校運営や教育内容、教材などに関する情報交換が活発に行われ、学校運営や授業において良い効果が見られるようになった。現在、継承日本語教師の研修会も企画されている。

最近のヨーロッパにおける継承日本語教育の動向を鑑みると、私たちはヨーロッパ内でもこのようなネットワークの構築が必要であり、またその時期がきたと感じている。スイスでのネットワーク構築に関する内容を中心にスイスの継承日本語教育の実情を報告し、AJEの継承日本語教育SIGを立ち上げる準備としたい。発表では継承日本語に興味を持つ会員との意見交換も期待している。

Teaching Japanese as a Heritage Language and Establishing a European Network

One talks about “Japanese Teaching as a Heritage Language”, but it’s neither formally defined nor recognized. However, the number of children who learn Japanese as a heritage language keeps on increasing each year.

The first institution to teach Japanese as a heritage language was established by the parents 30 years ago in Switzerland. Today there are 8 such schools. These non-profit-schools of Japanese as a heritage language started to hold meetings 3 years ago, where they exchange the information concerning management, teaching methods and materials. They are now planning also to hold seminars specifically for the teachers in this field.

Observing the movements of Japanese teaching as a heritage language in Europe, we believe that it’s high time we also established an Europe-wide network. We would like to present our current situation of Japanese teaching as a heritage language in Switzerland with a focus on establishing a network, hoping it will contribute in starting up SIG, Japanese Teaching as a Heritage Language AJE. At the presentation we expect active exchanges of ideas from those interested.

参考文献

- スイス継承日本語教育機関連絡会議 (2013) 『第1回スイス継承日本語教育機関連絡会議報告書』
 スイス継承日本語教育機関連絡会議 (2014) 『第2回スイス継承日本語教育機関連絡会議報告書』
 スイス継承日本語教育機関連絡会議 (2015) 『第3回スイス継承日本語教育機関連絡会議報告書』

発表3

発音クラスにおける日本語教育実習生の気づき

—学習者との対話をとおして—

千仙永（早稲田大学）

本研究は、教師教育における音声教育実践の意義を考察するものである。調査フィールドは、2012年度に東京都内の某大学院に設置された実習科目である。実習では、日本語教育を専門とする大学院生（以下、実習生）が音韻知識を学び、日本語学習者に発音指導を行う。筆者は、関与観察および実習生を対象にフォローアップインタビューを行った。本発表では、学習者との対話に着目して実習生が得た気づきを分析し、発音指導を行う上で教師に必要な視点を論じる。

実習生の気づきを分析した結果、以下のことがわかった。(1)発音は徐々に改善するという理解が促され、すぐに発音の変化が現れなくても発音学習は継続していると認識するようになった。(2)発音の揺れに対する柔軟性が高まると同時に、モデル音声の提示に感じていた負担が緩和された。(3)学習者に具体的なフィードバックをする代わりに、自ら問題点に気づくよう促す必要があると考えるようになった。

本研究の成果により、発音指導を行う上で教師に必要な視点が浮き彫りになった。発音指導を行う際に、学習者の発音の変化のみならず、対話をとおして学習過程を観察することの重要性を示唆している。

Discoveries by Practitioners Teaching Japanese Language in Pronunciation Class
—Through Dialogues with Japanese Language Learners—

The purpose of this study is to discuss the significance of teaching pronunciation in teachers' education. The fieldwork was conducted in the 2012 school year at a graduate school specialized in Japanese education in Tokyo. I conducted participant observation at a pronunciation class and interviewed the practitioners instructing pronunciation courses. In this study, I analyzed the discoveries that these practitioners obtained through their dialogues with learners while teaching pronunciation.

The following results are obtained from this study: (1)Practitioners came to understand that the improvement of pronunciation occurs gradually, that learning pronunciation is continued even if there is no observable change in learners' pronunciation. (2)Through investigating dialogues with learners, practitioners' tolerance for the diversity of pronunciation increased, and their burden as being a model of pronunciation was reduced. (3)Instead of giving specific feedback to learners, practitioners came to recognize the necessity of encouraging learners' self-monitoring.

The results of this study provide a new approach that is necessary for teaching pronunciation. This study suggests the importance of paying attention to not only learners' acquisition of Japanese pronunciation but also to a learning process shown through dialogues between practitioners and learners.

参考文献

千仙永（2013）「日本語教育実習生にとっての『アクセント確認』の意味」『2013 CAJLE Annual Conference Proceedings』 pp.30-36, http://www.jp.cajle.info/wp-content/uploads/2013/10/Chun_CAJLE2013Proceedings.pdf（最終閲覧日：2015年6月16日）。

発表4

イタリア語話者のための会話教材における発音表示

小林ミナ（早稲田大学）
 藤井清美（金沢工業大学）
 柳田直美（一橋大学）

本発表では、イタリア語話者のための会話教材における発音表示について考察する。この表示方法は「学習者の母語を配慮する」「正書法を介在させない」「国際音声字母（IPA）といった専門知識を前提にしない」という特徴をもつ。

音声を媒体とする「話す」ための教材や教室活動においては、相手に通じる発音で話せることが重要であり、音声だけを媒体としても学習／教育が可能である。しかし、とくに成人を対象とする日本語教育で文字媒体をまったく使用しないのは、記憶、定着を考えるとあまり現実的ではない。ただし、そこに日本語の正書法が介在する必要はない。

発表者らはこれまで、日本語非母語話者に日本語音声聞かせ、日本語の正書法に拠らず「同じように再生できる」ための母語の文字体系で記してもらった実験調査を行っている。その結果、個人差は見られたものの、母語によって一定の傾向があり、それらを用いた日本語表記の方法は「同じように再生できる」会話教材の表記方法として有効であることがわかった（小林、藤井、柳田 2014）。本発表では、イタリア語母語話者のための発音表示の開発過程とその成果を紹介する。

Phonetic Notation of Japanese Speaking Materials for Italian Speakers

This study focuses on developing a phonetic notation of Japanese-language conversation materials for Italian speakers. This notation has three characteristics: (1) consideration of learners' first language, (2) no strict orthography, (3) no reliance on the International Phonetic Alphabet (IPA). It is critical that a speaker's utterance is understood by the addressee when it comes to teaching "speaking," but while it is possible to prepare materials or classroom activities that focus solely on pronunciation, it is not realistic to teach adults in this manner, given the limitations of memory. That said, it is not necessary to use the Japanese orthography. The authors examined learners, asking them to listen to certain sentences and then to spell out the utterances as they heard them in their own language, without adhering to Japanese orthography. The results show that, although there are individual differences in transliteration, there are certain tendencies depending on the learner's first language and using these for phonetic notation of speaking materials is effective in enabling learners to reproduce sentences (Kobayashi, Fujii, & Yanagida, 2014). In this presentation we will provide an overview of our study, the process of developing a phonetic notation, and its results.

参考文献

小林ミナ, 藤井清美, 柳田直美 (2014) 「会話教材における発音表示」 (ポスター発表) シドニー日本語教育国際研究大会 (SYDNEY-ICJLE2014) (シドニー工科大学, オーストラリア)

発表5

文法、どう教える？

鬼頭夕佳（フランス国立理工大）

外国語・第2言語教育において、母語の役割は様々な教授法の違いを決定づけるものとして議論の対象となってきた。しかし、どのようなアプローチであれ、特にメタ言語レベルにおいて、母語の影響を逃れることは難しい (CASTELLOTTI 2001)。そうであるならば、学習者がすでに「知っていること」をより積極的に新しい言語の習得に生かすべきではないだろうか。こうした問題意識から、今回のポスター発表では、メタ言語的活動における母語の役割に焦点をあて、これまでの教室実践を見直すとともに、学習者のメタ言語を考慮した文法のあり方について議論したい。議論の材料として使用教材や教室で使われている文法用語・文法説明を取り上げる。取り上げる項目は、教室内での学生の発言、教師による教室実践の内省、フランス語話者向け教材執筆の際の気づき、またその際に得られた非日本語母語話者のコメントなどをもとに選択する。教室を出自の異なるメタ言語の対話の場として捉え、それを記述し、学習・教育に活かすことはできないだろうか。このポスター発表をその取り組みへの第一歩としたい。

How to teach grammar?

In foreign language and second language education, the role of L1 has been discussed as a decisive element for choosing a teaching approach. However, whatever the approach, it is not easy to escape the influence of L1, especially at the metalinguistic level (CASTELLOTTI 2001). We should thus take advantage of what we already know for the acquisition of a new language. That is why we propose that teachers rethink their practice in the class and discuss how grammar should be taught, considering the learner's metalanguage. For the discussion, we would like to examine the grammar explanations and terms used in textbooks and classes, which are chosen on the basis of learners' speech in class, teachers' introspection about their own practices, and remarks and comments made by native and non native Japanese speakers while our creating teaching materials for French-speaking learners. We hope this presentation will be the first step in describing the classroom as a stage for dialogue between metalanguages of different origins, with the aim of teaching grammar more effectively.

参考文献

BERTRAND, Olivier & SCHAFFNER Isabelle (Dir.) (2013), Enseigner la grammaire, Éditions de l'École Polytechnique.

CASTELLOTTI, Véronique (2001), *La langue maternelle en classe de langue étrangère*, CLE International.

鬼頭夕佳 (2007) 「教室における文法-フランスの日本語教育の場合-」 Actes des symposiums 2005 – 2006, AEJF.

デルテイユ, アンドレ&武井由紀 (2007) 「プロヴァンス大学における教科書『一年生のための日本語』について-その特徴と作成過程で得た文法用語をめぐる疑問点-」 Actes des symposiums 2005 – 2006, AEJF.

発表6

「聞き手参加型聴解」の教材開発

金庭久美子（立教大学）
 山森理恵（横浜国立大学）
 奥野由紀子（首都大学東京）
 鎌田修（南山大学）

従来の聴解教材は、聞き手が当該の会話に直接参与するのではなく、第三者的立場から間接的に聞き、その内容を確認する「聞き手傍観型」のものが多かったが、本研究では聞き手が当該の場面に直接関わる当事者として参与する「聞き手参加型」の聴解が重要であると考え、それを可能にする方法を追求する。

聞き手が当事者として行う行動について、様々な場面における生の日本語母語話者会話を観察すると、音が聞き取れない、語の意味が分からない、その話題の背景知識の不足による聴解困難な場合などに対し「聞き返し」の方略が有効に使われることが分かった。

さらに「聞き返し」のみならず、相手の話に対する「応答」にも効果的な方略が取られ、リアクションの投与、描写された状況の確認、提示された意見や相談に対する提案、話し手に共感を示す等、その場に直接関わる当事者に要求される言語行動の存在が明らかになった。そのため、聞き手参加型の聴解練習には当該場面の状況、聞き手の役割、会話参与者間の社会的関係、聞き手の感情や意図等を示した聴解用ステイタス・カードを導入することが有効であると考えた。

本研究ではこれらを統合した聴解練習の方法を提案する。

Development of Teaching Materials for Listener-Involved Listening Activities

Conventional listening comprehension materials are mostly designed in such a way that the listeners are not directly involved in the given conversation, but rather as a third party they are to hear a conversation between native speakers and ‘overhear’ its content. Contrary to this kind of “bystander listening,” this study attempts to explore the methods of “listener-involved listening practice,” in which listeners hold active roles in the given conversation. Careful observation of real and authentic conversations, in which the listeners are directly involved, has made it clear that these listeners use “confirmation strategies” to address problems of listening comprehension such as difficulty recognizing sounds and understanding meanings of vocabulary and utterances due to the lack of contextual knowledge. It was also found that they employ useful strategies of responses---giving reactions, requesting clarification about the circumstances, giving feedback about the proposed opinions and requests, and showing empathy to the speaker. This leads to the conclusion that listener-involved listening practice should be accompanied with statements showing the circumstances of the given situations, the listeners’ roles, emotion and intentions, and the social relations of the conversation participants. Our study proposes new listening materials integrating these ideas.

参考文献

山森理恵・金庭久美子・奥野由紀子・鎌田修（2014）「聞く過程の強化と自己成長を促す教材開発に向けて―「聞き返し」に着目して―」『CAJLE2014 Proceedings』229-238,2014年8月

発表7

ことばの表出を促す初級語彙マップ教材の開発

徳弘康代（名古屋大学）

楽しく話しながら言葉や漢字を学ぼう、という趣旨のもとに開発した語彙マップ初級教材について発表し、その教材を用いた学習の実践報告をする。本研究で開発した語彙マップは語彙教材を会話・対話教材として活用させるため、提示する語として独立語だけでなく、助詞や表現文型や活用させた動詞等も載せて語彙と文法を混在させ、学習者がマップを見てすぐに表現できるように工夫した。本教材はテーマごとに課に分けられている。各課の構成は、扉絵、語彙マップ（漢字かなまじり・ふりがな・ローマ字）、語彙マップ（英・中・韓国語訳）、文型・語句説明、会話例、復習である。まず初めに絵を提示し、絵を見てイメージを膨らませ、自分が言いたいことについて考えさせる。次に語彙マップを示す。同じマップが日本語と訳語で作られている。学習者はマップの語句や表現文型を使って表現し、足りないものは自分で書き足して語を増やし、漢字も覚えたいものを覚える。この教材は口頭表現だけでなく、マップを用いて作文することにも使うことができる。覚える語の選択・追加等は学習者に任せ、評価も教師主導ではなく、各自が覚え、表現したものについて評価をする。

Encouraging the Expression of Ideas through Implementation of Word Mapping

The intention behind this curriculum (word mapping) is one that allows students to express themselves in an enjoyable manner. Not only isolated words, but phrases and particles are also included in these word maps. Because of this, students can develop conversational skills quickly and easily. These teaching materials are divided into chapters which introduce practical situations they might face on a daily basis. Structurally, each chapter consists of an illustration, 2 word maps (Japanese and tri-lingual translation), grammatical explanation, dialogue example, and supplementary questions.

How to use these materials: First, students look at the illustrations and try to form an image of what they want to say. Next, while looking at the word maps students try to express what they want to say in Japanese (using the transliterations to confirm with their own language). If not included in the map, students make a note of what they wish to say in their own words. They may also use these phrases to compose essays. Students are able to select words and kanji for practical use based on their interests, and can evaluate themselves accordingly.

参考文献

徳弘康代（2015）『語彙マップで覚える漢字と語彙 初級 1400』Jリサーチ出版。

発表8

支援のコミュニケーションにおける「関係構築力」の再考

—複数言語サポーターのインタビューから—

徳井厚子（信州大学）

当研究は、複言語サポーター（外国にルーツを持ち、文脈に応じて複数の言語を駆使しながら地域や学校で外国人に支援を行っている者）の語りを、「関係性」という観点から分析を行ったものである。45名の複言語サポーター（以下PS）の語りを分析した結果、PSと当事者の「関係性」に関して以下の語りが見られた。

- 1) PSが当事者と関係を構築していくことの大切さ
- 2) PSと当事者の一定の距離感を保つことの大切さ
- 3) PSが当事者のプライバシーに入り込み過ぎないことの大切さ
- 4) PSが当事者と互いに自立した関係を築くことの大切さ
- 5) PSと当事者の関係を相対化することの大切さ
- 6) PSと当事者との関係性の限界を知ることの大切さ
- 7) 時間とともにPSと当事者の関係性を変化させていくことの大切さ
- 8) 状況や相手により関係性を変化させていくことの大切さ

従来、関係構築力は重要とされてきた。しかし、今回の分析結果から、関係構築力には限界があり、関係構築しない力や関係構築そのものを相対化する力、関係性そのものを変化させる力、関係性そのものの限界を知ることが必要であることが示唆されたといえる。これまでの「関係構築力」を再考する必要があるといえるだろう。

Reconsidering the Ability to Build a Relationship with a Foreign Client in Communication regarding Support: Based on Interviews with Plurilingual Supporters

In this study, an analysis of the discourse of plurilingual supporters (PSs) was conducted from the perspective of relationality. By analyzing the discourse of 45 PSs, the following discourses regarding the relationality between the PS and the foreign client were found:

- 1) Importance of the PS's building a relationship with the foreign client;
- 2) Importance of maintaining a certain sense of distance between the PS and the foreign client;
- 3) Importance of the PS's not intruding too far into the foreign client's privacy;
- 4) Importance of the PS's building a relationship of mutual independence with the foreign client;
- 5) Importance of relativizing the relationship between the PS and the foreign client;
- 6) Importance of knowing the limits of the relationality between the PS and the foreign client;
- 7) Importance of changing the relationality between the PS and the foreign client over time; and
- 8) Importance of changing the relationality depending on the situation and the foreign client.

The results of the analysis performed in this study is suggesting that there are limits to the ability to build a relationship.

発表9

課題設定を支援する対話の「ことば」：
日本学を学ぶ大学院生のブログ活動を例として

佐野香織（早稲田大学）

多様な学習者・教育者の学びのゴールや評価について、近年、「ゴールを変えていく」その主体の多様性についても考えられるようになってきた（R.グリフィン他,2014）。「他人が固定したゴール」だけではなく、「自分からゴールを変えていく」「前向きアプローチ」（白水,2013）で、学習者たちが学びを考え、学びに責任を持つ考え方もある。成人学習論においても、相互型決定学習の提案がされている（三輪,2011）。しかし、学習者が課題を設定し、対話を通して主体的に学びあう学習展開についての論考は少ない。学習者は、どのように対話を通して、漠然とした興味・関心から焦点をしぼり、自ら課題を設定し、学んでいくのだろうか。本研究では、日本学を学ぶ大学院生のブログ型専門コミュニケーションにおけるブログ上の対話を取り上げる。そしてどのような「ことば」や概念が大学院生の課題設定に影響を与えたのかを明らかにする。成人学習論を理論的枠組みとして分析を行った結果、課題設定ができた大学院生のブログは、「自己開示」「個性」「専門性」があるものが多いことが分かった。

“Language” in the dialogue as the support of graduate school students’ agenda-setting: the blogging activities in the graduate school of Japanology

In this study, we draw on the graduate school students’ dialogue in their academic interest-based blog. We explore how “kotoba” and concepts impact on the agenda-setting of the graduate school students’ blogging activities. We indicate that there are “self-disclosure”, “individuality”, and “expertise” concepts in their cases.

参考文献

- 三輪建二（2011）『おとなの学びを育む 生涯学習と学びあうコミュニティの創造』鳳書房。
Mezirow, J. (1991) *Transformative dimensions of Adult Learning*. San Francisco, Jossey-Bass.

発表10

日本語学習者の雑談における語り —協働的な発話連鎖に注目して—

宮永愛子（広島女学院大学）

本研究では、日常会話で頻繁に行われる語りという行為に注目する。語りは、過去にあったことを会話の中で報告することで、物語りともナラティブとも言われる。会話の中で適切なタイミングで語りを導入し、一定期間フロアを維持した上で、相手を納得させるようなストーリーを語るのは母語話者にとっても容易なことではない。本研究では、日本語母語話者と日本語学習者の初対面同士の雑談の中から語りが行われている部分を抽出し、語り手と聞き手がどのように関わっているのかという観点から、日本語学習者の雑談における語りにはどのような特徴があるのかを質的に分析した。先行研究でも、会話における語りは、参加者が協働で作上げるものであるということが指摘されているように、本データでも、語り手と聞き手が協働で語りを形成するような部分が多数観察された。特に、上級以上の話者は、聞き手を巻き込むための様々な工夫を行っていることが分かった。このことから、雑談において、一定時間フロアを維持して語りを行うためには、聞き手の支援が不可欠であるため、聞き手をいかに巻き込むかが重要であるということの本研究では主張する。

Conversational narratives of Japanese language learners - Focusing on collaborative utterances -

This research focuses on conversational narratives. A narrative entails reporting something which happened in the past, and is also known as story-telling. The skills involved in introducing a narrative at the appropriate time in a conversation, and continuing to keep the hearer convinced of the necessity of telling the story in the “here and now”, are difficult even for native speakers of a language. The present research investigated the features of conversational narratives of learners of Japanese as a second language. Conversations between Japanese native speakers and Japanese learners were qualitatively analyzed in terms of the participation of the narrator and hearer. Previous research has suggested that narratives are collaboratively constructed by the participants in a conversation. The present data show that the Japanese learners, especially the advanced level learners, made use of various devices to construct narratives in collaboration with native speakers. The present findings reveal the importance of involving the hearer in the construction of a narrative, as the support of both participants is indispensable in holding the floor to relate a conversational narrative.

参考文献

- 串田秀也（2009）「聴き手による語りの進行促進—継続支持・継続催促・継続試行—」『認知科学』, 16(1), 12-23.
- 西川玲子（2005）「日常会話に起こるナラティブの協働形成：理論構築活動としてのナラティブ社会言語科学」『社会言語科学』7(2), pp.25-38.
- 李麗燕（2000）『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究：会話管理の観点から』くろしお出版

発表11

日本語学習者から日本語ユーザーへ —ある移住者のナラティブから—

八木真奈美（駿河台大学）

グローバル化が進む現代、移住者の受け入れは世界的な課題となっている。OECD（2007）によると、国によって統合あるいは多文化主義へ向かう傾向に分かれるが、日本は受け入れの議論もないまま、約212万人の外国人登録があり、実態としての定住化が進んでいる。移住者に対する言語学習については、公的な学習機会は保証されていないため、一部の人が地域の日本語教室に通っているのが現状である。しかし、以前から指摘されているように、「学校型の、ネイティブの日本語規範を（中略）教えていくという方法が採られ続けて」（牲川,2011）おり、教室という文脈で「学習者」という役割を与えてしまっているように思われる。そこで本研究では、移住者10名に聞き取り調査を行った。本発表では、その中のAさんを取り上げる。Aさんの語りからは、常に「学習者」ではなく、日本や母国、あるいは家庭や社会などの異なる文脈を移動して、役割を演じたり、抵抗したりしていることがわかった。調査の結果から、移住者をよりダイナミックに捉えた上で、「学習者」から「日本語ユーザー」へと位置づけの転換をはかっていくことを提言したいと考える。

From Japanese learner to Japanese user - From a narrative of a certain immigrant

In the globalization of today's world, accepting immigrants is a global issue. According to OECD (2007), some countries are inclined to integrate them, and others are inclined to be multi-cultural nations, but in Japan's case, we have 2,120,000 alien registration without much discussion done, and their settlements as a reality is in progress. As those immigrants are not guaranteed for the opportunities of the public educations, some go to the Japanese language classroom of their communities. However, as it has been pointed out, it is thought that 'textbook style Japanese rules (...) is being taught' (Segawa, 2011), and they are given the roles of 'learners' in the context of classrooms. Thus, in this study, I interviewed 10 immigrants. In this report, I cite A's case. A's case revealed that she was not always a 'learner', and she played various roles in different contexts such as Japan, her home country, her family and the society, or resisting. From the result of this study, I would like to propose a shift of the immigrants' placement from the 'learners' to the 'users of Japanese language' by grasping them more dynamically.

参考文献

- OECD（2007） 斎藤里美監訳（2007）『移民の子どもと学力—社会的背景が学習にどんな影響を与えるのか』（OECD（2006）*Where immigrant students succeed: a comparative review of performance and engagement in PISA 2003*）
- 牲川波都季（2011）「共生言語としての日本語」という構想—地域の日本語支援をささえる戦略的使用のために」上田晃次・山下仁（編）『「共生」の内実 批判的社会言語学からの問いかけ』pp. 107-126 三元社
- 法務省（2015）平成26年度末現在における在留外国人数について
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00050.html

発表12

アカデミック日本語教育における対話タスクの連続性

藤森弘子（東京外国語大学）

「アカデミックな日本語能力」とは、大学での勉学に必要な日本語知識とスキル、それに加えて問題解決・分析能力といった学術能力の両者を統合した能力を指す。本学ではこの能力到達基準を示す「全学日本語 can-do リスト」を2011年から開発しており、現在2014年版を参照しながら、can-do 記述文の妥当性の検証も同時に進めている。本リストは、4技能別（聴解・読解・文章表現・口頭表現）に初級から超級まで8レベルに分かれており、can-do 記述文による行動目標及び目標細目が記載されているものである。口頭表現リストは「独話 (academic presentation)」と「対話 (academic interaction)」の二項目に分かれている。それを熟達度別・技能別に概観し、目標細目を比較したところ、初級から上級まで一貫して、「順序・談話構成」「結束性」「ストラテジー」「社会言語学的能力」「発音」の要素が共通してみられた。本発表では、これら要素が教科書にどのように反映されているかを、開発中の初級・中級教材の中から「対話タスク」を中心に引き上げ、連続性がどのようにみられるか、その特徴を考察する。

Continuity of interaction Tasks in the teaching of Japanese for Academic Purposes

The term “Academic Japanese Proficiency” refers to proficiency combining the Japanese language knowledge and skills necessary for engaging in University-level studies with the academic proficiency of problem-solving and analysis. We have been developing a “ZENGAKU-NIHONGO ‘Can-Do’ list” which details standards for proficiency achievement since 2011; at the same time, referencing the 2014 edition of said “Can-Do list,” we have been engaged in verifying the appropriateness of the Can-Do statements. This list is divided into eight levels, from Beginner to Upper -Advanced, and four skills (listening comprehension, reading comprehension, writing expressions, and oral expressions). Additionally, the goals proscribed by the Can-Do statements are enumerated.

The oral expressions list is divided into two items: academic presentation and academic interaction. Reviewing the list in terms of degree of acquisition and specific skills, and comparing the academic goal details, we found that the elements of, “sequencing / dialogue structure,” “cohesion,” “strategy,” socio-linguistic competence,” and “pronunciation,” were common to all levels from Beginner to Upper-Advanced. In this presentation, we will examine continuity and its salient aspects in regards to how these elements are reflected in the textbook materials through a focus on the interaction tasks currently being developed for beginner and intermediate levels.

参考文献

- 鈴木美加・藤森弘子（2014）「アカデミック日本語 can-do 記述文を用いた学習者の自己評価の分析ー日本語レベルと技能の関連性からー」『第18回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』ヨーロッパ日本語教師会 287-288.
- 藤森弘子他（2015）「can-do 行動目標に基づいたタスク型初級教材の開発と実践ータスク遂行のプロセスに焦点をあててー」『日本語教育方法研究会誌』Vol.22 -1 102-3.

発表13

BJ-CAT ビジネス日本語テスト —タスク遂行型の問題項目の作成—

赤木彌生（山口大学）
伊東祐郎（東京外国語大学）
本田明子（立命館アジア太平洋大学）

BJ-CAT コンピュータ適応型ビジネス日本語テストの研究開発を行っている。BJ-CAT は、ビジネス場面におけるコミュニケーション能力を測定することを目的としている。問題分野は、聴解、聴読解、語彙・文法、読解の四分野である。問題項目を作題するにあたり、問題項目の内容を単に把握し、理解しているかどうかを問うだけでなく、ビジネス場面で必要とされている問題解決能力を問う問題項目やビジネス上の課題を遂行するためのタスクを設定した問題項目を作題することに留意した。例えば、読解問題において、「ある会社に次のような文書を送ります。文書の件名として A に記載するのに適当なのはどれか。」と設問で問い、受験者に文書を読ませたうえで、文書の件名を考えさせる問題である。文書の内容が理解できるだけでなく、件名をつけるというタスクを遂行しなければならない問題項目となっている。このように、単にビジネス分野の語彙表現、文法、文書の理解にとどまらない新しいタイプの問題項目の作題を試みている。これらの問題項目は、現在、実施している事前テストで分析を行い、より妥当性の高い問題項目のみを BJ-CAT に搭載し、信頼性の高いテストとする計画である。

BJ-CAT Business Japanese Test - Problem Solving Question Items -

BJ-CAT Business Japanese Computerized Adaptive Test has been developed. The test measures a communication for business scenes. It has four sections; Listening, Listening and Reading, Grammar and Vocabulary, and Reading. The BJ-CAT project team tried to make new types of the question items for solving problems and pursuing tasks, rather than just asking for understanding the contents of the documents, grammar and vocabulary. For example, one of the reading questions asks for a task to decide an appropriate title for the document which will be sent to another company. These question items are being pre-tested now. The data from the answers of these question items will be collected and analyzed according to the Item Response Theory. With the results of the analysis, more appropriate question items will be used for BJ-CAT, and therefore we assume that a more reliable test will be made. The BJ-CAT pre-test is now available on the internet, so those who have not experienced the Business Japanese Test can try this test as a monitor test.

発表14

日本語教育語彙表と検索システム

李在鎬 (筑波大学)

砂川有里子 (元筑波大学)

長谷部陽一郎 (同志社大学)

本発表では、「日本語教育語彙表」およびその検索システムを紹介する。「日本語教育語彙表」は日本語教育における辞書開発を支援する目的で開発された。開発の基本方針は次の3点である。1) オーセンティックな語彙項目を取り入れた教育のための語彙表を作ること。2) 語彙項目に対して様々な指標をつけ、辞書開発はもちろんのこと、教育現場でのニーズに答える語彙表を作ること。3) ウェブを通じて国内外のユーザーに提供できる語彙表を作ること。以上の方針のもとで作業を行い、2015年現在、17920項目の登録作業が完了している。そして、二つの方法でデータを公開している。一つ目は語彙リストとしてエクセルファイルをダウンロードして利用する形、二つ目は検索システムを介して用例や語義、コロケーション情報、文化情報を閲覧する形である。ダウンロード方式は日本語教師向けの提供形式であり、研究支援および日本語教育用のコンテンツ開発を支援することを目的とする。検索システムによる利用は、教師のみならず、中上級の学習者向けのサービスであり、ウェブブラウザを使って、どこからでもいつでも利用できるようになっている。

The Japanese Vocabulary List for JSL/JFL Learners: Its design and Implementation

The purpose of the compilation of the Japanese Vocabulary List for JSL/JFL Learners is to help editors who edit Japanese learners' dictionaries. Our basic plans are: (1) to compile a vocabulary list for JSL/JFL learners with the information which supports authenticity of the language use, (2) to label various indexes to each item of the vocabulary in order to be used for dictionary editing and also for Japanese teaching, and (3) to compile a vocabulary list which can be accessed by any users via internet.

At present (in 2015), we have compiled a list of 17,920 vocabulary items and released the data in the following two ways: (1) an Excel file of the vocabulary list to be downloaded by users, (2) a database system which is utilized for searching example sentences, meanings, collocations, information about Japanese cultures, etc. (1) is designed for Japanese teachers who use the data for their research or for developing content for teaching materials. (2) is designed not only for Japanese teachers, but also for intermediate and advanced Japanese learners, and so that they can access the data anywhere and anytime via internet.

発表15

会話テスト JOPT 抽出データに与えるインタビュアーの影響

西川寛之 (明海大学)

鎌田修 (南山大学)

野口裕之 (名古屋大学)

伊東祐郎 (東京外国語大学)

嶋田和子 (アクラス日本語教育研究所)

野山広 (国立国語研究所)

由井紀久子 (京都外国語大学)

六川雅彦 (南山大学)

李在鎬 (筑波大学)

科研プロジェクトにおいて開発中の会話テスト“JOPT (Japanese Oral Proficiency Test)”について報告する。JOPT 対面型の会話力を評価するための面接試験である。この JOPT により得られた音声データを分析し、解答の量、発話の内容に対するテストの影響について発表を行う。

本試験は、世界各地での会話テスト実施を前提に開発を行っている。JOPT は OPI,CEFR 等の評価基準を参考にして作成されている。特徴は、テスト養成期間、試験時間が OPI 等よりも短い点にある。インタビュー形式で人為的な反応を含んだものとなっているため、インタビュアーの質の違いがテストに与える影響を小さくすることが、試験の信頼性を確保するための課題となる。

現在開発中の本テストにおいて、出題を異なるインタビュアーが行うことで、学習者の発話データの量、質に与える影響について調査を行った。会話試験（口頭による解答）で、与えられる問題が同様の設問に対する解答が、インタビュアーの違いによりどのように変化するかを観察した。拍数、解答時間、解答内容それぞれについて、テストの違いによる違いと、被験者の初回と二回目の解答の違いを分析した。テストが解答を促す反応をすると、解答量の増加が観察された。

“Influence of Interviewers on JOPT Conversation Test Data”

This is a report on the speaking test "JOPT (Japanese Oral Proficiency Test)," currently being developed under a Kaken research project. JOPT is an oral examination conducted via interview to evaluate conversational proficiency in Japanese.

After analyzing the oral data from the test, we will present on the effects of the tester on the length and quantity of the test takers' answers. This project is intended for use in Europe and around the world and has taken the evaluation standards of other tests such as OPI and CEFR into consideration. JOPT can train testers in a shorter time than other tests and can be administered in a shorter time.

Being interview style, the questions and responses must be made artificially. As such, in order to attain higher reliability for the test, it is necessary to reduce the influence of the individual interviewer.

We examined how the oral answers brought on by similar questions which were given by different interviewers varied according to interviewer. We analyzed the number of mora, the answer time and the answer content according to interviewer, along with how the results varied on the first and second attempts by the same test taker.

発表16

異文化理解能力としての「ポライトネス・ストラテジー」の運用

ナインドルフ会田真理矢 (ダーラナ大学)

異文化コミュニケーション能力の養成は言語教育の重要な一環である。日本語の敬語表現や丁寧表現に見られるように、ポライトネス・ディスコースは、対話者の社会的距離や上下関係、および対話の状況等に複雑に影響される。ところが平等意識の高いスウェーデンの日本語学習者は、そういったポライトネス表現の学習に対する意欲が低い傾向がみられる。しかし外国語学習者は、コミュニケーションをうまく成立させるために、個人の信念とは別に、当該言語が使用されている社会や文化の規範にある程度適応しなければならない。本研究では学生へのアンケート調査および課題のエラー分析をもとに、スウェーデン語話者と日本語話者のポライトネス・ストラテジーの違いを明確にする。さらに、スウェーデン語および日本語による各種の談話を分析し、各言語における「ディスコース・ポライトネスの基本状態 (default)」(Usami 2006) を確立し、日本語のポライトネス・ストラテジー習得をより容易にするため、これを文法の一部としてシステム化することを試みる。

Politeness as a Part of Intercultural Competence

Teaching communicative competence is extremely important in language instruction. While politeness discourse varies in complexity according to social distance, relative power between the speakers, and situations, Swedish learners of Japanese often do not see the necessity of learning the polite/honorific discourse and often view these negatively as Swedish society is one of the most egalitarian in the world. However, it is important to point out to foreign language learners that cultural/social norms are not modifiable based on one's opinion and that one must adapt to the language one is using and the culture one is in. The current study investigates the differences in politeness strategies between Swedish and Japanese discourse. Student surveys and analysis of students' errors have revealed clear differences in the use of politeness strategies. While politeness, respect, and formality are closely intertwined in Japanese; the Swedes perceive respect and politeness as separate matters. It is also found that while the Japanese are inclined to use verbal politeness strategies, the Swedes express their respect more through non-verbal actions/behaviors. Various Japanese and Swedish utterances have also been examined to determine the DP default (Usami 2006) in order to systematize the politeness strategies in ways similar to grammatical rules.

参考文献

- Usami, Mayumi (2006). "Discourse Politeness Theory and Cross-cultural pragmatics". In Yositomi, A., Umino, T., & Negishi, M. (Eds.), *Usage-based Linguistic Informatics 4: Readings in Second Language Pedagogy and Second Language Acquisition in Japanese Context*, 19-41. Amsterdam: Philadelphia John Benjamins Publishing Company.

発表17

接触場面における日本語母語話者の配慮

ーロールプレイにおけるモニタリングの分析を通してー

フォード丹羽順子 (佐賀大学)

三宅和子 (東洋大学)

本研究の目的は、接触場面において日本語母語話者が学習者の言語行動に対してどのような配慮をしながら会話をしているかを明らかにすることである。そのために、学習者と日本人学生に対し依頼場面のロールプレイを実施し、「モニタリング」（会話参加者が会話中に内省的に行っている、自己と会話相手の言語行動に関する評価や判断）のデータをとった。日本人学生のモニタリングから、学習者の言語行動に対してさまざまな配慮がなされていることがわかった。配慮には、1) 学習者の日本語能力に対する「言語的な配慮」（日本人学生が依頼を引き受ける際に「しゃーないね」と言ってしまったあとで、学習者がわからないかもしれないと思って「あ、いいよ」と続ける）、2) 会話が円滑に進むようにする「談話展開的な配慮」（学習者の応答が不適切で理解するのに困難があっても、話をつなげるために受け入れる）、3) 相手の感情を考える「語用論的な配慮」（依頼を断る際に相手を傷つけないように、柔らかく聞こえるような発音のしかたをする（ためらいがちに言う））を認めることができた。日本人学生が行っているこれらの配慮を検討し、依頼場面に必要な学習者のスキルを考える。

Japanese L1 Speakers' Consideration towards L2 Speakers: Analysis of L1 Speakers' Monitoring in Role Play Activities

The aim of this paper is to explore what kinds of considerations Japanese L1 speakers have towards their interlocutor's language ability when talking with L2 speakers. For this purpose, we conducted a role play of asking favors between Japanese university students and L2 speakers, and obtained monitoring data. Monitoring is defined as evaluations and judgements that participants (speakers and listeners) report about themselves and their partners' language during conversation. We found that Japanese L1 speakers have various considerations toward L2 speakers. Considerations are analysed as 1) considerations towards L2 speakers' Japanese language ability, such as adding explanatory words after colloquial expressions, 2) considerations towards smooth unfolding of discourse, such as accepting L2 speakers' utterances even when they are difficult to understand, and 3) considerations towards L2 speakers' emotions, such as attempting to avoid hurting the L2 speakers' feelings when refusing their requests. We consider the necessary skills of L2 speakers for asking favors based on the Japanese L1 speakers' considerations.

発表18

ブルックス文庫を使った学習者主体の『読む』教室活動の一例

池城恵子（オックスフォード・ブルックス大学）

情報収集や楽しみのためのL1の読みとは違い、L2の読みは、読解や文型練習などが目的で行なわれるため、読み物は、往々にして面白みに欠け、学習者の意欲を高めるとは言いがたい物が多い。

2010年にオックスフォード大学と本学で実施した多読ワークショップで、学習者は達成感、意欲を覚え、読解がよくなったと感じ、読むのが楽しかったなどと述べ、多読が日本語学習に大きな効果があることがわかった。

これを念頭に、2013年に本学で「楽しんで読む」レベル別読み物、ブルックス文庫が出版された。本学では、教室活動にブルックス文庫を積極的に活用している。例えば、楽しんで読んで、読んだ話のポップを書いたり、朗読会を開いたりする。

本発表では、台本を書く教室活動を紹介したい。イギリスの中高等学校で日本語学習暦2-4年の生徒を対象に台本を書く授業を行なったが、その際の生徒の活動・反応、授業の手順、ファシリテーターの役割について説明する。また、アンケートの分析結果から、特にL2の読みの習得に関する先行研究を踏まえて、この学習者主体の『読む』活動が、学習者の読みに対する態度にどのような効果、影響があるかについて考えてみたい。

An Example of a Classroom Reading Activity that Engages Learners Using *Let's Read Japanese*

While we read for information and pleasure in L1, we read for comprehension and sentence structure practice, etc. in L2. Therefore, reading materials in L2 are often not interesting and do not enhance learners' motivation.

In 2010 Oxford University and Oxford Brookes University (OBU) held two extensive reading workshops. The learners enjoyed reading, experienced feelings of achievement and motivation, and felt their comprehension improved. Thus extensive reading proved to have significant effects on learning Japanese.

With this in mind, in 2013 OBU published the *Let's Read Japanese* (LRJ) series, graded reading materials for pleasure. We deploy LRJ in class at OBU. Students engage with class activities such as reading for pleasure, writing Point of Purchase and holding recitals.

In this poster session an activity to write scenarios will be introduced. In classes of learners with two to four years of Japanese study in the UK a story from LRJ was read which was followed by writing scenarios. This session will explain students' activities and responses, the lesson sequence, the facilitator role, etc. In light of research on reading acquisition in L2 the questionnaires are analysed to demonstrate the effects such activities that engage learners have on their attitude towards reading.

参考文献

Csikszentmihalyi, M. (2002). *Flow: The Classic Work on How to Achieve Happiness*. London: Ryder.

Day, R. and Bamford, J. (2002). Top Ten Principles for Teaching Extensive Reading. *Reading in a Foreign Language* 14 (2), 142-145.

Grabe, W. (2010). *Reading in a Second Language*. New York: Cambridge University Press.

発表19

中級日本語学習者の文章理解における問題点

高橋亜紀子（宮城教育大学）

本研究の目的は、中級の日本語学習者が文章を読む際、どんなところでつまずき、文章全体の意味がつかめなくなるのかを調べることである。学習者5名（ハンガリー、スペイン/フランス、メキシコ、ベトナム、台湾）を対象に、一人ずつ、JLPTのN2-N3程度の10種類の文章を読んでもらった。方法は①学習者がいつもと同様に必要があれば辞書を使って読む、②分からない部分があれば調査者に話す、③理解できたら、文章を見ないでその内容を口頭で再生する、④内容に関する質問に答える、⑤読解に関するインタビューに答える、である。調査はすべて日本語で行った。その結果、学習者がつまずいたのは、単語や文法、表現、指示詞だけでなく、文章の構成などもあった。また、一貫性のある再生も難しかった。特に、非漢字圏の学習者の中には、単語など細かい部分につまずいてわからなくなってしまうタイプもいたが、文章の構成や重要な部分に着目し、細かい部分にこだわらずに全体を理解しようとするタイプも見られ、このタイプの学習者のほうが文章の内容を的確にとらえることができていた。教師は、学習者それぞれの問題点を把握した上で支援をしていく必要があるといえる。

Reading Comprehension Problems in Intermediate Learners of Japanese

The aim of this study is to investigate the problems of reading comprehension in intermediate learners of Japanese. The participants of this study are five intermediate learners of Japanese from Hungary, Spain/France, Mexico, Vietnam, and Taiwan. Ten expository texts which levels are between N2 and N3 of JLPT were used as reading materials. The participants were assigned individually (1) to read each text without time restriction, (2) to find the problems or difficulties in each text, (3) to reproduce the content of the text orally in Japanese as fully as possible after reading each text, (4) to answer the comprehension questions about each text and (5) to answer questions about the reading. The results indicate that there were many kinds of problems which include word meaning, grammar, expressions, demonstratives, text structure, and so on. It was also difficult to form the coherent representation of the text. Especially, non-Kanji background participants spent much time on lower-level linguistic processing. However one participant focused on recognizing the text structure, identified main ideas and reproduced the coherent representations effectively even though she had many difficulties. This implies that recognizing the text structure and identifying main ideas enhances and support learner's reading comprehension.

発表20

留学生の論述パターンから見るレポート指導の方向性

—日本人学生の期末レポート,院生,研究者の学術論文との比較を通して—

中尾桂子 (大妻女子大学短期大学部)

初中級以上の学部留学生が出すレポートは、形式的には問題がなくても、叙述や論述で不自然に感じるものも多い。そこで、文系留学生の期末レポート30本の記述の流れを「叙述展開」の動詞(土部1990)でパターン化した。それを、日本人の、文系の、学生のレポート、院生の学術論文、研究者の学術論文それぞれのサンプル30本ずつと比較したところ、調査対象の留学生の記述には、事実と意見を紡ぐように織りなす文章展開のパターンが顕著ではなかった。また、文章の結束性指標である指示詞、接続表現(村田2007)等にも、日本人とは異なり、初中級で学ぶ話し言葉の特徴が多く見られた。このことは、会話練習の延長線上に文章記述を位置づける指導が、文章としての不自然さを助長する可能性を示唆する。文章記述の練習は、誤用確認の記述とは区別し、叙述と思考のつむぎ方に配慮して書くよう指導すべきで、その配慮は初中級レベルから実施する必要があるのではないか。口頭での対話と文章での対話の違いについては詳細な基礎研究を見る必要があるが、書き言葉と話し言葉における対話の違いを、初級段階の実践でも考慮するきっかけにつながることを期待して、今回の調査結果を提示する。

A suggestion for the writing instruction to the non-native students
based on the survey of discussion pattern in writing
: through a comparison of the papers of Japanese students and researchers

We feel a kind of awkwardness to the reports of non-native students, especially on its discourse of narrative and discussion, even if there is no problem formally. I have illustrated the flows of sentences of 30 year-end reports of non-native, using the “discussion” verbs of Hanibe1990. And I found the difference in the pattern of discussion discourse of the reports of non-native students, through the comparison with the flows of sentences of each 30 reports of Japanese students and researchers. Also I have compared with the textual cohesion index, like the indexical expressions or the connection words (Murata2007). It was seen many features of the spoken language unlike the sentences of native. This means that there are insufficient points in the instruction of the text writing on an extension of the conversation practice. This time, I just list the problems that were found in the discourse of non-native students in this survey. Although it's necessary to further basic research in order to clarify the difference of the interaction of conversation and the discussion in the sentences, I expect that this small listing becomes an opportunity to think about the differences between the discussion of conversation and sentences in the practices.

参考文献

土部 弘(1990)「評論・論説の表現」『表現体系各論篇第二七巻 評論・論説の表現』冬至書房。

村田年(2007)「専門日本語教育における論述指導のための接続語句・助詞相当語句の研究」統計数理研究所特集第66巻第2号, pp269-284.

(※)本研究は、平成24～26年度科研基盤(C)24520598, ならびに、平成27～29年度科研基盤(C)15K02638の助成を受けた研究成果の一部である。

発表21

非漢字圏学習者はPCを用いてどのように文章を作成しているか

—ハンガリー人学習者を事例として—

相川弓映（早稲田大学大学院博士後期過程）

PCが普及して以来、手書きで文章を作成する機会は急激に減り、PCを用いて文章を作成することが多くなった。特に日本から遠く離れた地に住む学習者にとって、SNSのようなPCを用いた文章による対話が日本語学習の有効な手段の1つとなっている。最近ではSNSによる対話を取り入れている授業も多いだろう。一方で、PCの用い方は学習者に任されているのが現状だろう。手書きで文章を作成する場合と、PCを用いながら文章を作成する場合には、用いられるストラテジーは異なるはずである。学習者がPCを用いて文章を作成する際、どのような困難点があるかを知る必要があるのではないだろうか。

そこで、以下のような調査を行った。調査はSNS上にポストする予定の文章を、学習者が作成している様子を録画した。その後、学習者にインタビューを行った。以前漢字圏の学習者を対象として行った調査（相川2013）では、入力や辞書サイトを検索する際、漢字に依拠する特徴が見られた。本調査では、入力時に漢字圏学習者とは異なる困難点があることがわかった。また、非漢字圏の学習者でも、漢字を頼りに検索結果を照合する事例が見られた。

Non-Kanji background learners how make articles by PC

The opportunities of handwriting has been reducing since the spread of PC. There is an increase in the opportunity of writing by PC. Especially for learners who live a place that is far from Japan, interaction through text using a PC, such as the SNS has become one of the effective means of Japanese learning. Recently, it would be SNS are used as a training for Japanese lessons. Japan depends on foreign trade. On the other hand, give a thing into the hands of learners how to use the PC. The strategies of making articles should be different from handwriting and using a PC. That will probably need more research to know learners struggling with what.

Therefore, the author researched the following. The author recorded a scene what learners making articles for SNS on video deta. After that, interviewed to the learner. In previous surveys(Aikawa 2013) for the learners from Kanji Backgrounds, the author found they depend on Kanji. In this study, there is different from Kanji backgrounds and non-Kanji backgrounds to input Japanese. And sometimes non-Kanji backgrounds also depend on Kanji.

参考文献

相川弓映（2013年3月30日）.「『書く』ための検索リソース使用実態——二人の学習者を事例に」早稲田大学日本語教育学会2013年春季大会（早稲田大学）.

発表22

eポートフォリオを利用した作文指導に対する学習者のナラティブ分析：

振り返り活動が定着しなかった学習者の背景とICT教育の課題

毛利貴美(早稲田大学)
中井好男(大阪大学)

本研究は、ICTによる学習の蓄積を可能とするeポートフォリオ・システムを用いた作文指導プログラムに対して、学習者が自己の振り返りや誤用を修正する活動に対してどのように評価していたのかを調査し、分析したものである。

関西の私立大学留学生別科では2013年よりeポートフォリオを利用した作文指導を行っており、本調査では、2014年1月から2015年3月の学期末に留学生72名に対してeポートフォリオを用いた作文指導についてアンケートを行い、更にその中から無作為に選んだ留学生42名に対するインタビューの結果を全て録画・録音した。これらのデータを文字化し、分析した結果、文章産出時の誤用を自律的に振り返る活動が定着しない学習者からは「母国の指導法の影響」や「メタ認知的な活動への低評価」等が報告された。特に、振り返りの活動に関する教師と学習者の対話を分析した結果、彼らの「学習経験」という文脈の中で、ICTを利用した作文に対する評価や内省が行われていた。本発表では学習者のナラティブを通して、eポートフォリオにおける振り返り活動が定着しなかった背景とICT教育の課題について報告する。

Narrative of writing Japanese as a second language through e-portfolio : attributions to failure in reflective learning and issues of ICT use.

This study investigated and analyzed students' assessment of reflection and error correction activities performed by them during writing instruction with e-portfolio systems that enable learning through information and communications technology (ICT).

At private university in Kansai, Japan, writing instruction using e-portfolios has been taking place in Japanese language program preparatory courses for international students since 2013. This study involved a survey regarding writing instruction using e-portfolios, which was completed by 72 overseas students during the period between January 2014 and March 2015. Interviews were conducted with 42 of these students, each of whom were randomly selected; the interviews were filmed and audio recorded. The result of transcribing and analyzing the data revealed that the students who did not establish activities to autonomously reflect errors in written texts reported the 'influence of teaching methods from one's home country' and 'low assessments for meta-recognition activities'. In particular, after analyzing the interactions/dialogues between teachers and students in connection with reflection activities, an assessment and reflection on writing (using ICT) was conducted in the context of the students' learning experiences.

By means of student narrative inquiries, this study reports on the backgrounds of students who did not establish reflection activities in e-portfolios and ICT education issues.

発表23

移民2世の社会的統合過程におけるフリースクールの意義

-フリースクール卒業生のインタビューから-

奥蘭克彦（横浜国立大学大学院修士課程2年）

移民の受け入れを巡る議論のうち、特に移民の若者の社会的統合については大きな課題が存在する。本発表の目的は、移民2世として来日し言語文化的に異なる背景を持つ若者が、どのように困難を乗り越え、進路実現に至るのかを明らかにし、地域のフリースクールの意義を示すことである。筆者は、その若者が、いかにして人や社会と繋がりを築いていったのか、その関わりが移民の成長過程でどのような影響を与えたのかを課題に設定した。研究方法として、フリースクールのOBの若者にインタビューを行った。インタビューを分析するため、複線径路・等至性モデル(TEM)という手法を用い、学校や友人、そして地域のフリースクールなど、様々な影響を受けながら進路を切り開き、就職するに至るプロセスを明らかにした。その結果、非公的機関であるフリースクールのボランティア支援者との関わりが、学校や社会に彼が適応していく過程で大きな役割を果たしていることが明らかになった。考察として、移民2世における社会適応という点から、「多文化共生」社会の実現に課題を持つフランスにおける移民2世の社会的統合の問題にも触れつつ、地域コミュニティの重要性を示唆していく。

The significance of the free school in the social integration process of a immigrant second generation

In Japanese society today, there are many arguments about accepting immigrants. Generally young people with roots in foreign countries have different language and culture from Japanese ones. So they are difficult to access educational systems that are normal for Japanese people, and some of them are excluded from the chance that they select courses normally.

The purpose of this presentation focuses on a young people with roots in a foreign country and is to explore the significance of the free school. He was able to get over the wall in the growth process, and he now works at a company in Japan. This presentation discusses two problems. First, the problem is how he decides courses and careers from the experience of his school life. Second, the problem is how volunteers support him at his making these decisions. His experience obtained from interviews in three times. In his growth process, he talked about his family, schools, friends and some regional free schools with many supporters. We used an analysis method "trajectory equifinality model (TEM)". By the method, we illustrate how he adapted to schools and Japanese society, how a free school plays important roles to his adaptation in society.

参考文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012）『TEM でわかる人生の経路-質的研究の新展開-』誠信書房
- 齋藤ひろみ（2009）「子どもたちのライフコースと学習支援-主体的な学びを形成するために」『文化間移動をする子どもたちの学び教育コミュニティの創造に向けて』ひつじ書房
- 宮島喬（2002）「「新しい市民権」と地域市民権-フランスの移民新世代の国民化と市民化-」『応用社会学研究』No,44

初級教科書の対話に埋め込まれた社会規範

—社会文化行動に注目して—

伊藤誓子（埼玉大学）

保坂敏子（日本大学）

日本語教科書に無意識に埋め込まれている文化的メッセージを捉え、それを生かすことは異文化間理解の日本語教育につながると考える。本発表では、初級教科書に提示されている対話の背景にある「社会規範」に焦点を当て、その傾向を示し、教科書ごとに特徴を出し、その扱い方について考察する。分析対象は、『できる日本語』と『まるごと（かつどう）』である。山田（2001）の「行動様式」「価値観」「社会構造」「社会規範」の文化の体系を枠組みに、対話から抽出した社会文化的な行動様式が、どのような一般的に求められる「社会規範」を根底にしているのかを読み取り、教科書ごとの傾向を見た。その結果、『できる日本語』の対話の背景には、主に学生（留学生）が遭遇するであろう社会場面でスムーズにやりとりできるために必要な基本的な言動や習慣が社会規範として見出せた。『まるごと』は、多様な文化背景を持つ人々の対話場面に、日本社会で求められるであろう規範的な行動様式や話し方と日本文化の情報が提示されていることが読み取れた。この結果は教科書の持つ文化的側面の特性と捉えられ、より充実した授業形態の考案への基礎研究となると考える。

Social Norms Embedded in the Dialogue of Text Books for Beginners
-Focusing on Social and Cultural Behavior

Perceiving the cultural message understood in Japanese language textbooks leads us to the Japanese language education for intercultural understanding. In this paper, I reveal characteristics of each textbook and examine how we should deal with the each book, focusing on “the social norm” behind dialogues described in textbooks for beginners. I analyzed the textbooks “Dekiru Nihongo” and “Marugoto- coursebook for communicative language activities”. Using the cultural system of “behavioral patterns”, “the sense of values”, “the social structure” and “the social norms” conceptualized by YAMADA as the framework for analysis, we extracted “common social norms” from dialogues and clarified the feature of contents and descriptions in each textbook. In the result, “the social norm” described in the dialogues of the textbook “Dekiru Nihongo” is characterized by basic language and behavior as well as customs that are necessary for international students to communicate smoothly in social situations where they encounter living in Japan. For “Marugoto”, the social norm is described in dialogues among people with various cultural backgrounds and characterized by normative behavioral and speech patterns and information on Japanese culture necessary for living in Japanese society. This study is expected to be the foundation for designing well-developed methods for coursework.

参考文献

- 伊藤誓子・保坂敏子（2014）「言語と文化の媒介物としての教科書」『第18回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』AJE
山田泉（2001）「異文化間コミュニケーションと日本語教育」『日本語教育を学ぶ人のために』世界思想社